

筑後市内遺跡群Ⅱ

福岡県筑後市大字藏敷、高江、下北島、水田、長浜、鶴田、志、津島

所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第33集

2001

筑後市教育委員会

筑後市内遺跡群Ⅱ

しもきたじましくしひき
下北島櫛引遺跡

みずた やまぶし
水田山伏遺跡 (第1・2次調査)

ながはまあぶみ
長浜 釜 遺跡 (第1～3次調査)

つるた だいなん
鶴田大南遺跡

みずた しもさくらまち
水田下 桜町遺跡

くらかずながはらやま
蔵数長原山遺跡

つしまにしみた
津島西美田遺跡

しむらかきぞえ
志垣添遺跡

つしますぎき
津島洲崎遺跡

たかえ
高江シウジ遺跡

2001

筑後市教育委員会

序

市内で実施された発掘調査件数は130件以上を数えます。その大部分を占めるほ場整備関連の発掘調査も終了し、現在はその成果をまとめているところです。

本報告書は、その一部をまとめたものですが、地域における文化財や歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加者の方々に深く感謝します。

平成13年 3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例 言

1. 本書は、平成3～11年度に筑後市教育委員会が実施した筑後市内遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真などは筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。なお、発掘調査および整理作業の関係者は「1.調査経過と組織」に記したとおりである。
3. 調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としたため本書に示される方位はすべてG.N. (座標北)を示し、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。
4. 本書に使用した図面のうち、遺構の実測図は水見秀徳、小林勇作、上村英士、田中剛、柴田剛、大島真一郎 (現：黒木町教育委員会)、塚本映子 (現：三瀬町教育委員会)、末吉隆弥 (現：川崎町教育委員会)、奥村太郎、遺物の実測図は平塚あけみ、柴田が作成し、図版の浄書は平塚、仲文恵が行った。なお、下北島櫛引遺跡における遺構全体図は(株)朝日航洋に委託した。
5. 本書に使用した写真のうち、遺構の写真撮影は水見、小林、上村、田中、柴田、大島、塚本が行い、遺物の写真撮影は小林、上村、柴田が行った。
6. 本書に使用した遺構表示は下記の略号による。

SB-掘立柱建物	SD-溝	SE-井戸	SK-竪穴・土壇
SP-ビット	ST-墓	SX-周溝状遺構・落とし穴状遺構・不明遺構	
7. 本書は「8.水田下桜町遺跡」「9.歳数長原山遺跡」を柴田、「10.津島西美田遺跡」を上村、その他を小林が執筆し、編集は小林が担当した。

目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	3
III. 調査成果	7
1. 下北島柳引遺跡	7
(1) はじめに	7
(2) 検出遺構	7
(3) 出土遺物	8
(4) 小 結	14
2. 水田山伏遺跡 (第1次調査)	17
(1) はじめに	17
(2) 検出遺構	17
(3) 出土遺物	22
(4) 小 結	24
3. 水田山伏遺跡 (第2次調査)	26
(1) はじめに	26
(2) 検出遺構	26
(3) 出土遺物	28
(4) 小 結	28
4. 長浜館遺跡 (第1次調査)	29
(1) はじめに	29
(2) 検出遺構	30
(3) 出土遺物	30
(4) 小 結	30
5. 長浜館遺跡 (第2次調査)	31
(1) はじめに	31
(2) 検出遺構	31
(3) 出土遺物	31
(4) 小 結	31
6. 長浜館遺跡 (第3次調査)	32
(1) はじめに	32
(2) 検出遺構	32
(3) 出土遺物	32
(4) 小 結	34
7. 鶏田大南遺跡	35
(1) はじめに	35
(2) 検出遺構	35
(3) 出土遺物	37
(4) 小 結	38
8. 水田下桜町遺跡	39
(1) はじめに	39
(2) 検出遺構	40
(3) 出土遺物	45

(4) 小 結	57
9. 藏敷長原山遺跡	59
(1) はじめに	59
(2) 検出遺構	60
(3) 小 結	60
10. 津島西美田遺跡	63
(1) はじめに	63
(2) 検出遺構	63
(3) 小 結	64
11. 志垣添遺跡	67
(1) はじめに	67
(2) 検出遺構	67
(3) 出土遺物	68
(4) 小 結	68
12. 津島洲崎遺跡	70
(1) はじめに	70
(2) 検出遺構	70
(3) 出土遺物	74
(4) 小 結	76
13. 高江シウジ遺跡	78
(1) はじめに	78
(2) 出土遺物	78
(3) 小 結	78

Ⅰ.調査経過と組織

今回報告する筑後市内遺跡群Ⅱは、平成3～11年度に筑後市教育委員会が実施した一部の発掘調査成果をまとめたものである。

発掘調査における調査経過、実施期間、面積等は各遺跡の「(1)はじめに」に記し、発掘調査において出土した遺物の整理と報告書作成については、随時、筑後市役所内にある文化財整理室で行っている。

以下、報告する調査が多年度にまたがるため、ここで一括して調査並びに報告書作成の組織をあげる。

調査組織

1) 平成3年度調査体制(下北島橋引遺跡)

総括	教育長	森田基之
	教育部長	橋本益夫
庶務	社会教育課長	延文雄
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	永見秀徳・小林勇作(囑託：H3.8.1～)

2) 平成4年度調査体制(水田山伏遺跡第1次調査)

総括	教育長	森田基之
	教育部長	橋本益夫
庶務	社会教育課長	下川雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	永見秀徳・江崎紀彦・小林勇作(囑託)

3) 平成6年度調査体制(水田山伏遺跡第2次調査、長浜鍮遺跡第1・2次調査、高江シウシ遺跡)

総括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶務	社会教育課長	下川雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	永見秀徳・小林勇作
		塚本映子(囑託：H6.7.15～) [現：三瀬町教委]

4) 平成7年度調査体制(長浜鍮遺跡第3次調査、鶴田大南遺跡)

総括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶務	社会教育課長	下川雅晴(～H7.9.30)・山口逸郎(H7.10.1～)
	社会教育係長	本村正晴
	社会教育係	永見秀徳・小林勇作・田中剛
		塚本映子(囑託) [現：三瀬町教委]
		大島真一郎(囑託：H7.12.1～) [現：黒木町教委]

5) 平成8年度調査体制(水田下桜町遺跡、歳数長原山遺跡)

総括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶務	社会教育課長	山口逸郎
	社会教育係長	本村正晴
	社会教育係	永見秀徳・小林勇作・田中剛
		柴田剛(囑託)

6) 平成9年度調査体制 (津島西美田遺跡)

総括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
	庶務	社会教育課長 山口逸郎
		社会教育係長 田中清通
	社会教育係	永見秀徳・小林勇作・田中剛 柴田剛 (嘱託)・上村英士 (嘱託: H9.4.1~5.31) 立石真二 (嘱託: H9.8.1~)

7) 平成10年度調査体制 (志垣添遺跡)

総括	教育長	牟田口和良 (H10.4.7~)
	教育部長	下川雅晴
	庶務	社会教育課長 山口逸郎
		社会教育係長 田中清通
	社会教育係	永見秀徳・小林勇作・田中剛・上村英士 柴田剛 (嘱託)・立石真二 (嘱託)

8) 平成11年度調査体制 (津島洲崎遺跡)

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
	庶務	社会教育課長 庄村國義
		文化係長 田中僚一
	文化係	永見秀徳・小林勇作・上村英士 柴田剛 (嘱託)・立石真二 (嘱託: H11.6.1~)

9) 平成12年度報告書作成

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川雅晴
	庶務	社会教育課長 庄村國義
		文化係長 成清平和
	文化係	永見秀徳・小林勇作・上村英士 柴田剛 (嘱託)・立石真二 (嘱託)

10) 発掘調査参加者 (順不同、敬称略)

調査補助員	塚本映子・大島真一郎・野田洋子
発掘作業員	地元有志

11) 整理作業参加者 (順不同、敬称略)

整理補助員	平塚あけみ・江藤玲子
整理作業員	野間口靖子・江崎千鶴・馬場敦子・湊まど香・深川善子 野口晴香・湯川琴美・徳永みどり・横井理絵・仲文恵 高田知恵

発掘調査及び報告書作成に際しては以下の方々にご指導・ご教示を賜り、記して感謝の意を表したい。
佐々木隆彦、伊崎俊秋、馬田稔、新原正典、小田和利(福岡県教育庁)、城戸康利、中島恒次郎、山村信榮、下川可容子(太宰府市教育委員会)、狭川真一(元興寺文化財研究所)、富永直樹(久留米市教育委員会)

Ⅱ.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌溉用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

市内に点在する主な遺跡の調査地点についてはFig.1に図示し、その遺跡の概要についてはTab.1~3に表したので参照していただきたい。

平成12年3月31日現在

遺跡No	遺跡名	シリーズ番号	遺跡No	遺跡名	シリーズ番号
1	石人山古墳	-	39	鶴田中市ノ塚遺跡(第1次調査)	-
2	藤山遺跡(第1次調査)	第1集	40	若菜立木遺跡	第16集
3	狐塚遺跡	第2集	41	鶴田岸部遺跡(第2次調査)	第12集
4	稲王寺古墳	第3集	42	歳敷赤坂遺跡	第14集
5	歳敷東野原遺跡(第1次調査)	第4集	43	長浜野遺跡(第1次調査)	第33集
6	井原口遺跡	第4集	44	久富平遺跡	県教委第124集
7	前津中ノ玉遺跡(第1次調査)	第4集	45	岩大塚射場ノ本遺跡(第1次調査)	第17集
8	田徳遺跡	第5集	46	木田山伏遺跡(第2次調査)	第33集
9	歳敷森ノ水遺跡(第1次調査)	第6集	47	若菜田中野遺跡	第16集
10	高江遺跡	第7集	48	若菜湖ノ江遺跡	第16集
11	欠塚古墳	第8集	49	若菜橋ノ本遺跡(第1次調査)	-
12	上北島前田遺跡	第20集	50	鶴田岸部遺跡(第3次調査)	第12集
13	下北島久字遺跡	-	51	古島島相遺跡	第15集
14	歳敷森ノ水遺跡(第2次調査)	第20集	52	島田三反田遺跡	第15集
15	上北島島山遺跡(第2次調査)	-	53	久志野元遺跡(第1次調査)	第12集
16	西牟田賢寺遺跡	-	54	鶴田岸部遺跡(第4次調査)	第12集
17	歳敷坂口遺跡	-	55	新渡松原遺跡	第12集
18	前津塚山遺跡	-	56	鶴田中市ノ塚遺跡(第2次調査)	-
19	梅島遺跡(第1次調査)	-	57	久志梅原遺跡(第1次調査)	-
20	羽大塚中道遺跡(第1次調査)	-	58	長浜野遺跡(第2次調査)	第33集
21	上北島平塚遺跡	-	59	西牟田清徳遺跡	-
22	長崎坊田遺跡	第23集	60	岩大塚射場ノ本遺跡(第2次調査)	第17集
23	下北島久津遺跡	-	61	熊野原遺跡(第1次調査)	-
24	梅島遺跡(第2次調査)	第29集	62	歳敷東野原遺跡(第2次調査)	-
25	下北島引引遺跡	第33集	63	熊野原遺跡(第2次調査)	-
26	久富平ノ玉遺跡	県教委第168集	64	久志北草場遺跡(第1次調査)	第35集
27	若菜森坊田遺跡	-	65	久志内次郎遺跡(第1次調査)	第35集
28	高江坂口遺跡	県教委109集	66	鶴田大南遺跡	第33集
29	下北島極崎遺跡	第9集	67	西牟田小太郎丸遺跡	-
30	上北島花田遺跡(第1次調査)	-	68	常用ビシ七田遺跡	第29集
31	赤田山伏遺跡(第1次調査)	第33集	69	鶴田武津遺跡	-
32	四ヶ所古四ヶ所遺跡	第16集	70	高江柳遺跡	第32集
33	鶴田岸部遺跡(第1次調査)	第11集	71	若菜大塚遺跡(第1次調査)	-
34	新渡丸田遺跡	第11集	72	鶴田橋原遺跡(第2次調査)	-
35	鶴田橋原遺跡(第1次調査)	第11集	73	鶴田中市ノ塚遺跡(第3次調査)	-
36	久富島居遺跡	第13集	74	久志岸ノ下遺跡(第2次調査)	第35集
37	鶴田前田遺跡	第11集	75	水田正吹遺跡	第29集
38	井原西中野遺跡	第15集	76	長浜野遺跡(第3次調査)	第33集

Tab.1 周辺遺跡調査地点一覧表①

遺跡No	遺跡名	シリーズ番号	遺跡No	遺跡名	シリーズ番号
77	久恵川ノ上遺跡	第35集	105	津島北石伏遺跡	第21集
78	島田外船遺跡	第29集	107	溝口北新谷遺跡	第35集
79	久恵内大塚遺跡(第2次調査)	第35集	108	津島組々町遺跡	第26集
80	久恵中野遺跡		109	常用軒遺跡	
81	羽大塚中野遺跡(第2次調査)		110	常用野々下遺跡	
82	徳久中平田遺跡	第19集	111	津島南養生遺跡(第2次調査)	第21集
83	鶴田西田遺跡	第25集	112	水田伊勢ノ島遺跡	第29集
84	津島南島土遺跡(第1次調査)	第21集	113	志野浜遺跡	
85	水田杉ノ元遺跡(第1次調査)		114	津島南養生遺跡	第21集
86	浜江キント遺跡	第32集	115	久恵北水原遺跡	第30集
87	井田栗ノ内遺跡	第29集	116	久恵今町遺跡	第30集
88	鶴田東大塚遺跡(第1次調査)	第25集	117	折地長岡寺遺跡	第29集
89	鶴田西無遺跡	第25集	118	志野野々遺跡	第27集
90	常用日田行遺跡(第1次調査)		119	志上郷計遺跡(第1次調査)	
91	鶴田野田遺跡	第25集	120	志前田遺跡	第27集
92	若菜大塚遺跡(第2次調査)		121	常用野中遺跡	第27集
93	常用長田遺跡(第1次調査)		122	志下郷計遺跡(第1次調査)	第27集
94	高倉長原山遺跡	第33集	123	井田華越遺跡	第29集
95	常用日田行遺跡(第2次調査)		124	志下郷計遺跡(第2次調査)	第27集
96	常用長田遺跡(第2次調査)		125	新美大丸遺跡	第30集
97	鶴田中平ノ塚遺跡(第4次調査)		126	尾島下町裏遺跡	
98	水田下松町遺跡	第33集	127	井田下郷純遺跡	第29集
99	鶴田中平ノ塚遺跡(第5次調査)		128	志上郷計遺跡(第2次調査)	
100	古島榎崎遺跡(第1次調査)		129	鶴田東大塚遺跡(第2次調査)	第30集
101	久富大門口遺跡	第18集	130	鶴田廣代遺跡	第30集
102	津島西平田遺跡	第33集	131	志西田遺跡	
103	和泉近道遺跡		132	尾島東郷計遺跡	
104	南津ノ元遺跡(第2次調査)	第22集	133	尾島前田遺跡	
105	水田杉ノ元遺跡(第2次調査)				

Tab.2 周辺遺跡調査地点一覧表②

平成12年3月31日現在

遺跡No	遺跡名	調査期間	調査年度	遺跡の時代・性格(特記事項)	シリーズ番号
134	古島榎崎遺跡(第2次調査)	1998年05月	H10	縄文-弥生(溝)	
135	羽大塚中野ノ島遺跡	1998年05月-06月	H11	近世:集落(溝)	第24集
136	古島榎崎遺跡(第3次調査)	1998年05月-06月	H10	縄文-弥生:集落(竪穴式住居など)	
137	水田上平雲石遺跡(第1次調査)	1998年07月	H10	弥生:集落(土壌など)、中世(溝など)	
138	水田下平雲石遺跡	1998年09月-10月	H10	弥生:集落(クワーク)	第34集
139	志田浜遺跡	1998年09月-10月	H10	古墳(土壌など)	第33集
140	上北島井原口遺跡(第2次調査)	1998年09月-10月	H10	確認調査(古墳)	
141	水田上仁良集遺跡(第1次調査)	1998年09月-10月	H10	中世:集落(井戸、溝など)	第34集
142	鶴田東牛ヶ池遺跡(第1次調査)	1998年09月-10月	H10	縄文:(ヒットなど)	第36集
143	水田上平雲石遺跡(第2次調査)	1998年10月-11月	H10	弥生:集落(土壌)、中世:(溝)	第34集
144	鶴田東牛ヶ池遺跡(第2次調査)	1998年10月-11月	H10	縄文-弥生集落(竪穴式住居、土壌など)	第36集
145	水田上仁良集遺跡(第2次調査)	1998年11月	H10	中世-近世:集落(溝、土壌など)	第34集
146	鶴田牛ヶ池遺跡(第1次調査)	1998年11月-12月	H10	縄文:(卵など)	
147	鶴田牛ヶ池遺跡(第2次調査)	1998年11月-1999年02月	H10	古代官道	第36集
148	山ノ井川口遺跡	1998年11月-1999年02月	H10	弥生-中世:(古代官道、溝など)	
149	水田上平雲石遺跡(第3次調査)	1998年12月	H10	弥生:(糞)	
150	鶴田水尻ノ角遺跡	1998年12月-1999年02月	H10	古代-中世:(官道、土壌など)	第36集
151	鶴田西牛ヶ池遺跡	1998年12月-1999年03月	H10	弥生:(竪穴式住居など)	第36集
152	鶴田牛ヶ池遺跡(第3次調査)	1999年02月	H10	縄文:(ヒットなど)	第36集
153	鶴田牛ヶ池遺跡(第4次調査)	1999年02月-03月	H10	縄文-古墳:集落(竪穴式住居、糞など)	第36集
154	常用日田行遺跡(第3次調査)	1999年02月-03月	H10	弥生、中世:集落(溝、土壌など)	
155	久恵榎崎遺跡(第2次調査)	1996年01月-02月	H7	弥生-中世:(流路など)	
156	久恵東岸遺跡	1996年01月-03月	H7	弥生:集落(溝、欄干など)	
157	志八上川原遺跡	1996年01月-03月	H7	古墳:集落(竪穴式住居など)	
158	久恵岸ノ下遺跡(第1次調査)	1996年01月-03月	H7	縄文-古代-近世:(流路など)	第35集
159	常用ニラノ遺跡	1997年05月-06月	H9	弥生:集落	
160	志歌の内遺跡	1997年11月	H9	不明:(溝)	
161	志八反田遺跡	1997年11月	H9	不明:(溝)	
162	鶴田牛ヶ池遺跡(第5次調査)	1999年04月-05月	H11	縄文:(石組み卵など)、奈良-平安:(溝)	
163	津島榎崎遺跡	1999年05月	H11	奈良-平安、中世、近世:集落(溝、土壌など)	第33集
164	野野原根遺跡	1999年07月-08月	H11	奈良:集落(竪穴式住居など)	
165	上北島花畑遺跡(第2次調査)	1999年07月-09月	H11	弥生-古墳、中世、近世:集落(溝、土壌など)	第28集
166	上北島塚ノ本遺跡	1999年10月-11月	H11	縄文-弥生、中世:(溝、土壌など)	第31集
157	津野山ノ南遺跡	2000年02月-03月	H11	中世-近世(河川跡)	

※ 遺跡No.134-167は、「長崎岡田遺跡」筑後県文化財調査報告書 第22巻 筑後県教育委員会 1999「Tab.1・2に掲載されている遺跡の他に、発掘調査によって新たに追加されたものである。

Tab.3 周辺遺跡調査地点一覧表③



Fig.1 筑後市内埋蔵文化財発掘調査地点位置図 (1/30,000)

Ⅲ. 調査成果

1. 下北島櫛引遺跡

(1) はじめに (Fig.2)

当遺跡は筑後市大字下北島字櫛引1216-1外に所在し、標高7.5m以下の沖積低地上に立地する。事業者である筑後地所から試掘調査を依頼され、市教委ではこれを受けた。この結果、遺構や遺物を確認したため協議を行い、遺構が確認された部分(1,364㎡)について発掘調査を実施することで合意した。

調査期間は平成4年2月1日から同年3月31日までで、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。また、表土除去等に使用した重機は(有)福島建設、遺構全体実測図作成は(株)朝日航洋、空中写真撮影は(有)空中写真企画に委託した。

調査は小林勇作が担当し、調査の結果、調査区からは溝や土塼等を検出した。



Fig.2 下北島櫛引遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

溝

SD05 (Fig.4)

調査区の西側で約32m分を検出した北東-南西方向の溝である。黒褐色粘土を基調とする埋土で、深さは0.10~0.21mを測る。遺物は須恵器(鉢・甕)、土師器(皿・土鍋)、瓦器(片)、青磁(碗)、白磁(片)等が出土している。

SD08 (Fig.4)

調査区の北端で検出した北西-南東方向の溝である。3.5m分を検出したが、当溝から南東の方向に数基の遺構を検出しており、これらは当溝の痕跡である可能性がある。深さは0.06mで、土師器(片)、青磁(片)の遺物が認められた。

SD09 (Fig.4)

SD08の西隣で検出した北西-南東方向の溝である。約9.5m分を確認し、深さは0.11mを測る。黒色

粘土を基調とした埋土で、遺物は土師器(片)が認められた。

SD13 (Fig.4)

調査区北東隅で検出した北東-南西方向の溝である。土師器(片)が認められた。

SD15 (Fig.4)

調査区のはば中央に位置する。約30m分を検出し、溝の平面プランは一見すると緩やかな弧を描くように見えるものであるが、2ヶ所にコーナーを有した多角形状の溝とも捉えられる。埋土は黒茶色粘土を基調とし、深さは0.06~0.16mを測る。当溝が終息している先端の方向には埋土を同一とする遺構があり、当溝の痕跡である可能性が考えられる。遺物は須恵器(片)、土師器(環・甕・甕・片)、瓦器(椀)、白磁(椀)、染付(片)、陶器(片)等が出土している。

SD16 (Fig.4)

SD15中央部の北隅で検出した東西溝である。約8m分を検出し、深さは0.01~0.07mを測る。須恵器(甕)、土師器(小皿・片)、陶磁器(片)等が出土している。

SD20 (Fig.4)

調査区の南端で検出した東西溝で、SK10、SP01・02・14の遺構が溝を切っている。当溝より南側は丘陵が落ち込んでおり、この落ち込みに対して延びる溝が5ヶ所で確認されている。遺物は須恵器(環・蓋・甕)、土師器(環・甕)、黒色土器(椀)、青磁(椀)、陶器(播鉢)が出土している。

SD21 (Fig.4)

調査区北東隅で検出した南北溝で約4m分を確認し、土師器(片)を僅かに認めている。

SD22 (Fig.4)

SD21の北側で検出した南北溝で、約9m分を確認した。土師器(片)、丸木杭を認めている。

土壌

SK10 (Fig.3, Pla.2)

調査区の南東部でSD20を切るように検出した。長軸0.71m、短軸0.53m、深さ0.71mを測り、底部はほぼフラットな状態である。埋土は黒褐色粘土を基調とし、土壌内からは4つの河原石等を認め、その下位からは土師器(皿・環)が出土している。石や土器の表面には煤が付着しており、土壌内での焼成が考えられたが、土壌内壁に焼成痕が残っていないこと、堆積土に炭化物等が含まれていなかったことから、別の場所で焼成された遺物が廃棄された可能性が考えられる。

SK11 (Fig.4)

調査区北西隅で検出した。埋土は黒褐色粘土で、深さは0.13~0.18mを測る。須恵器(片)、土師器(土鍋・片)、青磁(片)、白磁(皿)、陶器(片)が出土した。

(3) 出土遺物

溝

SD05 (Fig.5, Pla.3)

土師器

皿 (1) 口径13.8cm、底径11.3cm、器高2.9cmを復原する細片である。外底は糸切りで内外面の調整はヨコナデである。

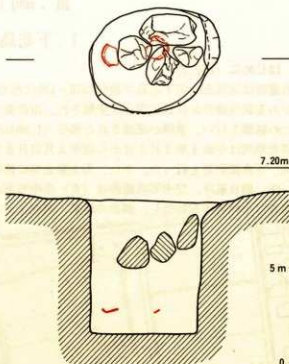
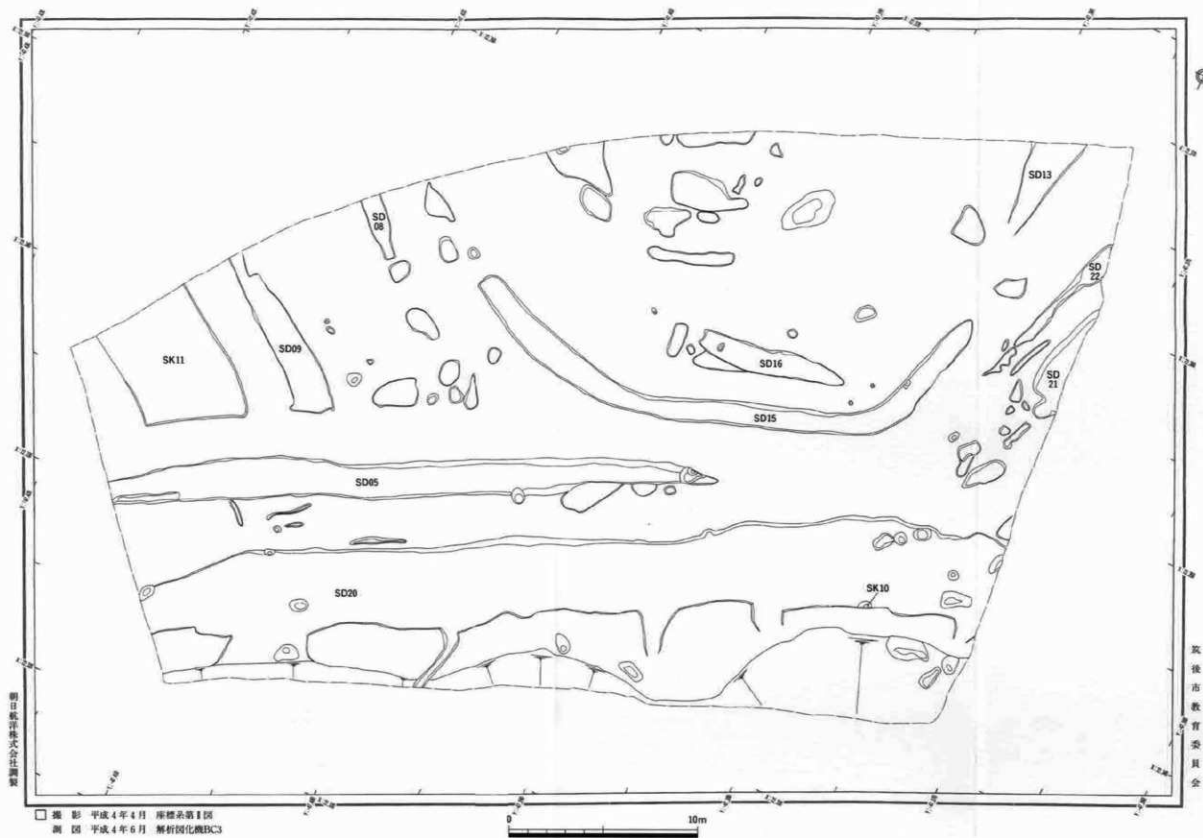


Fig.3 SK10実測図 (1/20)



高松市教育委員会

Fig. 4 下北島橋引道跡遺構全体実測図 (1/200)

土鍋 (2) 玉縁状の口縁を呈する土鍋で、口縁部内面は細かい斜方向の刷毛目、口縁端部から外面にかけてはヨコナデの調整を施す。

SD15 (Fig.5, Pla.3)

土師器

瓶 (3) 把手の細片で、胴部との接着部分は中央が突出している。把手の上面は刷毛目、その他はナデの調整である。

白磁

皿 (4) 底径5.0cmを復元し、底部の細片で胎土は粗く灰白色を呈する。透明に近い暗緑色の釉を施し、外底は釉を削り取っている。森田分類Ⅴ類か。

SD20 (Fig.5, Pla.3)

須恵器

蓋 (5) 口径14.2cm、底径10.0cm、器高1.5cmを復元する。外底はヘラケズリ、外面はヨコナデ、内面はナデの後ヨコナデの調整を施す。色調は暗青灰色で、胎土は微砂粒を少量含む。

碗 (6) 底部の破片で、高台径9.0cmを測る。内底はヨコナデの後ナデ、外底は回転ヘラ切り、体部及び高台の内外面はヨコナデの調整を施す。色調は暗青灰色で、胎土は微砂粒を少量含む。

土師器

坏 (7) 口径13.0cm、底径8.2cm、器高3.0cmを復元する。内外面の調整は著しく磨耗しているため不明である。

碗 (8-9) 8は高台径10.0cmを復元する細片で、調整は磨耗のため不明である。9は口径15.2cmを復元し、外底は回転ヘラ切りである。その他の調整は磨耗のため不明で、口縁部付近に煤が付着している。

瓶 (10) 把手の細片で、胴部との接着部分の中央が突出している。表面はナデ調整である。

黒色土器

碗 (11) 内面が燻されたいわゆるA類で、内面は僅かにミガキが看取されるが、磨耗が著しく調整は不明である。

越州窯系青磁

碗 (12) 全面に施釉しているもので、高台形状は蛇ノ目高台である。高台の畳付部には4ヶ所の胎土目跡があり、製作当初は5ヶ所あったものと思われる。高台径は5.4cmを測る。森田分類Ⅰ-1・a。

土壇

SK10 (Fig.5・6, Pla.4)

土師器

皿 (13) 口径15.0cm、底径11.6cm、器高1.6cmを復元する。外底は回転ヘラ切りで、他の内外面はヨコナデである。内面の一部に小動物による引っかき痕が残り、口縁部内面では煤が薄く、外面は煤が厚く付着している。

坏 (14) 口径12.8cm、底径6.3cm、器高3.3cmを測る。外底は回転ヘラ切り、他の内外面はヨコナデである。

石製品

台石? (28・29) 28・29は安山岩を石材とする。28は表面の中央部には敲痕?が残り、その周りには磨面が看取される。裏面には表面と同様に数ヶ所の敲痕?が残り、その周りは磨面が看取される。29は表面のほぼ中央部に敲痕?が残り、その周囲の面には僅かに磨面が看取される。更に、薄く煤が付着している。

SK11 (Fig.5, Pla.4)

土師器

土鍋 (15) 口縁部が玉縁状を呈した土鍋である。内面は横方向の細かい刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部はナデの調整を施す。

鍋 (16) 口縁部の細片で、口縁部は素口縁である。内面の調整は不明であるが、口縁部から体部にか

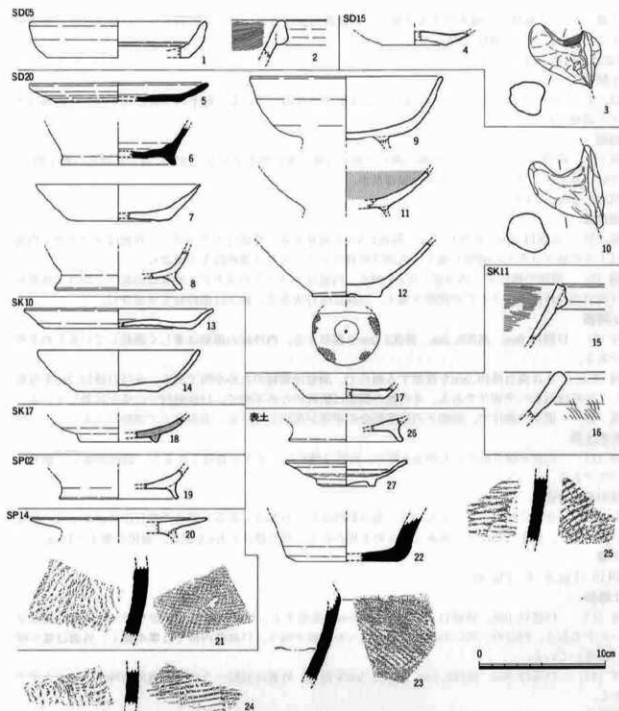


Fig. 5 下北島橋引遺跡出土遺物実測図① (1/3)

けてはヨコナデで、体部は後に刷毛目を施している。

白磁

皿 (17) 底径6.2cmを復元する底部の細片である。全面に乳白色の釉を施しているが、外底の一部には施釉されていない部分がある。森田分類IX-1・aか。

SK17 (Fig.5、Pla.4)

瓦器

碗 (18) 底部の細片で、高台径は6.0cmを復元する。体部下位はヘラケズリ、高台及び高台内はヨコナデの調整を施す。

SK10

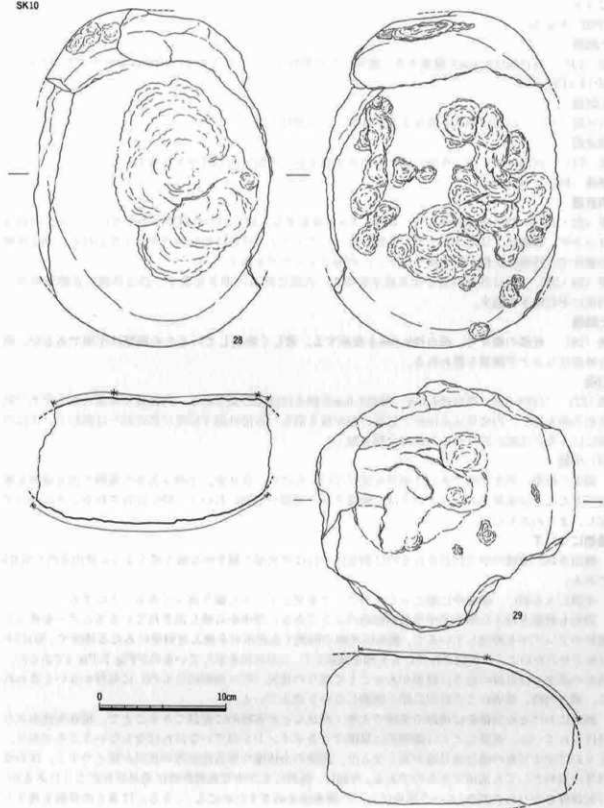


Fig. 5 下北島引遺跡出土遺物実測図② (1/3)

ビット

SP02 (Fig.5)

土師器

椀 (19) 高台径は9.4cmを復原する。磨耗のため調整はわかりにくい、内面はヨコナデと思われる。

SP14 (Fig.5)

土師器

台付皿 (20) 口径14.0cmを復原する。磨耗のため調整不明。

須恵器

甕 (21) 体部の細片で、外面には平行叩き後刷毛目、内面は同心円叩きを施す。

表採 (Fig.5, Pla.5)

須恵器

壺 (22・23) 22は底部の細片で、底径9.4cmを復原する。細片のため調整がわかりにくい、内面はヨコナデ、体部は工具によるナデ、体部下位はヘラケズリ、外底は回転ヘラ切りと思われる。23は体部の細片で、外面は正格子叩き後ヨコナデ、内面はヨコナデを施す。

甕 (24・25) 24は外面に格子叩き後平行叩き、内面に同心円叩きを施す。25は外面に正格子叩き、内面に平行叩きを施す。

土師器

椀 (26) 底部の細片で、高台径9.0cmを復原する。著しく磨耗しているため調整は不明であるが、高台外面はヨコナデ調整と思われる。

白磁

皿 (27) 口径9.6cm、高台径4.6cm、器高2.0cmを測るほぼ完形品である。内面及び体部外面上位まで乳灰色の釉を施し、内底見込みは蛇ノ目状に釉を掻き取る。体部外面下位及び高台部分は露胎で、体部内面には1条の沈線が施される。森田分類Ⅱ類。

(4) 小結

調査の結果、調査区内は著しく削平を受けていたものの、溝9条、土壇3基等の遺構や出土遺物を確認できたことは成果であった。以下は、確認された遺構や遺物において、特に注目されることについて記し、まとめたい。

遺構について

検出された遺構の中で注目されるのは調査区のはほぼ中央部で緩やかな弧を描くように検出されたSD15である。

本題に入る前に、調査中に起こったエピソードを交えて、少し振り返ってみることにする。

調査も終盤を迎えた頃の空中写真撮影時のことである。空中から映し出されているモニターを使って撮影の角度を確認していると、調査区北側で西流する花宗川を挟んだ対岸にあたる場所で、SD15を反転させたかのように区画されている土地を確認した。この状況を示しているのがFig.7, Pla.1であるが、通常の調査では目線の高さに限界があることで周りの状況（特に地形的なもの）に気付かないと思われる。調査当時、筆者はこの状況に深く感動したのを覚えている。

調査における写真撮影は遺跡や遺構の立地・形状などを客観的に記録できることで、現在も使用され続けられている。重要なことは論理的に展開できるポイントを得ていなければならないところであり、とりわけ空中写真の場合は目線が高くなる分、遺跡の全体像や周辺地形等の状況が捉えやすく、後の検討等の資料としても活用できるのである。今回は、偶然にも空中写真撮影時に発見されたことにあるが、「記録保存のための調査」という原点になった調査法をめざすためにも、できるだけ多くの資料を残すとともに忠実に報告しておきたいところである。

本題に入るが、こうした状況から、関連性の高いSD15と花宗川について触れる。

まず、検出されたSD15はかなりの削平を受けている状態で、溝の痕跡を僅かに認めたに過ぎない。平面プランは、一見緩やかな弧を描くようにも見えるが、2ヶ所にコーナーを有した多角形状の溝のよう

にも看取される。9～17C代の遺物が混入して出土しており、何れも図示しがたい小片に加え、微量であったため、溝の存続から埋設の過程に至る時期については明らかでない。

次に、花宗川は、矢部川・星野川の合流点下流の地点に江戸時代初期（年代不詳）に築造された花宗堰から取水する人工河川（『筑後市史－第1巻』参照）で、分流或いは乱流状態になった自然河川を整備して現在の花宗川が築造された可能性が考えられる。

ここで、調査を今一度振り返ってみることにする。当遺跡は地形的にみると、緩やかな微高地が続く南斜面に位置する。調査区南端部は丘陵の落ち込みが始まり、更に南へ広がるものと考えられる。このことから、花宗川が築造される以前は、この落ち込みに対して自然河川が西流していたことが考えられる。しかし、現在の花宗川は調査区北端を西流していることから、何らかの理由によって人工的にルートが変更されていることになる。現段階ではその理由を追及することはできないが、担当者は検出されたSD15と何らかの関係があったのではないかと考える。

さて、花宗川を挟んだ対岸において、SD15に続くと考えられる区画された土地については既に触れたところであるが、ここでSD15が花宗川対岸に見える区画された土地と一体であったことを前提に、担当者の私見を述べてみたい。

SD15に区割りされた土地は多角形状に区割りされたもので、平面プランからもその特異性が見受けられる。残念ながら建物等の遺構は確認されておらず、その土地がどのように利用されていたのかはわからないが、敢えてその土地を2分するように人口河川（花宗川）が築造されたことになる。これは、その土地（施設等）を閉鎖する等の目的で意図的に河川のルートを変更したということが考えられ、更にそれを裏付けるかのように、現在の花宗川はこの場所からすぐさま南西方向へルートを変えているのである。あくまで推測の域であるが、自然河川が存在していたにも関わらず、敢えて河川ルートの変更という厳しい状況を選んだ理由は、相当なものであると感じるのである。

遺物について

当遺跡から出土した遺物についてであるが、市内の発掘調査において初めて輸入陶磁器である越州窯系青磁碗を認めている。合わせて、出土した輸入陶磁器は白磁（皿）、龍泉窯系青磁（碗）、同安窯系青磁（碗）、明代染付（碗）で、国産の磁器である備前焼（甕）も認めている。

これまで、越州窯系青磁の出土例は、鴻臚館や大宰府跡といった臨海地帯に多く出土しているのが知られており、出土した遺跡は、官衙やそれに付属する施設の可能性等が考えられているところが多い。また、消費層もある程度限定されているかのようで、最近では公私貿易の存在も指摘されている。このことから、越州窯系青磁が出土したことにより、当遺跡の特異性が考えられるところである。

まとめ

先程から注目しているSD15は、何かを取り巻くかのように検出された溝で、この状況から考えられるのは有力者の居宅等が存在する土地を外周する濠ないしは区画溝であったと思われる。溝内部にあたる区画された場所からは主体部（建物跡等の施設）らしき遺構を確認しておらず、特定はできない。しかし、このような区画溝は、これまで長崎坊田遺跡や島田外屋敷遺跡でも報告されており、荘園に関連する遺跡として注目されるであろう。（この他若菜森坊遺跡、井田西中野遺跡、若菜立萩遺跡からも同様の溝が検出されている。）

発掘調査によって、徐々にではあるが当該期における資料が蓄積されつつあるので、当遺跡の成果は注目される資料として評価できるものと考えられる。

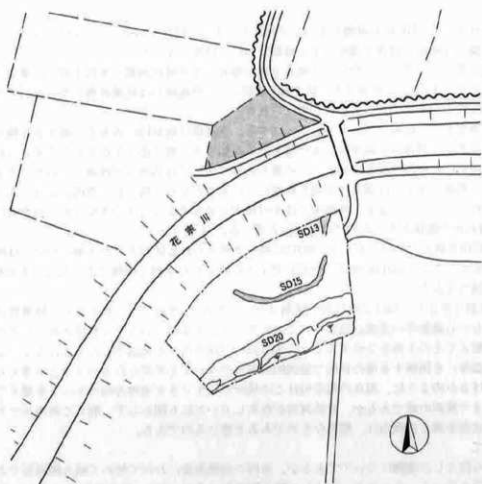


Fig.7 下北島橋引遺跡周辺図 (1/1,100)



下北島橋引遺跡遠景 (空中写真：南から)

2. 水田山伏遺跡（第1次調査）

(1) はじめに (Fig.8)

当遺跡は筑後市大字水田字留主、現在の筑後中学校敷地内に所在し、標高8m位の沖積低地上に立地する。武道場建設に伴う発掘調査で、調査面積は300㎡、調査期間は平成4年10月12日から同年10月31日まで実施した。この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、重機は(有)福島建設、基準点測量は(株)久栄総合コンサルタント、空中写真撮影は(有)空中写真企画に委託、調査は小林勇作が担当した。

なお、今回報告する遺跡名は当市が採用している「大字名+小字名」と一致しないが、調査当時の遺跡名を採用している。また、遺構番号は調査次数の重複を避けるために「S」の前に次数番号を与えた。



Fig. 8 水田山伏遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

掘立柱建物

ISB25 (Fig.9, Pla.7)

北側調査区のはほぼ中央で検出された。検出した柱穴はP1～6であるが、建物は更に南方向へ延びるものと思われる。また、P3～4間はカクランが確認されており、柱穴が消滅している可能性がある。P1～2間は1.25m、P2～3間は0.95m、P4～5間は1.17m、P5～6間は1.15mで、南北軸の方位はN-5°-Wである。遺物はP2・3・4・6から弥生土器を認めている。

周溝状遺構

ISX35 (Fig.9)

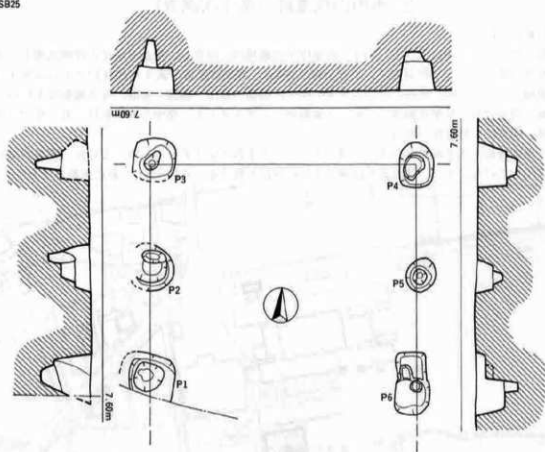
北側調査区の西端で検出した。円形状を呈する周溝状遺構で、遺構は著しく削平やカクランを受けている。埋土は黒茶色土を基調とし、外径2.80m前後、内径1.65m前後、深さ0.09～0.17mを測る。弥生土器(甕・片)が出土している。

溝

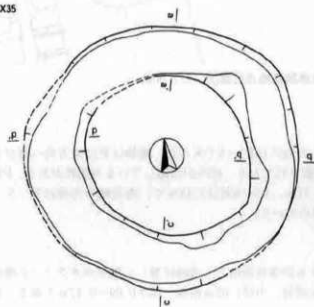
ISD10 (Fig.10・11)

北側調査区のはほぼ中央から検出した南北溝である。6.3m分を確認し、上幅0.25～0.32m、下幅0.16m

1SB25



1SX35



7.40m

1SX35

a-a'

1. 流黄赤粘土 (流黄赤色70-70%)
2. 流黄赤粘土 (流黄赤色70-70%)



7.50m

b-b'

1. 流黄赤土 (流黄赤土面)
2. 流黄赤粘板土
3. 流黄赤粘土



7.60m

c-c'

1. 流黄赤土 (流黄赤土面)
2. 流黄赤土
3. 流黄赤粘板土



7.50m

d-d'

1. 流黄赤土
2. 流黄赤粘土



Fig. 9 1SB25・1SX35実測図 (1/40)

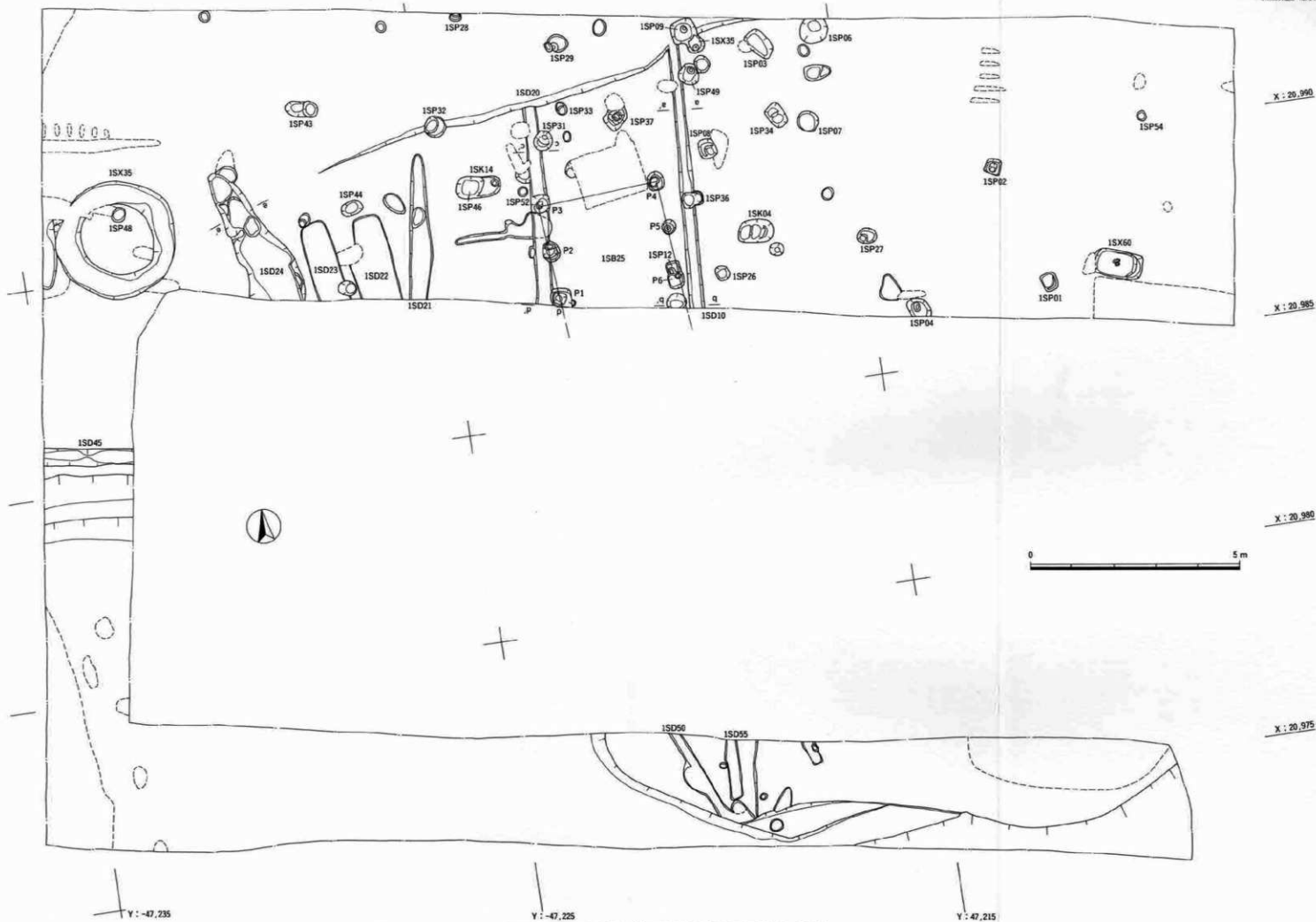


Fig.10 水田山伏遺跡 (第1次調査) 遺構全体実測図 (1/80)

前後、深さ0.15m前後を測る。1SP36・49に切られ、出土遺物は皆無であった。

1SD20 (Fig.10・11)

北側調査区をやや西よりで検出した南北溝で、1SB25 (P1~3)、1SP29・31・52に切られる。4.7m分を確認し、上幅0.31~0.37m、下幅0.24~0.33m、深さ0.08~0.15mを測る。遺物は弥生土器(高坏・片)が出土した。

1SD21 (Fig.10)

北側調査区西側で検出した南北溝で、3.45m分を確認した。上幅0.29~0.55m、下幅0.23~0.47m、深さ0.07m前後を測り、中央の溝底には深さ0.10cm程度の窪みを呈する。出土遺物は弥生土器(甕・片)を認めている。

1SD22 (Fig.10)

1SD21の西隣で検出した。約2m分を確認し、一部にカクランを受けている。弥生土器(甕・片)、青磁(片)が出土した。

1SD23 (Fig.10)

1SD22の西隣で1.95m分を検出した。1SP47に切られ、弥生土器(甕・器台・片)が出土した。

1SD24 (Fig.10・11)

1SX35の東隣で約3.5m分を検出した。溝底は凹凸が著しく、遺物は弥生土器(甕・高坏・器台・甕棺・片)が出土した。

1SD45 (Fig.10)

西側調査区のはほぼ中央で検出した東西溝である。約2.1m分を確認し、幅0.4m前後、深さ0.06m前後を測る。溝底はほぼフラットであるが、一部は狭小になっている。遺物は弥生土器(片)、須恵器(甕)が出土した。

1SD50 (Fig.10)

南側調査区のはほぼ中央から検出した浅い溝である。長さは2.7m分を確認し、遺物は弥生土器(甕)が出土している。

1SD55 (Fig.10)

1SD50の東隣で長さ1.4m分を検出した南北溝で、北側調査区から検出している1SD10に繋がる溝と考えられる。出土遺物はない。

土壇

1SK04 (Fig.12)

北側調査区の東側で検出した隅丸長方形形状の土壇である。長軸0.87m、短軸

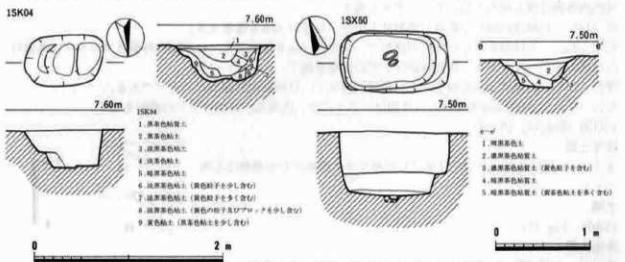
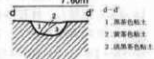
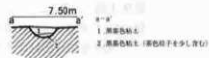


Fig.12 1SK04・1SX60実測図 (1/40)

Fig.11 溝土層断面
実測図 (1/40)

0.56m、深さ0.37mを測り、土壌内東側にテラスを呈する。遺物は弥生土器(甕・器台・片)が出土している。

落とし穴状遺構

1SX60 (Fig.12)

北朝調査区の南東隅で検出した長方形の遺構である。長軸1.16m、短軸0.64m、深さ0.63mを測り、底部に2穴の小穴を認める。小穴の深さは10cm前後を測り、出土遺物は皆無であった。

(3) 出土遺物

掘立柱建物

1SB25 (P6) (Fig.13)

弥生土器

甕 (1) 底径9.0cmを復元する底部の細片である。外面はヨコナデ、内面及び外底はナデ調整を施す。

溝

1SD23 (Fig.14, Pla.7)

弥生土器

甕 (2・3) 2は口縁部細片で、断面が鋤先状の口縁部を呈する。3は底部の細片で、底径5.3cmを復元する。底部は強く絞られたくびれ部から「ハ」の字状に開き、外底部はいわゆる「上げ底」を呈する。

器台 (4) 底径7.6cmを測る破片で、調整は内面がナデ、外面はヘラケズリである。

1SD24 (Fig.16, Pla.7・8)

弥生土器

鉢 (5-7) 5は口径20.4cm、底径10.0cm、器高11.7cmを復元する破片で、体部外面は横方向の工具によるミガキ、体部内面はナデで、口縁部内外面は剝離しているため調整不明である。6は底径10.0cmを復元し、体部外面は横方向の工具によるミガキ、体部内面はナデの調整を施す。7は底径5.0cmを復元し、調整は磨耗のため不明。

甕 (8-13) 8-10は口縁部断面が鋤先状の口縁部を呈する破片で、8は口径22.0cm、9は口径26.0cm、10は口径30.0cmを復元する。11・12は底部の破片で、強く絞られた底部に「上げ底」の外底部を呈し、共に底径は5.0cmを測る。13はくびれ部径22.0cmを復元する。口縁部の端部及び内外面はヨコナデで、体部内外面は横方向の工具によるミガキを施す。

壺 (14) 口縁部の細片で断面が鋤先状を呈し、口径27.0cmを復元する。

高坏 (15) 半球形を呈した杯部の細片で、口径22.0cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は横方向のヘラミガキ、体部内面はナデの調整を施す。

甕棺 (16) 口径37.0cmを復元する口縁部の細片で、口縁部内外面はヨコナデである。

器台 (17) 底径9.0cmを復元し、外面はヘラケズリ、内面及び外底はナデの調整を施す。

1SD50 (Fig.16, Pla.8)

弥生土器

壺 (18) 口縁部断面が鋤先状を呈した細片で、磨耗のため調整は不明である。

土壇

1SK04 (Fig.15)

弥生土器

甕 (19) 口縁部断面が鋤先状を呈した細片で、磨耗のため調整は不明。

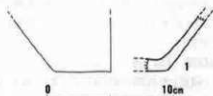


Fig.13 1SB25 (P6) 出土土器
実測図 (1/3)

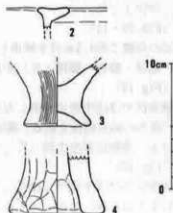


Fig.14 1SD23出土土器実測図 (1/3)

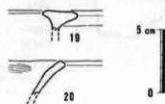


Fig.15 1SK04出土土器
実測図 (1/3)

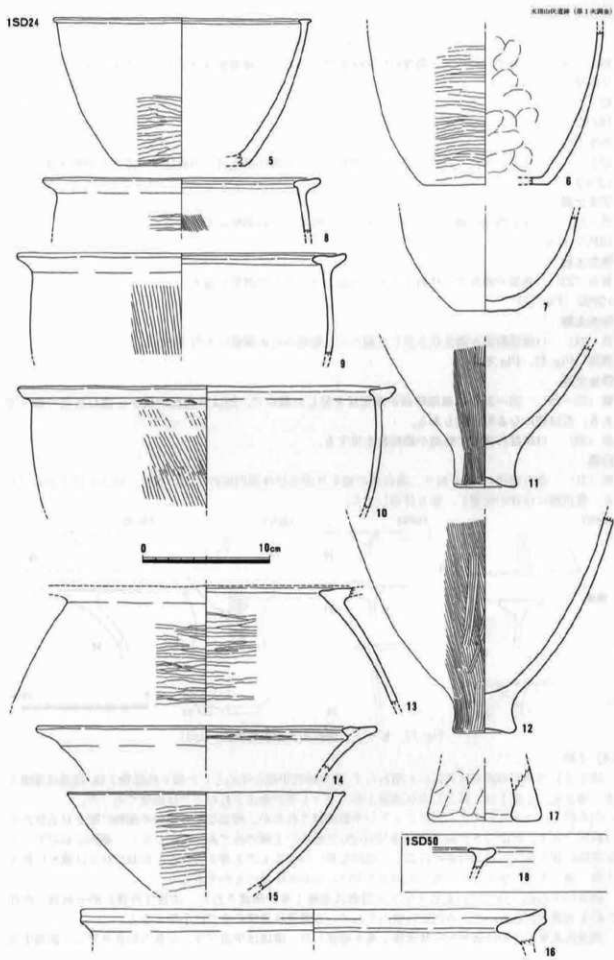


Fig. 16 1SD24・50出土土器実測図 (1/3)

器台 (20) 口縁部の細片で、器厚は0.55cm前後である。口縁端部はヨコナデ、内面は刷毛目?、外面は調整不明である。

ビット

1SP02 (Fig.17)

弥生土器

器台 (21) 底部の細片で、底径10.0cmを復原する。外面は刷毛目、内面はヨコナデの調整を施す。

1SP09 (Fig.17)

弥生土器

甕 (22) 口縁部断面が鋤先状を呈した細片で、磨耗のため調整は不明である。

1SP27 (Fig.17)

弥生土器

器台 (23) 底部の細片で、外面はナデ、内面はヨコナデの調整を施す。

1SP52 (Fig.17)

弥生土器

甕 (24) 口縁部断面が鋤先状を呈した細片で、磨耗のため調整は不明である。

表採 (Fig.17, Pla.8)

弥生土器

甕 (25~29) 25~28は口縁部断面が鋤先状を呈した細片で、29は外底部が僅かに窪む底部の細片である。27は壺になる可能性もある。

壺 (30) 口縁部の細片で断面が鋤形状を呈する。

白磁

碗 (31) 高台部径4.7cmを測り、淡白色の釉を外面及び体部内面の上位に施し、見込み部は露胎である。豊付部には砂が付着し、煤も付着している。

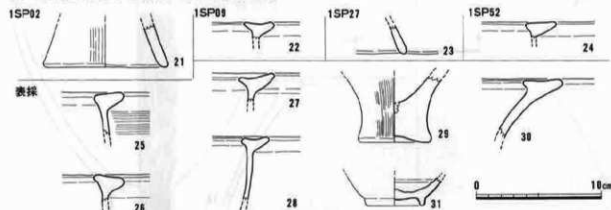


Fig.17 ビット、表採出土土器実測図 (1/3)

(4) 小結

限定された狭小の調査区設定にも関わらず、弥生時代中期を中心とした掘立柱建物1棟、周溝状遺構1基、溝9条、土壇1基、落とし穴状遺構1基、ビット等が検出されたことは成果であった。

調査区からは柱穴と考えられるビットが多数確認されたが、残念ながら柵列や建物に配される柱穴とは断定できず、確認できた掘立柱建物(1SB25)は僅かに1棟のみであった。しかし、検出されたビットが建物に伴う柱穴である可能性は高く、規模も更に広がるものと考えられる。1SB25からは僅かに弥生土器(甕)1点が出土している。決め手に欠けるが弥生中期のものであろう。

調査区北西部ではほぼ円形状を呈する周溝状遺構1基が確認された。流量は外径2.80m前後、内径1.65m前後を測るもので、市内から検出されている周溝状遺構の中では小型となる。

調査区北東部からは落とし穴状遺構1基を確認した。遺構は平面プランが長方形状を呈し、底部中央

に2穴のビットを認めるもので、遺構のタイプは市内から確認されている中で最も多いものである。

更に9条の溝が検出されたが、その性格は不明である。遺物のみと1SD24から集中的に出土しており、須玖式土器、黒髮式土器の系統を含むものである。この時期の遺物は、当遺跡付近で調査された「水田杉ノ元遺跡」からも出土している。現在整理中であるので詳細なことは記述できないが、弥生中期を中心とした土壌や溝が確認されている。当遺跡との関係については調査成果とともに明らかにされることであろう。

（以下は非常に淡く印刷されたと思われる文章が続くが、内容は上記の文脈と一致すると思われる。詳細な内容は読み取れない。）



図10 遺構の断面図

3. 水田山伏遺跡 (第2次調査)

(1) はじめに (Fig.8)

当遺跡は筑後市大字水田字留主、現在の筑後中学校敷地内に所在し、標高9m位の沖積低地上に立地する。浄化槽設置に伴う発掘調査として平成6年7月29日から同年8月1日に44mを実施した。この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、重機は(有) 福島建設、空中写真撮影は(有) 空中写真企画に委託、調査は水見秀徳が担当し、塚本映子(現:三瀬町教委)の協力を得た。

なお、今回報告する遺跡名は本市が採用している「大字名+小字名」と一致しないが、調査当時の遺跡名を採用している。また、遺構番号は調査次数の重複を避けるために「S」の前に次数番号を与えた。

(2) 検出遺構

妻棺墓

2ST1 (Fig.18, Pla.9)

調査区の北西隅から検出した。墓壙は楕円形状を呈し、西側は削平されている。墓壙底面に貼り付いたように上甕及び下甕の一部が確認された。

溝

2SD3 (Fig.20)

調査区の中央部で検出した南北溝で、2SD4を切る。3.35m分を確認し、深さは0.04~0.06mと浅い。遺物は弥生土器(甕)が出土している。

2SD4 (Fig.20)

調査区の中央部で、2SD3に切られるように検出した南北溝である。3.22m分を確認し、深さは0.04mと浅い。出土遺物は弥生土器(片)が認められた。

土壇

2SK2 (Fig.20)

調査区の北西隅で検出した土壇で、2ST1を切るように確認された。深さは0.11~0.23mを測り、土壇底部は西側が若干深くなっている。遺物は弥生土器(大甕)が出土している。

2SK5 (Fig.20)

調査区の東側で検出した楕円形状の土壇で、長軸1.16m、短軸0.69m、深さ0.09mを測る。出土遺物は皆無であった。

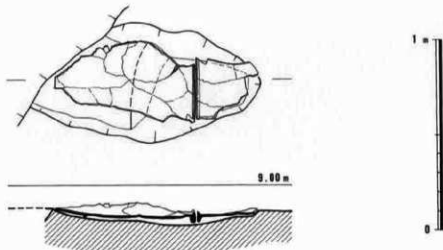


Fig.18 2ST1実測図 (1/20)

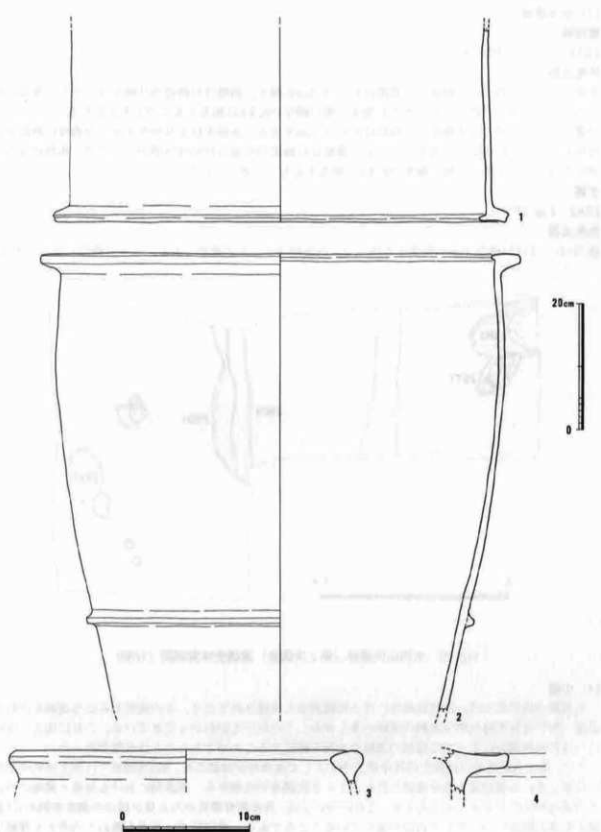


Fig. 19 土壇出土土器実測図 (1/3・1/6)

(3) 出土遺物

甕棺墓

2ST1 (Fig. 19, Pla. 10)

弥生土器

上甕 (1) 口径72.0cmを復原し、器厚は1.0~1.1cmを測る。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部内面はナデ、体部外面は斜め方向のナデを施す。橋口編年のKⅡcに相当するものと考えられる。

下甕 (2) 口径76.0cmを復原し、器厚は0.8~1.2cmを測る。体部中位よりやや下がった箇所断面が台形状を呈した貼付突帯を1条施している。調整は口縁部内外面及び貼付突帯がヨコナデ、体部内外面は不定方向のナデを施す。橋口編年のKⅡcに相当するものと考えられる。

土塊

2SK2 (Fig. 19)

弥生土器

甕 (3・4) 3は口径28.0cmを復原する細片で、内外面はヨコナデ調整である。4は口縁部の細片である。

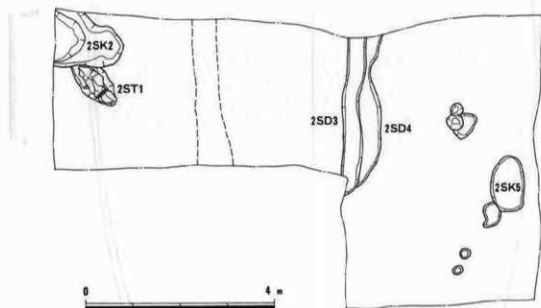


Fig. 20 水田山伏遺跡（第2次調査）遺構全体実測図 (1/80)

(4) 小結

当遺跡の周辺部では、ほ場整備等に伴う発掘調査も実施されており、その成果からは当遺跡を含む周辺部一帯には弥生時代中～後期の遺跡が多く分布していたことがわかってきている。これに加え、今回の一連の発掘調査によって当該期の遺構や遺物を確認することができたことは成果であった。

さて、第1次調査からは弥生時代中期を中心とした集落跡が確認され、第2次調査では弥生時代中期前半に比定される甕棺墓1基が確認された。1・2次調査の成果から、当該期における集落と墓地についての関連が気になるところであるが、これについては、本市教育委員会の永見が「周辺の調査事例から「墓域と集落の関係について」の自説を論じているところである。現段階では筆者も概ねこの考えを理解するところであるが資料不足の感も否めず、今後の課題である。

4. 長浜鎮跡 (第1次調査)

(1) はじめに (Fig.21)

当遺跡は筑後市大字長浜字鎮に所在し、標高約18m位の低位段丘上に立地する。

長浜コミュニティパーク新設事業に伴う発掘調査で、掘削の及ぶ浄化槽設置部分を実施した。調査面積は53㎡、調査期間は平成6年6月2日から同年7月15日までで、この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。重機は(有)福島建設に委託し、調査は小林勇作が担当した。

なお、当遺跡の発掘調査は複数の調査を行っており、各遺跡の遺構番号の重複を避けるために「S」の前に調査回数番号を与えている。

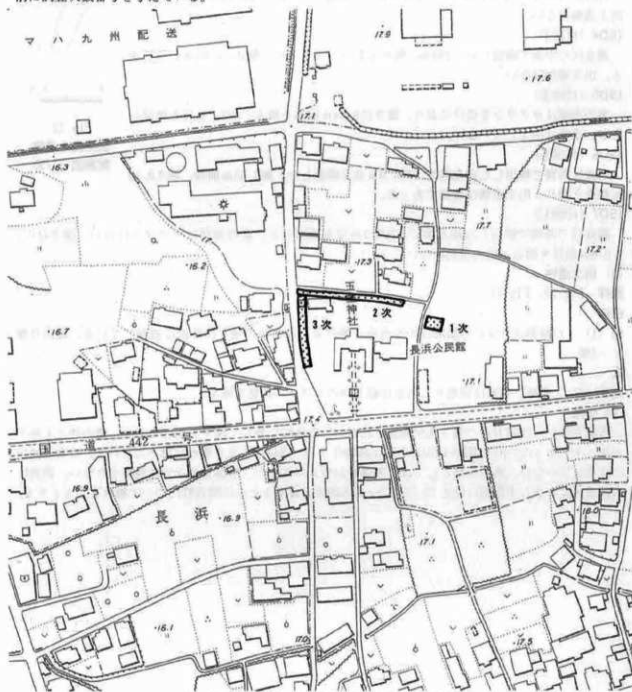


Fig.21 長浜鎮跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

溝

1SD1 (付図①)

調査区の東側で検出した南北溝で、約4.4m分を確認した。幅0.45m前後、深さ0.05m前後と浅く、出土遺物は皆無であった。

1SD2 (付図①)

1SD1とはほぼ並行にはしる溝で、1SD3を切る。約4.7m分を確認し、深さは0.1m前後と浅い。遺物は土師器(片)、染付(片)が出土した。

1SD3 (付図①)

1SD2に切られるように検出し、約4.8m分を確認した。深さは0.15m前後を測る。出土遺物はない。

1SD4 (付図①)

調査区の中央で確認した。1SD5に繋がるものと考えられ、深さは0.05m前後を測る。出土遺物はない。

1SD5 (付図①)

溝の南部はカクランを受けており、深さは0.04m前後を測る。約2.7m分を確認したが、遺物は出土していない。

1SD6 (付図①)

調査区西側で検出した南北溝で、約4.9m分を確認した。幅0.53m前後、深さ0.10m前後を測り、出土遺物は皆無であった。

1SD7 (付図①)

調査区の西側で検出した南北溝で、約3.7m分を確認した。溝の南部はカクランに合い、深さは0.3~0.6m前後を測る。出土遺物はない。

(3) 出土遺物

表塚 (Fig.22, Pla.11)

白磁

碗(1) 口縁部は外反し、端部はやや丸味を帯びる。乳白色の釉を内外面に施軸している。森田分類V-3類。

瓦

九瓦(2) 側縁と端部は面取り、内面は縦方向のケズリの調整を施す。

(4) 小結

当調査区からは同方向の溝7条が検出されたが、全体的に著しく削平を受けており、溝の埋土も殆どが単一土であった。出土遺物は1SD2から土師器片1点、染付片1点を僅かに認めただけで、時期の決定には至っていない。溝の性格としては区画溝等が考えられるが、当調査のみでは判断できない。調査は当調査区に止まらず後稿に控えている第2・3次調査の成果とともに関連性について触れることとする。

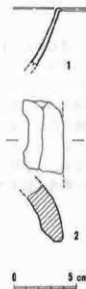


Fig.22
表塚出土遺物
実測図(1/3)

5. 長浜遺跡 (第2次調査)

(1) はじめに (Fig. 21)

当遺跡は筑後市大字長浜字鑑に所在し、標高約18m位の低位段丘上に立地する。道路改良工事に伴う発掘調査で、掘削の及ぶ47mを実施した。調査期間は平成6年12月4日から同年12月6日までで、この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。重機は(有)福島建設に委託し、調査は永見秀徳が担当し、大島真一郎(現:黒木町教委)の協力を得た。

なお、当遺跡の発掘調査は複数の調査を行っており、各遺跡の遺構番号の重複を避けるために「S」の前に調査回数番号を与えている。

(2) 検出遺構

溝

2SD3 (Fig. 23)

調査区のほぼ中央で、約1.6m分を検出した。溝の土層断面から2SD4を切るようで、深さは0.30m前後を測る。出土遺物は皆無であった。

2SD4 (付図①)

2SD3に切られるように検出し、深さは0.32m前後を測る。出土遺物は皆無であった。

(3) 出土遺物

カクラン跡 (Fig. 24, Pla. 12)

石器

二次加工石器 (1) 長二等辺三角形の剥片を素材とし、側縁に二次加工を施して利器としている。

(4) 小結

当調査区から確認された遺構の大半はカクランで、僅か溝2条を検出したに止まった。溝の切り合いは2SD4→2SD3(古→新)で、少なくとも2回の掘り直しを施しているようである。第1次調査で検出された溝との関係はわかっていない。

出土遺物はカクラン跡から石器1点が確認されているが、残念ながら遺構の時期を示しているものは断定できない。

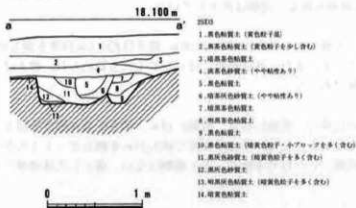
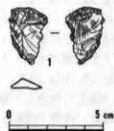


Fig. 23 2SD3土層断面実測図 (1/40)

Fig. 24 カクラン跡
石器実測図 (1/2)

6. 長浜遺跡 (第3次調査)

(1) はじめに (Fig. 21)

当遺跡は筑後市大字長浜字籠に所在し、標高16.5m位の低位段丘上に立地する。道路改良工事に伴う発掘調査で、掘削の及ぶ233㎡を実施した。調査期間は平成8年1月29日から同年2月23日までで、この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。重機は(有)福島建設に委託し、調査は塚本映子(現:三浦町教委)が担当した。

なお、当遺跡の発掘調査は複数の調査を行っており、各遺跡の遺構番号の重複を避けるために「S」の前に調査次数番号を与えている。

(2) 検出遺構

落とし穴状遺構

3SX3 (Fig. 25, Pla. 14)

調査区のはほぼ中央で検出した。長軸1.07m、短軸0.77m、深さ0.68m程度を測り、遺構底部中央に深さ0.20mのビット1穴を呈する。主軸はN-70°-Eを測り、埋土は黒色粘質土を基調とした自然堆積であった。遺物は出土していない。

溝

3SD5 (付図④)

調査区南部で検出した南北方向の溝である。途中、3SK6に切られ、溝の両端はカクランを受けている。約5.6m分を確認し、幅は0.19~0.34m、深さは0.10m前後を測る。埋土は黒茶色粘質土を基調とした自然堆積で、流水は伴っていない。出土遺物は皆無であった。

3SD7 (付図④)

調査区の北側で約2.5m分を検出したが、溝の両端はカクランを受けている。幅0.55m、深さ0.10m前後を測り、出土遺物は皆無であった。

土壇

3SK1 (付図④)

調査区の北側で検出し、遺構東側は調査区にかかる。更に、遺構の南部はカクランを受けているが、径は3.3m前後に復原され、深さは0.31m前後を測る。遺物は出土していない。

3SK2 (Fig. 25, Pla. 14)

調査区の南端から検出された楕円形状の土壇である。径は2.78~3.06m、深さは約0.5m程度を測るが、底部中央は不定形に更に深く掘り込まれている。また、底部西側にはビット1穴も認められ、埋土は黒茶色粘質土を基調とする。出土遺物は皆無であった。

3SK4 (Fig. 25, Pla. 15)

調査区の南部で検出した隅丸長方形形状の土壇で、長軸2.41m、短軸2.10m、深さ0.48m程度を測る。土壇底部には、西側で径0.6~0.8mを測るビットが2穴、更に中央部で径0.15mを測るビット1穴がそれぞれ確認された。埋土は茶色粘質土を基調とした自然堆積で、出土遺物はない。落とし穴状遺構になる可能性が考えられる。

3SK6 (Fig. 25, Pla. 15)

3SD5を切る楕円形状の土壇で、径は2.3m前後、深さは0.32m程度を測る。土壇底部のやや東よりに径0.5m前後のビットが1穴確認された。埋土は暗茶色粘質土を基調とした自然堆積で、出土遺物は皆無であった。

(3) 出土遺物

調査区で検出された主要な遺構からは遺物を認めていない。表採及びカクランからは土師器(片)、磁器(皿・碗・壺・片)、陶器(片)、鉄製品(片)、瓦(片)などが出土したが、図示しうるものでなかった。ここでは省略した。

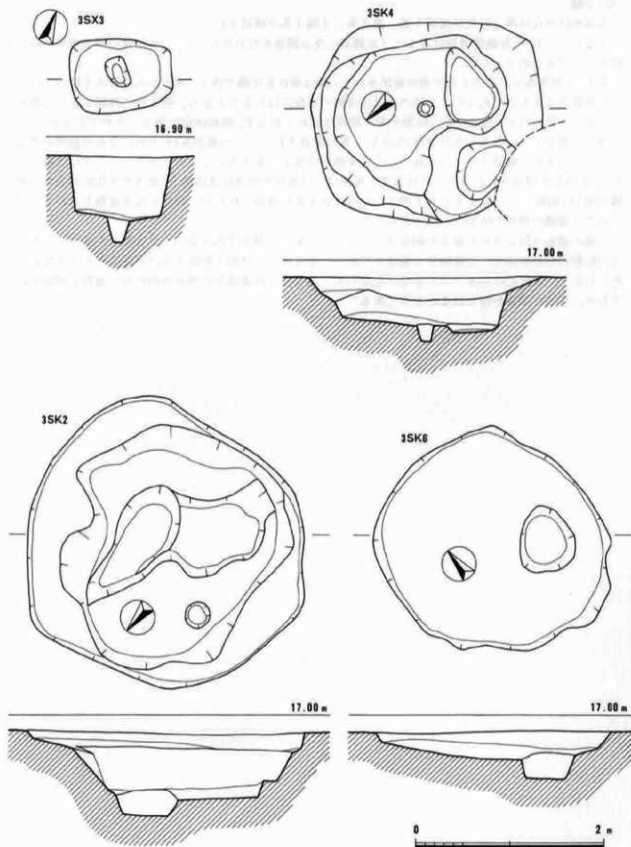


Fig. 25 落とし穴状遺構、土壌実測図 (1/40)

(4) 小結

当調査区からは落とし穴状遺構1基、溝2条、土壇4基が確認された。

先述したとおり、長浜遺跡群は第1～3次調査に及ぶ調査が行われた。ここでは一連の調査成果を振り返ることでまとめたい。

第1・2次調査からは主として溝が検出された。溝は何れも小溝で浅く、埋土からは流水を伴っていないと判断されるものであった。一連の溝はほぼ同一方位にはしることから、何らかの規制によって作られたものと思われる。残念ながら時期を促す資料は認めておらず、時期決定に至ることができなかった。

第3次調査からは落とし穴状遺構(3SX3)1基が確認された。この他3SK4がそれになる可能性が考えられたが、市内で確認されている落とし穴状遺構の法量よりも大きいことがわかり、ここでは土壇とした。(市内から確認された落とし穴状遺構の規模は、『筑後西部地区遺跡群』筑後市文化財調査報告書第29集に掲載している。)また、土壇とした遺構は4基が確認されたが、何れも出土遺物を認めていないので、遺構の性格や時期は不明である。

一連の調査は限定された狭小の調査区ということに加え、調査区内は著しくカクランを受けていた。この影響のためか出土した遺物量も極僅かであり、結果として時期を断定するに至ることができなかった。しかし、これだけのカクランを受けながらも、落とし穴状遺構等の残存状態の良い遺構も確認されており、今後の調査が待たれるところである。



図11 遺跡平面図と 調査坑(3SX3)の断面図

7. 鶴田大南遺跡

(1) はじめに (Fig. 26)

当遺跡は筑後市大字鶴田字大南1430-7外に所在し、標高13m位の低位段丘上に立地する。道路拡幅工事に伴う発掘調査で、調査面積は103㎡、調査期間は平成7年8月3日から同年8月11日まで実施した。この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、重機は(有) 福島建設に委託、調査は小林勇作が担当し、田中剛の協力を得た。

なお、調査区は便宜上A～Dを設定し、遺構番号については調査時の番号を採用した。

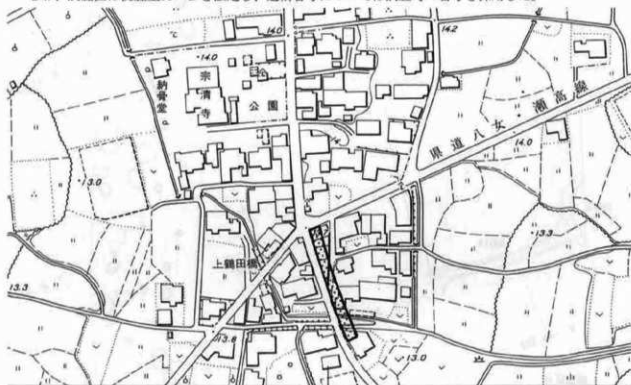


Fig. 26 鶴田大南遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

調査区 A

溝

SD10 (Fig. 27)

調査区Aの南端で検出した緩やかな弧を描く東西溝である。約4.2m分を検出したが、溝の西端はSK05を切り、東端はカクランを受けている。幅は0.30m前後、深さは0.45m前後を測り、遺物は土師器(小皿・土鍋・片)が出土した。

土壇

SK05 (Fig. 27)

調査区Aの北西隅で検出した。遺構の西部は調査区外に広がるもので、深さは0.86mを測る。遺物は土師器(すり鉢)が僅かに認められた。

不明遺構

SX03 (Fig. 27)

調査区Aの北西隅で検出した。遺構は一見、溝状を呈するように確認されたが、遺構南端はカクランを受け、これより南部では確認されなかった。遺構の西部は調査区外へ広がることから平面プランは不明で、深さは0.44mを測る。遺物は土師器(土鍋・片)が出土している。

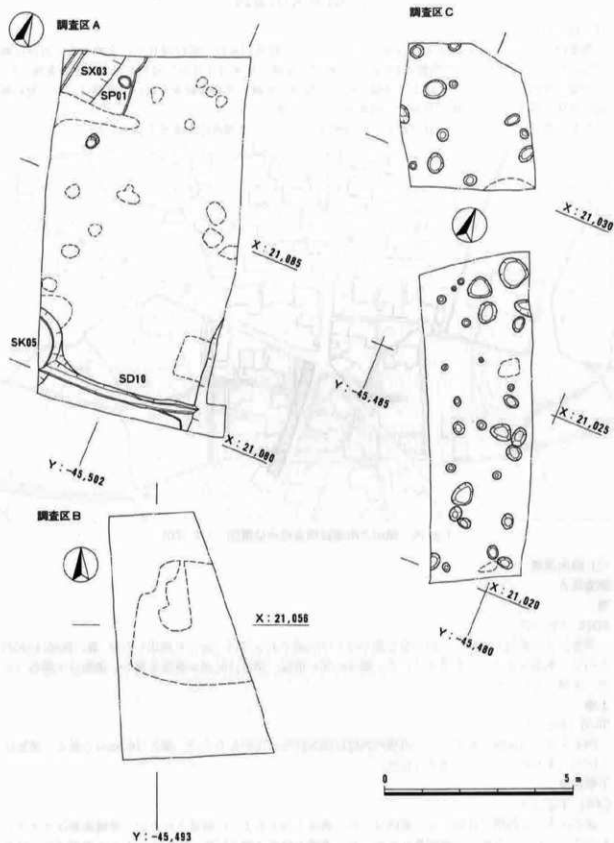


Fig. 27 鶴田大南遺跡遺構全体実測図 (1/100)

ピット

SP01 (Fig.27)

調査区Aの北西隅で検出され、SX03を切る。径は0.30m前後、深さは0.19mを測り、土師器（火舎・片）が出土した。

調査区B・C

調査区B・Cからは現代のカクラン及び多数のピットを確認したが、遺構の性格は不明であった。

(3) 出土遺物

調査区A

不明遺構

SX03 (Fig.28, Pla.18)

土師器

土鍋 (1) 玉縁状を呈した口縁部で、口径35.0cmを復原する。体部中位付近に1条の沈線を施し、体部外面は煤が厚く付着している。調整は口縁端部がヨコナデ、内面上位及び外面はナデ、下位は横方向の刷毛目である。

ピット

SP01 (Fig.28)

土師器

火舎 (2) 体部の細片で、外面に断面三角形の貼付突帯を施す。調整は内面がナデ後ヨコナデ、貼

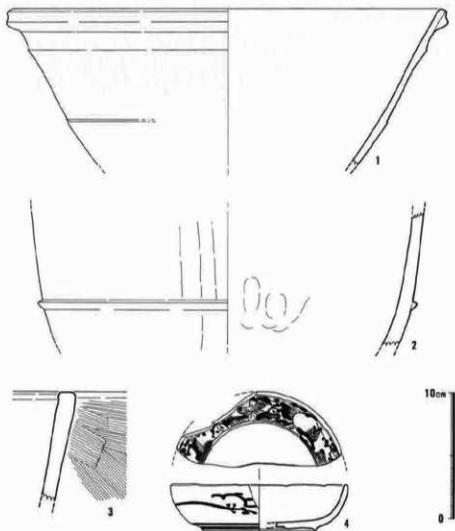


Fig.28 鶴田大南遺跡出土土器実測図 (1/3)

付突帯部分はヨコナデ、外面は縦方向のヘラケズリ後ヨコナデである。内面には煤が付着している。
カクラン跡 (Fig. 28, Pla. 18)

土師器

鉢 (3) 口縁部の細片で、口縁端部から内面にかけてはヨコナデ、外面は斜め方向の刷毛目を施す。

染付

皿 (4) 口縁部は輪花を呈し、口径14.0cm、高台径9.0cm、器高3.7cmを復原する。体部内面及び外面には植物系の文様を具須で描き、素地は乳白色で透明釉を全面に施釉している。高台内は蛇の目状に釉を掻き取る。

調査区B・C

調査区B・Cからの出土遺物はない。

(4) 小結

発掘調査は道路拡幅工事に伴って実施されたため、限定された狭小の調査区設定となった。調査の結果、溝1条、土壇1基等といった遺構が確認されたのみで、遺跡の全体像を把握するには至っていない。また、出土遺物をみても時期の決め手となるものはなく、判断しがたい結果であるが、中世以降の遺物も認められているので、周辺には当該期の遺構が点在している可能性はあると思われる。



図28 調査区B・C出土土師器類の位置図 46 p.1

8. 水田下桜町遺跡

(1) はじめに (Fig.29)

当遺跡は筑後市大字水田下桜町824外に所在し、矢部川中流域の標高約7m程の低台地状に立地する。

調査は平成8年度に道路改良工事予定地の約350㎡を調査対象とした。調査は平成8年2月21日から重機による表土剥ぎを開始し、同年2月28日からは作業員を投入し、遺構の検出、掘削作業を行った。全ての遺構掘削後、同年3月15日に全景写真を撮影した。その後、測量及び実測を行い、同年3月18日をもって全ての現地調査を終了した。

調査区は上段・下段に分かれており、何れも表土直下に黄褐色粘土の地山が現れる(遺構面)。現況が田であったため、多少の掘削を受けているものの、調査区全面に遺構が確認できた。検出遺構は溝4条、井戸4基、土壇7基、不明遺構8基、ピットなどを検出した。なお、本調査は柴田剛が担当した。

以下は、検出した遺構及び出土遺物について報告する。



Fig.29 水田下桜町遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

当調査区は上段と下段に分かれており、上段の遺構検出面の標高は約7.0~7.2m、下段の遺構検出面の標高は約6.3~6.6mを測る。調査の結果、表土直下に遺構面を確認した。

土墳

SK01 (Fig. 30, Pla. 20・21)

遺構検出時において、甕が埋まった状態で出土し、甕片が周辺に散乱している状況であった。遺構は円形状を呈しており、甕は体部が欠損した状態で確認し、掘り方は長軸0.64m、短軸0.60m、深さ0.14mを測る。甕の内部から土師器(甕)、磁器が廃棄された状態で出土した。近世の所産であろう。

SK05 (Fig. 31, Pla. 21・22)

SK05を記述する前に、重複する遺構(SD10・33)との関係について述べる。

調査の遺構検出時(黄茶色粘質土)において、別遺構(SD10・33)が切り合っていることが判らず、SK05として掘り下げた結果、土層観察から別遺構(SD10・33)が切り合っていることがわかった。そのため、大部分をSK05の出土遺物として扱った。なお、SD10として掲載した遺物(Fig. 54)に関しては、土層確認後の出土遺物であるのでSK05とは明確に区別しているため混入遺物ではないことを断っておく。また、SD33の遺物に関しては、気付くのが遅くSK05の遺物として取り上げているため、SD33の掲載遺物はない。

SK05は検出長3.60m、深さ0.41mを測り、逆台形状を呈する。遺物は土師器(小皿・

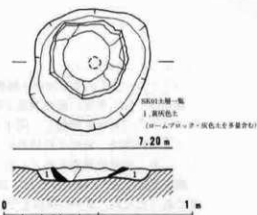


Fig. 30 SK01実測図 (1/20)

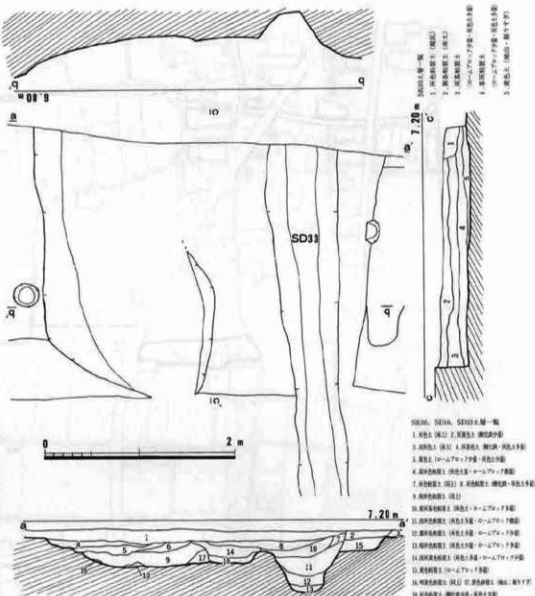


Fig. 31 SK05、SD10・33実測図 (1/40)

- SK05、SD10、SD33土層一層
1. 黄茶色粘質土 (埋土)
 2. 黄茶色粘質土 (埋土)
 3. 黄茶色粘質土 (埋土)
 4. 黄茶色粘質土 (埋土)
 5. 黄茶色粘質土 (埋土)
 6. 黄茶色粘質土 (埋土)
 7. 黄茶色粘質土 (埋土)
 8. 黄茶色粘質土 (埋土)
 9. 黄茶色粘質土 (埋土)
 10. 黄茶色粘質土 (埋土)
 11. 黄茶色粘質土 (埋土)
 12. 黄茶色粘質土 (埋土)
 13. 黄茶色粘質土 (埋土)
 14. 黄茶色粘質土 (埋土)
 15. 黄茶色粘質土 (埋土)
 16. 黄茶色粘質土 (埋土)
 17. 黄茶色粘質土 (埋土)
 18. 黄茶色粘質土 (埋土)
 19. 黄茶色粘質土 (埋土)
 20. 黄茶色粘質土 (埋土)
 21. 黄茶色粘質土 (埋土)
 22. 黄茶色粘質土 (埋土)
 23. 黄茶色粘質土 (埋土)
 24. 黄茶色粘質土 (埋土)
 25. 黄茶色粘質土 (埋土)
 26. 黄茶色粘質土 (埋土)
 27. 黄茶色粘質土 (埋土)
 28. 黄茶色粘質土 (埋土)
 29. 黄茶色粘質土 (埋土)
 30. 黄茶色粘質土 (埋土)
 31. 黄茶色粘質土 (埋土)
 32. 黄茶色粘質土 (埋土)
 33. 黄茶色粘質土 (埋土)
 34. 黄茶色粘質土 (埋土)
 35. 黄茶色粘質土 (埋土)
 36. 黄茶色粘質土 (埋土)
 37. 黄茶色粘質土 (埋土)
 38. 黄茶色粘質土 (埋土)
 39. 黄茶色粘質土 (埋土)
 40. 黄茶色粘質土 (埋土)
 41. 黄茶色粘質土 (埋土)
 42. 黄茶色粘質土 (埋土)
 43. 黄茶色粘質土 (埋土)
 44. 黄茶色粘質土 (埋土)
 45. 黄茶色粘質土 (埋土)
 46. 黄茶色粘質土 (埋土)
 47. 黄茶色粘質土 (埋土)
 48. 黄茶色粘質土 (埋土)
 49. 黄茶色粘質土 (埋土)
 50. 黄茶色粘質土 (埋土)
 51. 黄茶色粘質土 (埋土)
 52. 黄茶色粘質土 (埋土)
 53. 黄茶色粘質土 (埋土)
 54. 黄茶色粘質土 (埋土)
 55. 黄茶色粘質土 (埋土)
 56. 黄茶色粘質土 (埋土)
 57. 黄茶色粘質土 (埋土)
 58. 黄茶色粘質土 (埋土)
 59. 黄茶色粘質土 (埋土)
 60. 黄茶色粘質土 (埋土)
 61. 黄茶色粘質土 (埋土)
 62. 黄茶色粘質土 (埋土)
 63. 黄茶色粘質土 (埋土)
 64. 黄茶色粘質土 (埋土)
 65. 黄茶色粘質土 (埋土)
 66. 黄茶色粘質土 (埋土)
 67. 黄茶色粘質土 (埋土)
 68. 黄茶色粘質土 (埋土)
 69. 黄茶色粘質土 (埋土)
 70. 黄茶色粘質土 (埋土)
 71. 黄茶色粘質土 (埋土)
 72. 黄茶色粘質土 (埋土)
 73. 黄茶色粘質土 (埋土)
 74. 黄茶色粘質土 (埋土)
 75. 黄茶色粘質土 (埋土)
 76. 黄茶色粘質土 (埋土)
 77. 黄茶色粘質土 (埋土)
 78. 黄茶色粘質土 (埋土)
 79. 黄茶色粘質土 (埋土)
 80. 黄茶色粘質土 (埋土)
 81. 黄茶色粘質土 (埋土)
 82. 黄茶色粘質土 (埋土)
 83. 黄茶色粘質土 (埋土)
 84. 黄茶色粘質土 (埋土)
 85. 黄茶色粘質土 (埋土)
 86. 黄茶色粘質土 (埋土)
 87. 黄茶色粘質土 (埋土)
 88. 黄茶色粘質土 (埋土)
 89. 黄茶色粘質土 (埋土)
 90. 黄茶色粘質土 (埋土)
 91. 黄茶色粘質土 (埋土)
 92. 黄茶色粘質土 (埋土)
 93. 黄茶色粘質土 (埋土)
 94. 黄茶色粘質土 (埋土)
 95. 黄茶色粘質土 (埋土)
 96. 黄茶色粘質土 (埋土)
 97. 黄茶色粘質土 (埋土)
 98. 黄茶色粘質土 (埋土)
 99. 黄茶色粘質土 (埋土)
 100. 黄茶色粘質土 (埋土)

環・土鍋・播鉢・火鉢・風炉・不明土製品、須恵器（環）、瓦質土器（土鍋・火鉢・茶釜）、陶磁器（皿・碗）、石器（敲石・磨石）が出土した。

SK06 (Fig. 32, Pla. 22)

掘乱に切れ、隅丸方形を呈する遺構である。埋土は灰黄色粘質土の単一層で、長軸1.50m、短軸1.30m、深さ0.11mを測る。遺物は土師器（土鍋・鉢）が出土した。14～15世紀の所産であろう。

SK08 (Fig. 33)

円形状を呈する遺構である。埋土は灰黄色粘質土、黄褐色土に分かれ、長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.61mを測る。遺物は土師器（土鍋）が出土した。14～15世紀の所産であろう。

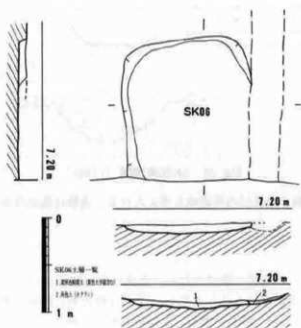


Fig. 32 SK06実測図 (1/40)

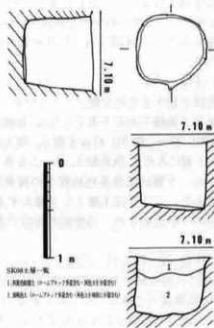


Fig. 33 SK08実測図 (1/40)

SK09 (Fig. 34)

円形状を呈する遺構である。埋土は灰黄色粘質土の単一層で、長軸0.55m、短軸0.47m、深さ0.34mを測る。遺物は土師器（小皿）が出土した。13世紀の所産であろう。

SK25 (Fig. 35, Pla. 23)

長方形を呈する遺構である。埋土は遺構検出時の暗灰色粘質土（1層）を基本とし、ロームブロック、暗黒色土を

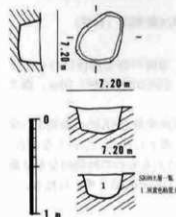


Fig. 34 SK09実測図 (1/40)

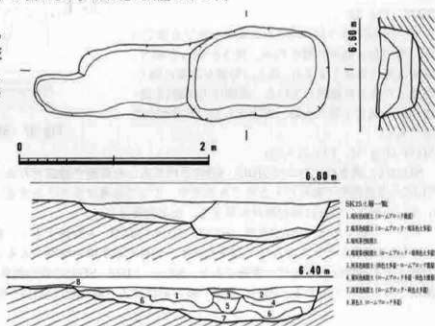


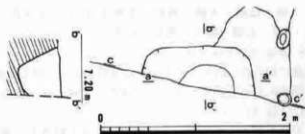
Fig. 35 SK25実測図 (1/40)

多量に含んだ状態であった。長軸3.12m、短軸0.94m、深さ0.44mを測る。底面は東に行く程深くなっている。遺物は土師器(不明土製品)、龍泉窯系青磁、鉄器(鉄滓)が出土している。不明土製品については、鉄分の附着が確認できる。

また、鉄器については鉄滓と考えられるため、この2点から推測するならば铸造施設に関わりがある遺構ではないかと思われる。しかし、今後は土壌サンプル等の科学的な側面からの試みも必要であろう。時期は14-15世紀代の所産であろう。

SK26 (Fig.36)

調査区と接するため全掘していないが、半円径を呈する遺構であると考えられる。長軸1.25m、短軸0.45m、深さ0.41mを測る。埋土は土層3-5層にあたり、灰色粘土、ロームを多く含んでいる。5層は暗黒茶色粘質土の腐食した埋土である。ここでは土壌として報告するが、茶掘りの井戸の可能性も考えられる。遺物は龍泉窯系青磁(香炉)が出土した。15世紀の所産であろう。



- SK26の層一層
1. 埋土(1層)
 2. 埋土(2層)
 3. 埋土(3層)
 4. 埋土(4層)
 5. 埋土(5層)

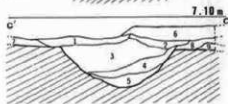


Fig.36 SK26実測図 (1/40)

溝

SD10 (Fig.31, Pla.21・22)

SD10は、調査時においてSK05、SD33と切りあった状態で確認された。遺構の新旧関係についてはSK05の遺構説明で触れたところであるので、ここでは避けることとする。SD10は検出長5.80m、深さ0.54mを測り、断面がU字状を呈する。出土遺物は石器(敲石・磨石)が認められている。

SD24 (Fig.37)

南北に延びる溝で、検出長1.80m、幅0.70m、深さ0.10mを測る。埋土は灰黄色土の単一層で、断面はU字状を呈する。遺物は肥前系の陶器(鉢)が出土した。

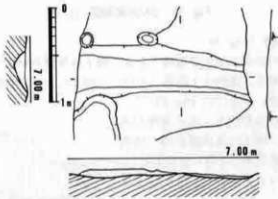


Fig.37 SD24実測図 (1/40)

SD30 (Fig.39)

SE20を切るように検出された南北に延びる溝である。検出長4.65m、幅0.72m、深さ0.76mを測り、底面は逆台形状を呈する。埋土は粘質が非常に強く、腐食した埋土を確認している。遺物は土師器(小皿・皿・杯)、瓦質土器(火鉢)が出土した。15世紀の所産である。

SD33 (Fig.31, Pla.21・22)

SD33は、調査時においてSK05、SD10と切りあった状態で確認された。遺構の新旧関係についてはSK05の遺構説明で触れたところであるので、ここでは避けることとする。SD33は検出長2.70m、深さ0.28mを測り、断面は逆台形状を呈する。出土遺物はない。

ここで、切りあった3遺構(SK05・SD10・SD33)を整理すると、最終埋没をSK05の崩落土(床土)の出土遺物と考えるならば、18世紀後半-19世紀前半頃の時期であると考えられる。しかしながら、主体となる遺物は14世紀代の遺物であり、SK05・SD10・SD33の新旧関係はあるものの時間的な差は極僅かであると考えられる。即ち、遺構の新古関係は古→新の順にSD10→SD33→SK05と考えられる。

井戸

SE15 (Fig.38, Pla.23)

円形の掘り方を呈する井戸で、長軸1.42m、短軸1.30m、深さ1.54mを測る。井戸枠は検出されておらず、素掘りの井戸であろう。地山が砂層であることから、溜井ではなく湧水を利用するものであったと考えられる。出土遺物は土師器（小皿・坏）、瓦質土器（鉢）、須恵器（鉢）等が出土した。最終埋没は14世紀代と思われる。

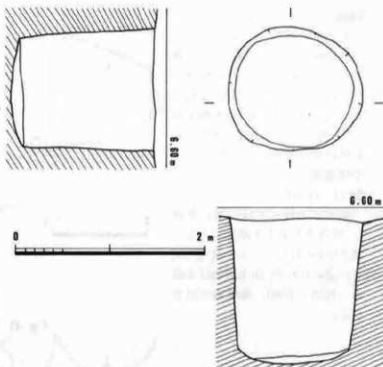
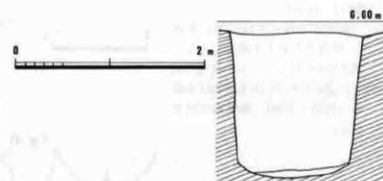


Fig.38 SE15実測図 (1/40)

SE20 (Fig.39, Pla.24)

円形の掘り方を呈する井戸で、長軸1.02m、短軸0.86m、深さ1.04mを測る。井戸枠は検出されておらず、素掘りの井戸であろう。地山が砂層であることから溜井ではなく湧水を利用するものであったと考えられる。出土遺物は弥生土器、土師器（小皿・坏）、土製品（棒状・不明）、龍泉窯系青磁、石器（敲石）等が出土した。最終埋没は14世紀代と思われる。



SE35 (Fig.40, Pla.24)

長方形の掘り方を呈する井戸で、長軸1.60m、短軸1.00m、深さ1.02mを測る。井戸枠の存在はなく、素掘り井戸と考えられる。出土遺物は須恵器（甕）、土師器（土鍋）等が出土している。最終埋没は14世紀代と思われる。

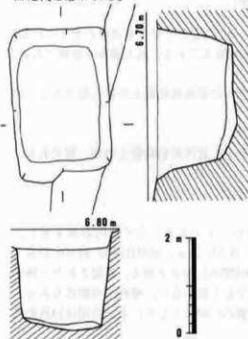


Fig.40 SE35実測図 (1/40)

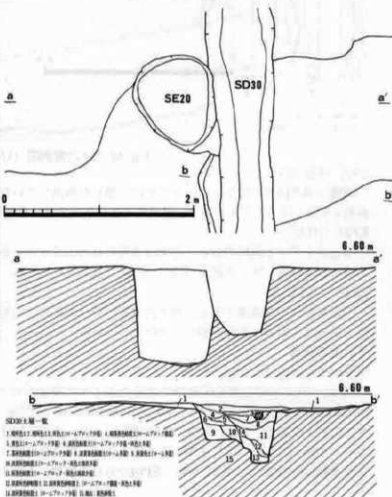
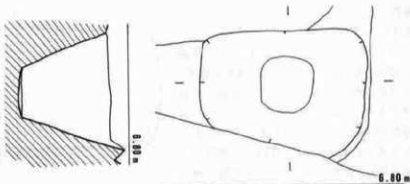


Fig.39 SE20・SD30実測図 (1/40)

- SD30土層一覧
- 1. 砂層 (厚さ約1.0m)
 - 2. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 3. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 4. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 5. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 6. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 7. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 8. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 9. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 10. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 11. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 12. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 13. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 14. 砂層 (厚さ約0.5m)
 - 15. 砂層 (厚さ約0.5m)

SE40 (Fig. 41, Pla. 25)

長方形の掘り方を呈する井戸で、長軸1.75m、短軸1.23m、深さ1.11mを測る。井戸枠は検出されず、素掘りの井戸であろう。出土遺物は土師器(不明土製品)が出土した。周辺の状況から最終埋没は14世紀代と思われる。



不明遺構

SX13 (付図②)

調査区上段と下段の境に位置し、灰色土を呈する擾乱である。埋土中からはビニールや現代の瓦等が認められた。出土遺物は土師器(棒状・不明)、陶磁器が出土した。

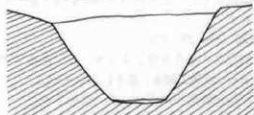
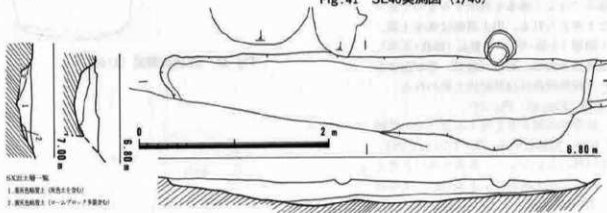


Fig. 41 SE40実測図 (1/40)



SX22上層一帯

1. 調査区境界 (灰色土層)
2. 調査区境界 (ロームブロック層)

Fig. 42 SX22実測図 (1/40)

SX22 (Fig. 42)

遺構は調査区外に広がっているために一部しか検出していないが、長方形を呈する遺構と考えられる。長軸4.57m、深さ0.27mを測り、埋土は茶灰色粘質土及び黄灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SX31 (付図②)

不定形を呈する遺構である。埋土は多量のロームブロックを含んだ黄褐色粘質土の単一層である。出土遺物は土師器(坏・土鍋)、鉄器(鉾津)が出土している。

SX32 (付図②)

不定形を呈する遺構である。埋土は多量のロームブロックを含んだ黄灰褐色粘質土の単一層である。出土遺物は土師器(不明土製品)が出土している。

その他の遺構

SP02~04 (Fig. 43, Pla. 25)

SP02~04は上段の調査区東側で連続するように確認されたビットである。全て楕円形状を呈し、SP02は径0.55~0.65m、深さ0.47m、SP03は径0.48~0.53m、深さ0.35m、SP04は径0.44~0.45m、深さ0.29mを測る。更に、SP02とSP03間は2.00m、SP03とSP04間は1.90mを測る。確認された一連のビットが同一で、且つ北に展開するのであれば、掘立柱建物になると思われるが、櫛列の可能性もある。出土遺物はSP03から土師器(鉢)、SP04からは土師器(不明土製品)が出土している。時期は14世紀代か。

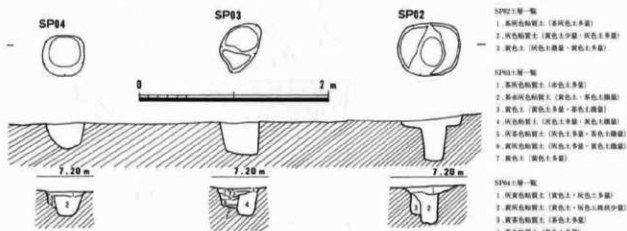


Fig. 43 SP02~04実測図 (1/40)

(3) 出土遺物

土壇

SK01 (Fig. 44, Pla. 26)

土師器

甕 (1) 復原底径34.7cmを測る。内外面は淡灰乳色を呈し、胎土は白色粒子・黒色粒子を全体に少し含む。体部外面は剝離しているが、焼成は良好である。

SK05 (Fig. 45~48, Pla. 26~28)

土師器

小皿 (1・2) 1は復原口径8.0cm、器高1.9cm、復原底径6.0cmを測り、内外面は横ナデ調整である。色調は乳橙色で、胎土は精選されており、焼成は良好である。外底は糸切りである。2は復原口径8.0cm、器高1.9cm、復原底径5.8cmを測り、体部外面は横ナデ、体部内面は磨滅のため不明である。色調は乳乳色で、胎土は精選されており、外底は糸切りである。

坏 (3) 復原底径11.0cmを測り、体部内外面は横ナデ調整である。色調は乳白色で、胎土は精選されており、焼成は良好である。

土鍋 (4~8) 4~7は、口縁端部を折り返して玉縁状を呈するタイプである。4は口縁部の破片で、体部外面は茶色を呈し、粗い刷毛目と煤が付着する。色調は橙黄色で、胎土に金雲母・白色粒子を少量含む。焼成は良好。5は口縁部の破片で、体部外面はナデ調整である。微量の煤が付着し、色調は外面が茶橙乳色で、内面は橙黄色である。胎土に金雲母・白色粒子を微量含む、焼成は良好である。6は復原口径43.0cmを測る。体部外面はナデ調整で煤が付着する。体部内面は横刷毛目調整である。色調は外面が淡茶黒色、内面は淡乳茶色で、胎土に金雲母・白色粒子を少量含む。焼成は良好。7は復原口径48.0cmを測る。口縁部端部の一部に煤が付着し、体部外面はナデ調整で、体部内面は刷毛目調整である。色調は外面が茶黒色、内面は橙乳色で、胎土に金雲母・白色粒子を微量含む。焼成は良好。8は口縁部が厚いばち形を呈し、体部内面は横刷毛目を施す。色調は橙茶色で、金雲母・白色粒子を少量含む。焼成は良好である。

鉢 (9) 口縁部の破片で、体部外面は調整不明で、体部内面は横方向の刷毛目調整である。色調は外面が橙乳色で、内面は茶褐色である。胎土に白色粒子・金雲母を少量含む、焼成は良好。瓦質土器の可能性もある。

播鉢 (10) 復原口径26.0cmを測る。口縁部は厚いばち形を呈し、体部外面は磨滅のため不明で、体部

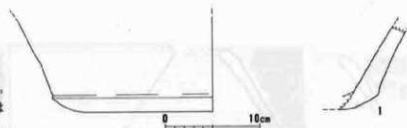


Fig. 44 SK01出土土器実測図 (1/4)

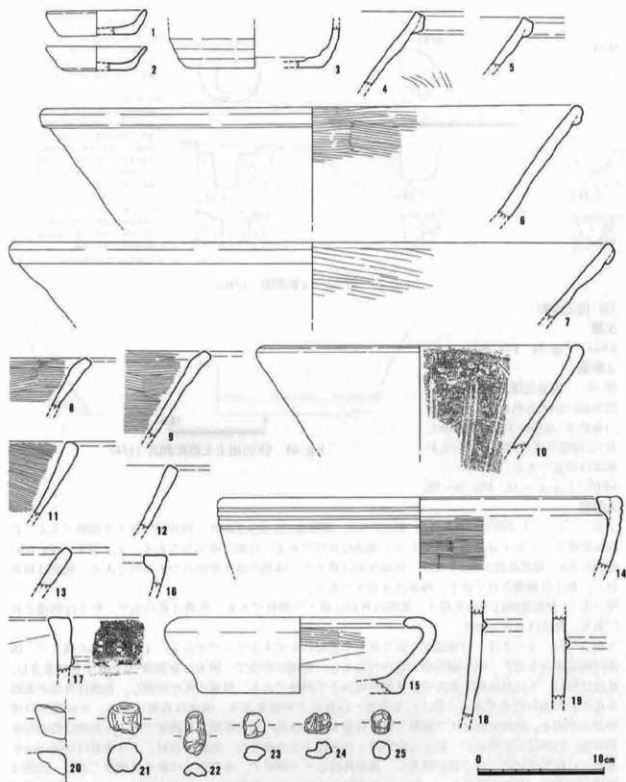


Fig. 45 SK05出土遺物実測図① (1/3)

内面は刷毛目調整後、3本単位の櫛目を施す。色調は外面が淡橙色、内面は淡灰色で、胎土は白色粒子を少量、金雲母を微量に含む。焼成は良好である。瓦質土器の可能性もある。

鉢 (11~13) 口縁部は素口縁を呈する。体部外面は磨滅のため不明であるが、体部内面は横方向の刷毛目調整である。色調は橙茶色を呈し、胎土に金雲母・角閃石・白色粒子を少量含む。焼成は良好である。12は素口縁の口縁部で、内外面の調整は不明である。口縁部の一部に煤が付着し、色調は体部外面

が茶褐色、体部内面は橙色である。胎土に白色粒子・金雲母を少量含む、焼成は良好である。13は紫口縁の口縁部で、内外面の調整は磨滅のため不明である。色調は暗灰色を呈し、胎土に白色粒子を微量含む。焼成は良好である。

火鉢 (14-19) 14は復原口径32.0cmを測る。口縁部は粘土貼付により内側に張り出すタイプの口縁で、口縁部-胴部にかけて3条の沈線が施される。体部外面は横ナデ調整で、体部内面は横刷毛目調整である。色調は暗灰色で、胎土に金雲母を微量含む。焼成は良好である。15は復原口径16.4cm、器高6.0cm、底径16.4cmを測る。口縁部は内側に大きく張り出すタイプである。体部外面はナデ調整、体部内面は刷毛目、ヘラ削りが施される。色調は外面が暗灰黒色、内面は暗黒色を呈し、胎土に金雲母・角閃石・白色粒子を少量含む。焼成は良好で、瓦質土器の可能性もある。16は口縁部が内側に張り出すタイプである。体部内外面は横ナデ調整で、色調は橙乳色である。胎土は金雲母・白色粒子を微量含む、焼成は良好である。17は口縁端部がバナ形を呈し、端部は内側に張り出す。口縁部下位に1条の突帯を貼付け、花紋のスタンプが施されている。体部内外面の調整は不明で、色調は暗灰色である。胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を少量含む、焼成は良好である。18は胴部の破片で、外面に1条の突帯を有する。色調は灰色で、胎土は金雲母・白色粒子を微量含む、焼成は良好である。19は胴部の破片で、外面に1条の突帯を有する。色調は淡灰色で、胎土に金雲母・白色粒子を少量含む、焼成は良好である。

風炉 (27) 復原口径20.0cmを測る。直立する低い口縁部を呈し、やや肩部が張る。胴部に巴文のスタンプが施され、色調は橙色で、胎土は精製されている。焼成は良好である。

不明土製品 (20-25) 20は面取り成形を行っている痕跡が確認される。色調は淡橙色を呈し、胎土は精選されており、焼成は良好である。重さは8.9gを測る。21は重さ10.2gを測る。色調は橙乳色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。22は重さ5.0gを測る。色調は橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。23は重さ2.8gを測る。色調は橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。24は重さ2.7gを測り、一部、棒状工具によると思われるキズが観察される。色調は淡灰色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。25は重さ2.4gを測る。色調は乳橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

須恵器

坏 (26) 復原底径7.3cmを測る。体部内外面は横ナデ調整である。色調は灰色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

瓦質土器

茶釜 (28・29) 28は最大径28.6cmを復原する。鈎の下半には厚く煤が付着し、体部外面は刷毛目調整、体部内面は横方向の刷毛目調整である。色調は暗灰色を呈し、胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を微量含む。焼成は良好である。29は最大径32.0cmを復原する。体部外面は鈎付近で横刷毛目調整、胴下半は縦刷毛目調整である。体部内面は横刷毛目、ナデ調整である。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈し、胎土は金雲母・

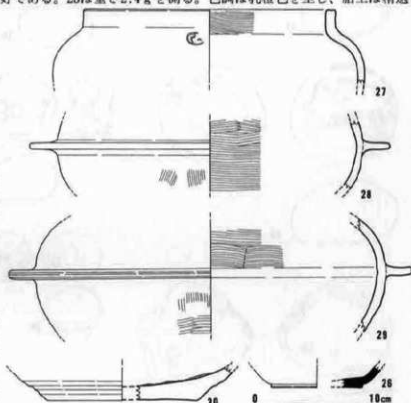


Fig. 46 SK05出土遺物実測図② (1/3)

角閃石・白色粒子を微量に含む。

坏 (30) 復原底部12.0cmを測り、体部内面には厚く煤が付着する。体部外面は横ナデで、外底は糸切りである。色調は内面が暗茶黒色、外面は淡灰色を呈する。胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を多量に含み、焼成は良好である。

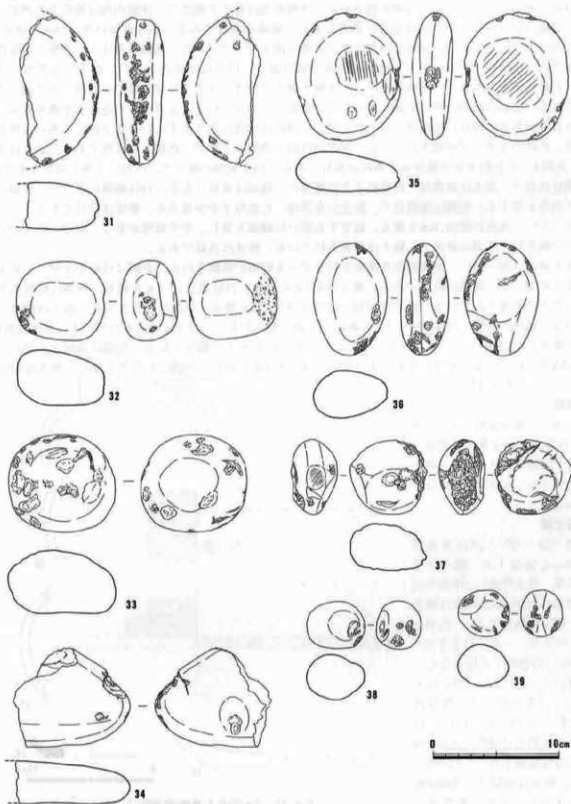


Fig. 47 SK05出土遺物実測図③ (1/3)

石器

敲石 (31~39) 31は安山岩製の敲石で、磨石に転用している。扁平な礫を加工し、側面に敲打痕が確認される。また、2ヶ所に磨面として使用されている。現存長11.7cm、幅6.0cm、厚さ3.6cm、重さ379gを測る。32は安山岩製の敲石である可能性がある。風化が著しいため3ヶ所に敲打痕があるよう思われる。現存長6.2cm、幅4.4cm、厚さ4.5cm、重さ294gを測る。33は安山岩製の敲石である。風化が著しいためはっきり判らないが、全体に敲打痕らしい凹凸が認められるため敲石として使用した可能性がある。現存長7.7cm、幅8.4cm、厚さ5.0cm、重さ430gを測る。34は安山岩製の敲石である可能性がある。敲打痕ははっきり判らないが、参考資料として提示した。現存長7.9cm、幅9.2cm、厚さ3.5cm、重さ300gを測る。35は安山岩製の敲石である。風化が著しいため加工についてははっきり判らないが、凹凸が認められる。また、磨石に転用し、2ヶ所に磨面が確認される。現存長10.2cm、幅8.2cm、厚さ3.1cm、重さ355gを測る。36は安山岩製の敲石である。風化が著しいため上下両端部に見える加工についてははっきり判らないが、若干凹凸が認められるため敲石として使用した可能性がある。現存長9.4cm、幅5.8cm、厚さ3.9cm、重さ249gを測る。37は安山岩製の敲石である。全体に風化が見られるもの顯著に敲打痕が認められる。表面は、全体にややざらついた感じである。現存長5.9cm、幅6.0cm、厚さ3.6cm、重さ163gを測る。38は安山岩製の敲石の可能性がある。敲打痕は風化が著しいためはっきり判らないが、参考資料として提示した。現存長3.9cm、幅4.5cm、厚さ3.6cm、重さ79gを測る。39は安山岩製の敲石の可能性がある。敲打痕は風化が著しいためはっきり判らないが、参考資料として提示した。現存長3.7cm、幅4.1cm、厚さ3.8cm、重さ59gを測る。磨石 (40・41) 40は安山岩製の磨石である。4ヶ所に磨面が確認され、窪んだ痕跡が認められるため、窪石として転用した可能性も考えられる。現存長16.3cm、幅12.9cm、厚さ7.0cm、重さ1,780gを測る。41は暗黒色を呈した玄武岩製の磨石である。2ヶ所に磨面が確認されるが、両側面は凹凸のある自然面である。現存長8.6cm、幅10.0cm、厚さ10.9cm、重さ1,386gを測る。今回出土した唯一の玄武岩である。不明石器 (42・43) 42は凝灰岩製の石材である。中央部にノミ痕が確認される。現存長10.4cm、幅5.6cm、厚さ2.2cm、重さ94gを測る。今回出土した唯一の凝灰岩である。43は安山岩製の石材で、風化が著しい。全面に焼成を受け、一部非常に強く焼成を受けている部分が認められる。現存長7.0cm、幅5.4cm、厚さ4.5cm、重さ124gを測る。

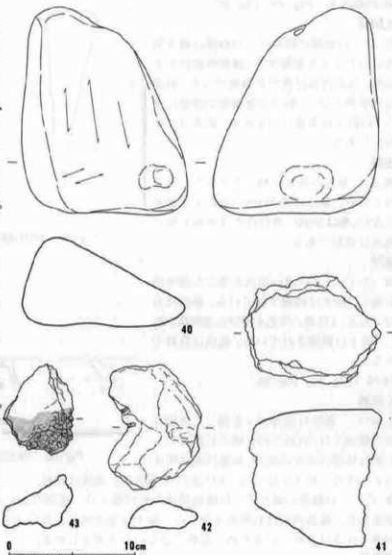


Fig. 48 SK05出土遺物実測図④ (1/3)

SK05崩落土 (Fig.49, Pla.28)

土師器

甕(1) 口縁部の破片で、口縁部は直立気味に立ち上がり肥厚する。体部外面はナデ調整、体部内面は横ナデ調整である。色調は明橙色を呈し、胎土は金雲母が微量に含み、砂粒子が多量に含まれる。焼成はやや良好である。

磁器

碗(2) 見込み部分は釉のカキ取りが施されている。胎土は角閃石・白色粒子を微量に含む。釉は全面に青白色の透明釉を施し、焼成は良好である。

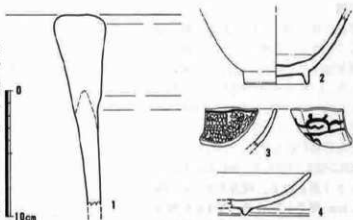


Fig. 49 SK05崩落土出土土器実測図 (1/3)

染付

皿(3・4) 3は薄い空色を帯びた透明釉を施し、胎土は精選されている。焼成は良好である。4は薄い空色を帯びた透明釉を施し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

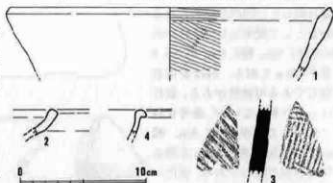


Fig. 50 SK06出土土器実測図 (1/3)

SK06 (Fig.50, Pla.29)

土師器

土鍋(1) 復原口径26.0cmを測る。体部外面は横刷毛目、斜め方向の刷毛目調整で、色調は体部内面が淡灰色、体部外面は明灰色を呈する。胎土に金雲母・白色粒子少量含み、焼成は良好。

鉢(2) 口縁部の破片で、口縁端部はやや内傾する。体部外面には薄く煤が付着し、色調は体部外面が茶黑色、体部内面は乳橙色を呈する。胎土は金雲母・白色粒子を微量含み、焼成は良好である。器壁が薄く仕上げられているため、焙烙ではないかと考えられる。

須恵器

甕(3) 胴部の一部で、外面は平行叩き、一部を正格子叩き、内面は平行叩きを施す。色調は淡灰青色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

陶器

鉢(4) 口縁部の一部で、鉄釉を施す。胎土は精選されており、焼成は良好である。

SK08 (Fig.51, Pla.29)

土師器

土鍋(1) 口縁部の破片で、口縁端部は折り返しによって玉縁状をつくる。色調は淡橙色を呈し、胎土は角閃石・白色粒子を少量含む。焼成はやや良好。

SK09 (Fig.51, Pla.29)

土師器

小皿(1) 復原底径6.4cmを測る。色調は乳白色で、胎土は金雲母・白色粒子を微量に含む。外底は承切りで、焼成は不良である。

SK25 (Fig.52, Pla.29)

土師器

不明土製品(1~3) 1は重さ6.7gを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量に含むが、精選されている。焼成は良好。2は重さ10.8gを測る。色調は橙乳色を呈し、白色粒子を微量に含む。焼成

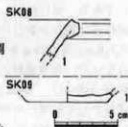


Fig.51 SK08・09
出土土器実測図(1/3)

は良好。一部、鉄分が付着しているのが観察される。3は重さ7.5gを測る。色調は淡橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。一部、鉄分が付着し、2次焼成も観察される。

龍泉窯系青磁

碗(4) 口縁部の破片で、体部外面は雷文帯と片切彫りの幅広い連弁が施される。胎土は精選されており、薄い緑色の釉が施される。焼成は良好。

SK25-1層 (Fig.52, Pla.29)

鉄器

不明鉄製品(1) 不定形な形を呈している。重さ16.6gを測る。鉄滓か。

SK26 (Fig.53, Pla.29)

龍泉窯系青磁

香炉(1) 復原口径10.0cmを測る。口縁部は内に折り返しており、胎土は精選されている。薄い緑色の釉が施されている。焼成は良好。

溝

SD10-12層 (Fig.54, Pla.30)

石器

敲石(1) 安山岩製の敲石である。上下両端部に見える加工についてははっきり判らないが、若干凹凸が見られるため敲石として使用した可能性がある。現存長8.4cm、幅4.4cm、厚さ3.1cm、重さ141gを測る。

SD10-13層 (Fig.55, Pla.30)

石器

磨石(1) 安山岩製の磨石である。2ヶ所に磨面が確認される。現存長13.1cm、幅8.4cm、厚さ5.0cm、重さ767gを測る。

敲石(2) 安山岩製の敲石である。上下両端部に見える加工については若干の凹凸が見られるため、敲石として使用した可能性がある。現存長12.1cm、幅2.9cm、厚さ3.4cm、重さ250gを測る。

SD24 (Fig.53, Pla.29)

陶器

鉢(1) 肥前系の鉢で、口縁部の破片である。色調は淡紫乳色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。

SD30 (Fig.56, Pla.30)

土師器

小皿(1) 1は復原口径7.4cm、器高1.4cm、底径6.2cmを測る。色調は橙乳色を呈し、調整は磨滅のため不明である。胎土は精選されており、焼成は良好。外底は糸切りである。2は復原底径6.0cmを測る。色調は橙乳色を呈する。調整は不明で、外底は糸切りである。胎土は精選されており、焼成は良好。

皿(3・4) 3は復原底径10.0cmを測る。色調は乳橙色を呈し、調

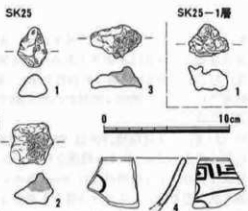


Fig. 52 SK25出土遺物実測図 (1/3)



Fig. 53 SD24, SK26出土遺物実測図 (1/3)

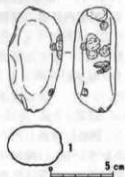


Fig. 54 SD10-12層出土石器実測図 (1/3)

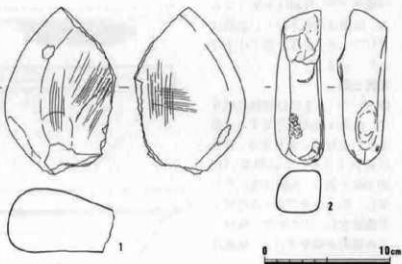


Fig. 55 SD10-13層出土石器実測図 (1/3)

整は不明である。胎土は金雲母を微量に含むが、精選されている。焼成は良好で、外底は糸切りである。4は復原口径14.2cm、器高2.2cm、底径11.6cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量含むが、精選されている。調整は磨滅のため不明で、外底は糸切りである。焼成は良好。

坏 (5・6) 5は復原口径12.8cm、器高2.5cm、底径10.0cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は精選されている。調整は磨滅のため不明で、焼成は良好。6は復原口径11.0cm、器高2.8cm、底径8.0cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量含むが、精選されている。調整は磨滅のため不明で、外底は糸切りである。焼成は良好。

瓦質土器

火鉢 (7) 胴部の一部で、体部外面に2条の貼付突帯を施し、花菱文の印刻が施されている。内面はナデ調整である。胎土は白色粒子・金雲母を微量に含むが、精選されている。焼成は良好。

銅製品

銭貨 (8) 一部欠損しているが、寛永通寶と思われる。

井戸

SE15 (Fig. 57, Pla. 30)

土師器

小皿 (1) 復原底径6.4cmを測る。体部内外面の調整は磨滅のため不明である。色調は乳橙色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。

坏 (2・3) 2は復原口径11.8cm、器高3.2cm、底径8.0cmを測る。調整は磨滅ため不明なところが多いが、口縁部は横ナデ調整である。色調は乳橙色を呈し、焼成は良好である。3は復原底径10.0cmを測る。内外面の調整は横ナデで、外底は糸切りである。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。全体が厚く仕上げられている。

瓦質土器

鉢 (4・5) 4は口縁部の破片で、色調は淡灰色を呈する。胎土は白色粒子を微量含む、焼成は良好である。5は復原口径30.0cmを測る。色調は暗灰色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量含む。体部外面に棒状による線刻が観察される。焼成は良好である。

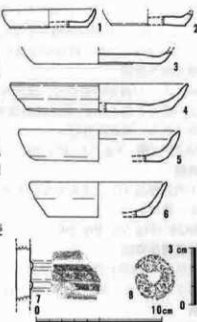


Fig. 56 SD30
出土遺物実測図 (1/2・1/3)

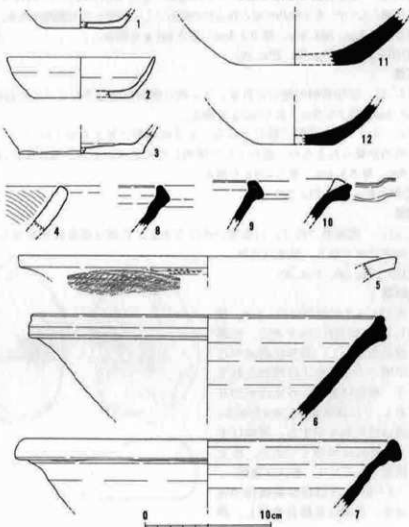


Fig. 57 SE15出土土器実測図 (1/3)

須恵器

鉢(6-12) 6は復原口径28.4cmを測る。口縁部の破片で、口縁端部は自然軸がかかる。内外面は横ナデ調整で、色調は灰色を呈する。胎土は白色粒子を微量に含み、焼成は良好である。東播系。7は復原口径30.6cmを測る。口縁部の破片で、口縁端部は自然軸がかかる。体部内外面は横ナデ調整で、色調は灰色を呈する。胎土は白色粒子を微量に含み、焼成は良好である。東播系。8は口縁部の破片で、口縁端部は自然軸がかかる。体部内外面は横ナデ調整で、色調は灰色を呈する。胎土は白色粒子を微量に含み、焼成は良好。9は口縁部の破片で、口縁端部は自然軸がかかる。体部内外面は横ナデ調整で、色調は灰色を呈する。胎土は白色粒子を微量に含み、焼成は良好。10は口縁部の破片である。体部内外面は横ナデ調整で、色調は灰色を呈する。胎土は白色粒子を微量に含み、焼成は良好。片口鉢。11は復原底径10.0cmを測る。体部内外面はナデ調整で、色調は灰色を呈する。体部外面底部付近に煤が付着し、胎土は白色粒子を少量含む。焼成は良好である。12は復原底径6.0cmを測る。体部内外面はナデ調整で、色調は暗灰色を呈する。体部外面に煤が付着し、胎土は白色粒子を微量に含む。焼成は良好である。

SE20 (Fig.58・59, Pla.30-32)

弥生土器

甕(38) 底部の一部である。色調は淡乳橙色を呈し、胎土は白色粒子を少量含む。体部内外面は磨減のため不明であるが、ナデ調整と思われる。焼成はやや良好。

土師器

小皿(1-16) 1は口径8.3cm、器高1.3cm、底径6.2cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量に含むが、精選されている。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。2は口径8.0cm、器高1.3cm、底径5.8cmを測る。色調は橙色を呈し、金雲母・白色粒子を微量含む。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。3は口径8.4cm、器高1.3cm、底径7.5cmを測る。色調は乳白色を呈し、金雲母・白色粒子を微量含む。体部外面は鉄分の付着が見られ、調整は体部外面が横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。焼成は良好。4は口径8.3cm、器高1.5cm、底径6.7cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選されている。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。焼成は良好。5は口径8.0cm、器高1.6cm、底径6.1cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量に含むが、精選されている。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。6は口径7.5cm、器高1.2cm、底径6.3cmを測る。色調は淡乳白色を呈し、体部外面は横ナデ、体部内面はナデと思われる。外底は糸切りで、焼成は良好。7は口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.9cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は白色粒子を微量に含む。体部外面は横ナデ、体部内面は、横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。8は口径7.7cm、器高1.5cm、底径6.1cmを測る。色調は淡乳白色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量に含む。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。9は復原口径8.4cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は白色粒子・金雲母を微量に含む。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。10は口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.5cmを測る。色調は淡乳白色を呈し、胎土は金雲母を少量含む。体部外面は横ナデ、体部内面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。11は復原口径8.0cm、器高1.6cm、底径6.4cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量に含むが、精選されている。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。12は復原口径8.4cm、器高1.5cm、底径6.4cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選されている。体部内外面は横ナデ調整で、外底は糸切りである。焼成は良好。13は復原口径7.6cm、器高1.4cm、底径5.8cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選されている。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好である。14は復原口径7.4cm、器高1.2cm、底径5.8cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量に含むが、精選されている。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。15は復原口径8.4cm、器高1.5cm、底径7.4cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選され

ている。体部内外面は磨滅のため調整不明である。焼成は良好。16は復原口径10.0cm、器高1.5cm、底径7.8cmを測る。色調は乳橙色を呈し、胎土は精選されている。体部外面は横ナデ、体部内面は磨滅のため調整不明である。外底は糸切りで、焼成は良好。

坏 (17~35) 17は底径9.6cmを測る。色調は乳白色を呈し、体部内外面は横ナデ調整である。胎土は精選されている。外底は糸切りで、焼成は良好。18は口径12.8cm、器高2.9~3.2cm、底径8.3cmを測る。色調は淡乳白色を呈し、体部内外面は横ナデ調整である。胎土は白色粒子・金雲母を微量含む。焼成は良好。19は口径12.7cm、器高3.1cm、底径8.2cmを測る。色調は淡乳白色を呈し、体部内外面は横ナデ調整である。胎土は白色粒子・金雲母を微量に含む。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成はやや良好。20は口径12.2cm、器高3.4cm、底径9.0cmを測る。色調は乳白色を呈し、体部内外面は横ナデ、ナデ調整である。胎土は白色粒子・金雲母を微量に含む。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。21は復原口径12.0cm、器高3.2cm、底径9.0cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母・白

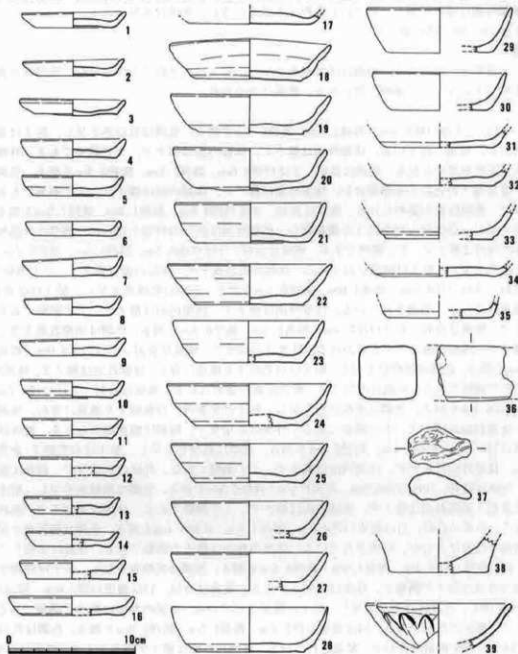


Fig. 58 SE20出土土器実測図 (1/3)

色粒子を微量に含む。体部内外面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕を認める。焼成はやや良好。22は復原口径13.0cm、器高3.2cm、底径8.5cmを測る。色調は橙乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量に含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで焼成はやや良好。23は復原口径12.0cm、器高3.3cm、底径8.5cmを測る。色調は乳橙色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量含む。体部内外面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。24は復原口径13.0cm、器高3.3cm、底径8.5cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選されている。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成はやや良好。25は復原口径12.4cm、器高3.1cm、底径8.5cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選されている。体部内外面は横ナデ、ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。26は復原口径12.4cm、器高3.0cm、底径8.6cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は金雲母を微量に含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。27は復原口径12.4cm、器高3.0cm、底径8.4cmを測る。色調は乳橙色を呈し、金雲母を微量に含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。28は復原口径12.4cm、器高3.5cm、底径8.6cmを測る。色調は淡橙色を呈し、胎土は白色粒子・金雲母を微量含む。体部内外面は磨滅のため不明である。外底は糸切りで、焼成は良好。29は復原口径11.6cm、器高3.7cm、底径8.5cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量に含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。30は復原口径10.6cm、器高3.0cm、底径7.8cmを測る。色調は橙色を呈し、胎土は白色粒子を微量に含む。体部内外面は磨滅のため調整不明である。焼成はやや良好。31は復原底径8.4cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成は良好。32は復原底径8.6cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は金雲母を微量含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。33は復原底径8.6cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は精選されている。体部外面は横ナデ調整、体部内面は磨滅のため調整不明である。外底は糸切りで、焼成は良好。34は復原底径9.0cmを測る。色調は橙乳色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、焼成は良好。35は復原底径8.3cmを測る。色調は乳白色を呈し、胎土は白色粒子を微量含む。体部内外面は横ナデ調整である。外底は糸切りで、板状圧痕が認められる。焼成はやや良好である。

棒状土製品 (36) 現存長6.2cmを測る。色調は淡黄茶色を呈し、胎土は白色粒子・角閃石を多量に含む。断面は隅丸方形を呈し、4.2cmを測る。焼成は良好で、重さ134gを測る。

不明土製品 (37) 色調は淡橙乳色を呈し、胎土は金雲母・白色粒子を微量含んでいるが、精選されている。焼成は良好で、重さ19.3gを測る。

龍泉窯系青磁

碗 (39) 復原口径11.6cmを測る。外面に鋪連弁を描くもので、薄い青緑色の釉が施される。胎土は精選されており、焼成は良好。I-5b類。

石器

不明石器 (40) 安山岩製の石材である。石材全面に焼成が観察さ

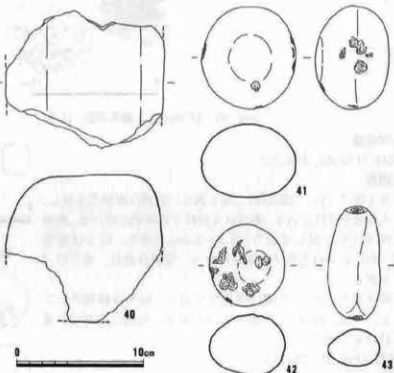


Fig. 59 SE20出土石器実測図 (1/3)

れる。現存長10.9cm、幅12.4cm、厚さ11.6cm、重さ1,366gを測る。

敲石 (41-43) 41は安山岩製の敲石である可能性があり、参考資料として提示した。敲打痕は風化が著しいためははっきり判らないが、外面の一部に焼成が確認される。現存長8.1cm、幅7.4cm、厚さ5.8cm、重さ500gを測る。42は安山岩製の敲石である可能性があり、参考資料として提示した。風化が著しいためははっきりわからない。全体を磨石として使用した可能性も考えられ、現存長6.5cm、幅6.0cm、厚さ4.8cm、重さ235gを測る。43は安山岩製の敲石である。風化が著しいが上下両端部に敲打痕が確認される。現存長9.1cm、幅4.1cm、厚さ3.0cm、重さ146gを測る。

SE35 (Fig. 60, Pla. 32・33)

土師器

土鍋 (1・2) 1は口縁部の破片で、口縁端部は折り返して玉縁状につくる。色調は体部外面が暗黒色、体部内面は淡橙茶色を呈する。体部外面はナデ調整で、一部に煤が付着する。胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を少量含み、焼成は良好。2は口縁部の破片で、口縁端部は折り返しによって玉縁状をつくる。色調は体部外面が暗黒色、体部内面は淡橙色を呈し、体部外面はナデ調整である。胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を微量含み、焼成は良好。

須恵器

甕 (3) 頸部の一部である。色調は体部外面が暗灰色、体部内面は淡紫灰色を呈する。体部外面は横ナデ、平行叩き、体部内面は横ナデ、ナデ、同心円状の叩きである。胎土は精選され、焼成は良好。

SE40 (Fig. 61, Pla. 33)

土師器

不明土製品 (1) 復原径2.8~3.0cm、厚さ0.6cmを測る。中央付近に穿孔が観察され、重さ2.3gを測る。

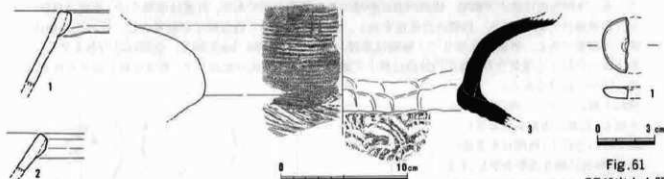


Fig. 60 SE35出土土器実測図 (1/3)

Fig. 61 SE40出土土器実測図 (1/2)

不明遺構

SX13 (Fig. 62, Pla. 33)

土師器

棒状土製品 (1) 残存径7.2cmを測る。色調は赤橙色を呈し、2次焼成を受けている。形状は4角柱で直線的に延びる。断面は隅丸方形を呈しており、2.5~2.9cmを測る。胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を微量に含み、焼成は良好。重さ61.3gを測る。

不明土製品 (2) 色調は淡乳色を呈し、胎土は精選されている。一部、線刻らしい部分もみられる。焼成は良好で、重さ41.4gを測る。

SX23 (Fig. 63, Pla. 33)

石器

敲石 (1・2) 1は安山岩製の敲石である。風化が著しいが

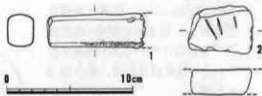


Fig. 62 SX13出土土器実測図 (1/3)



Fig. 63 SX23出土石器実測図 (1/3)

顕著に敲打痕が確認される。現存長4.4cm、幅3.8cm、厚さ3.6cm、重さ74gを測る。2は安山岩製の敲石である可能性がある。風化が著しいため上下両端部に見える加工については若干の凹凸が確認される。現存長3.7cm、幅2.9cm、厚さ2.2cm、重さ29gを測る。

SX27 (Fig.64, Pla.33)

鉄器

鉄滓 (1) 不定形な形を呈している。重さ92.2gを測る。鉄滓か。

SX29 (Fig.64, Pla.33)

鉄器

鉄滓 (1) 不定形な形を呈している。重さ31.4gを測る。鉄滓か。

SX31 (Fig.65, Pla.33)

土師器

坏 (1) 復原底径7.0cmを測る。色調は橙乳色を呈し、調整は磨滅のため不明で、外底は糸切りである。胎土は金雲母・白色粒子を微量に含み、焼成は良好である。

土鍋 (2) 口縁部の破片で、口縁端部は折り返して玉縁状をつくる。色調は体部外面が暗黒色、体部内面は茶橙色を呈する。体部外面に煤が全面に付着し、胎土は金雲母・角閃石・白色粒子を微量に含む。焼成は良好。

鉄器

鉞滓 (3) 柄型の鉞滓である。重さ268gを測る。

SX32 (Fig.65, Pla.33)

土師器

不明土製品 (1) 残存径2.2cmを測る。色調は淡橙白色を呈し、胎土は精選されている。焼成はやや良好。重さ5.2gを測る。

ビット

SP03-1層 (Fig.66)

土師器

鉢 (1) 口縁部の一部で、体部内面は斜め方向の刷毛目調整、体部外面は縦刷毛目調整である。色調は乳橙色で、胎土は精選されており、焼成は良好である。

SP04 (Fig.66, Pla.33)

土師器

不明土製品 (1) 色調は乳橙色～淡灰色で、胎土は精選されている。円形を呈する形状で、中央部分には凹凸が見られる。重さは7.1gを測る。

表探 (Fig.67, Pla.33)

土師器

甕 (1) 口縁部の破片で、色調は橙乳色を呈し、調整はナデである。胎土は白色粒子を多量含む。焼成は良好である。

(4) 小結

主要な遺構と遺物についてまとめる。

井戸について

狭い範囲の調査にもかかわらず、井戸を4基確認した。何れも、井戸枠は確認されていないので素掘りの井戸と判断される。

SE20からは弥生土器1点が出土している。周辺遺跡である水田正吹遺跡、

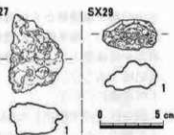


Fig. 64 SX27・29出土鉄器
実測図 (1/3)

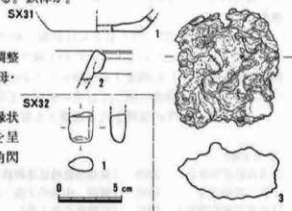


Fig. 65 SX31・32出土土物実測図 (1/3)

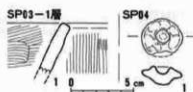


Fig. 66 SP03-1層・04
出土土器実測図 (1/3)

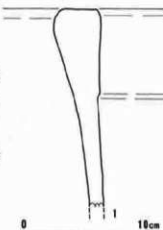


Fig. 67 表探土器
実測図 (1/3)

水田伊勢ノ脇遺跡からは弥生時代中期後半～終末を中心とした遺構や遺物を認めているものの、当調査区内において弥生時代の遺構は確認されていない。理由として考えられるのは、中世から現代における耕作や造成等といった土地利用によって、大幅な削平が行われた可能性がある。井戸の最終埋没は14～15世紀頃であろう。

不明遺構について

調査区下段で検出したSX28・29・32・33は、遺構検出時において現状にロームブロックを多量に含んだ埋土であった。現状が田であったためトラクターによる耕作の痕跡である可能性も考えられるが、遺構である可能性も否定できないので、今回は不明遺構として報告したものである。

不明遺構(SX13)からは棒状土製品が出土した。棒状土製品は、市内の遺跡からも数例の報告があるが、現在のところ用途については不明である。今後、資料の増加によって明らかにされることであろう。鉄器について

SK25-1層、SX27・29・31からは鉄器(鉄滓・鉛滓)が数点確認された。何れも調査時点で出土していたことに気づいていなかったため土壌サンプルを採取しておらず、分析を行っていない。このため、鑄造施設(鍛冶?)に関連する遺物かどうかは判断し難いが、周辺に鑄造施設が存在する可能性はあるであろう。更に、鑄造に関しては水の確保が必要と考えられるが、当調査区からは井戸が4基確認されており、その必要性が重視される遺構とも捉えられよう。

(参考文献)

筑後市教育委員会	2000	「筑後西部地区遺跡群Ⅰ」	【筑後市文化財調査報告書第29集】
中世土器研究会	1995	【概説 中世の土器・陶磁器】	真陽社
筑後市史編纂委員会	1997	【筑後市史第1巻】	
横田賢次郎・森田勉	1978	「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」	【九州歴史資料館研究論集4】
山村信榮	1990	「大宰府出土の瓦質土器」	【中近世土器の基礎研究Ⅱ】
上田秀夫	1982	「14-16世紀の青磁碗の分類と編年」	【貿易陶磁研究No.2】



9. 藏敷長原山遺跡

(1) はじめに (Fig. 68)

当遺跡は筑後市大字藏敷数字長原294に所在し、標高約20mの八女丘陵の南斜面に立地する。平成8年度に実施された緊急発掘調査で、貝田好実氏の敷地内における土取り中に、偶然発見された遺構である。昭和54年に福岡県教育委員会が作成した分布図をもとに、その後調査を加え、昭和61年に筑後市の文化財の一つとして弥生時代の墓地「長原山遺跡」が紹介されている。周辺の遺跡に眼を転じると、西側は数多くの竪穴住居を検出した藏敷森ノ木遺跡や甕棺墓群の藏敷東野屋敷遺跡など弥生時代の大集落が展開している。調査は平成8年12月6日から同年12月11日まで行い、調査区からは箱式石棺墓1基を確認した。調査は柴田剛が担当し、一部、小林勇作の協力を得た。

以下は検出遺構について報告する。

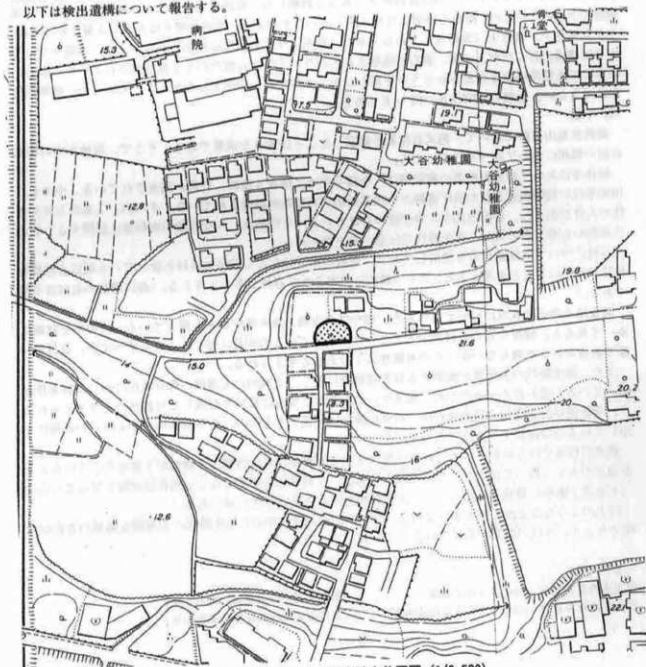


Fig. 68 藏敷長原山遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

箱式石棺墓

ST1 (Fig. 69, Pla. 34・35)

主軸をほぼ北東に向けた箱式石棺である。墓壇内は小口石、側石を立てるために溝状の掘り込みがある。平面形状は調査範囲が限定されていたため不明瞭であるが、長方形を呈すると考える。現状での長軸1.8m+ α 、短軸1.2m+ α を測る。

棺の蓋石については現状で4枚の構成となっている。しかし、緑泥片岩の石材は割れやすいため元来は4枚ではなく2枚の可能性がある。一部、棺内に石材が崩落しているが、恐らく隙間なく覆っていたと考える。側石は左右2枚、小口は東西1枚である。側石に平行して白色粘土も少量確認でき、厚さ3~6cm程度である。側石の幅は、足と推定される方が頭位より若干狭い。また、蓋石についても西側の石材が一枚石で大きいため、頭位は西向きであると判断した。棺内にも崩落土と一緒に白色粘土が一部確認できる。そのため、蓋石の隙間に目張りをしていただと考える。棺内の埋土は大きく3層に分けられ、上から褐色土、橙色土、黄褐色土である。また、棺内より赤色顔料は検出されなかった。連絡を受けてすぐに現場に行ったが、一部、蓋石が破壊されており、そこから棺内の土を掘り出されていた。振るいにかけて玉類等の出土があるかどうかを試みたが、土器片も一切出土しなかった。そのため、時期の特定はできない。主軸の方位はN-62°-Eである。

(3) 小結

蔵敷長原山遺跡において、箱式石棺墓を確認したことは大きな成果である。そこで、筑後市内の箱式石棺の様相について述べることにする。

筑後市において箱式石棺墓の確認例は、今回を含めて現在3遺跡、12例が調査されている。中でも、1950年代に発掘調査された高江遺跡から10基の箱式石棺墓が調査されている。その内、1基から壮年男性の骨が出土し、石棺内部から朱が認められている。その他は、八女丘陵の南斜面に展開する。周辺の状況から考えると何れも弥生時代ではないかと思われる。

石材については緑泥片岩を使用しており、周辺の市町村からも同様の石材を使っている箱式石棺墓が確認されていることを考えると、ごく一般的に使用された石材であると考えられる。(高江遺跡の石材は不明である。)

調査地点周辺の状況について述べると、畑やブドウ畑、雑木林が現在も残っている。その中を詳細に歩いて見ると、緑泥片岩の石材が至るところに点在しているのが目に付く。これらすべてが、石材の一部であるかどうか判らないが、その可能性は十分あると考えられる。

また、弥生時代の大集落が展開する蔵敷遺跡群に近く、立地的にも遺構の保存状況に適した好条件が揃っていると思われる。そのため、集落からやや離れた場所に墓域を形成した可能性が十分考えられよう。蔵敷遺跡群と今回の調査地点は、八女丘陵上に位置するものの、やや谷状の地形を挟んだ両側に立地しているのは注目すべき点であろう。

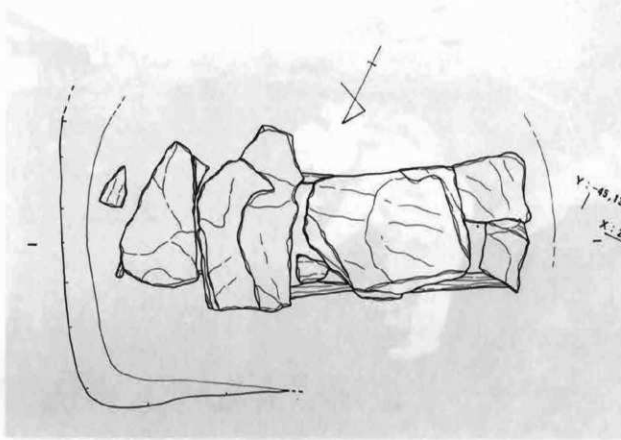
箱式石棺墓ではないが、この付近には残念ながら調査されずに消滅した甕棺が2基存在していたことを地元の方から教えて頂いた。今回の調査地点から5m程離れた場所らしく現在は道路となっている。(下水道工事に発見されたらしく、文化財担当者がいない時代の話である。)

以上のようなことから推測するならば、今回の調査地点を中心に弥生時代の大规模な墓域の存在が示唆できよう。今後の調査が期待される所である。

(参考文献)

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 筑後市教育委員会 1991 「高江遺跡」 | 【筑後市文化財調査報告書第7集】 |
| 筑後市教育委員会 2000 「筑後市内遺跡群」 | 【筑後市文化財調査報告書第20集】 |

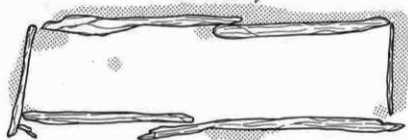
Y: -45.132



Y: -45.130

X: 25.971

粘土



0.60 m

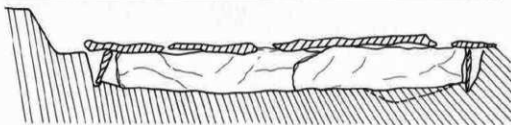


Fig. 69 ST1實測圖 (1/30)



藏敷長原山遺跡調査風景



長原山遺跡の概観

10. 津島西美田遺跡

(1) はじめに (Fig. 70)

津島西美田遺跡は筑後市大字津島字西美田に所在する。県営灌溉排水事業筑後東部第1期地区について試掘調査を行った結果、掘削の及ぶ排水路について遺構を検出したため、本調査を行うこととなった。調査対象面積は約140㎡、調査期間は平成9年5月9日から5月29日までである。調査地は標高約8m程の台地上に立地しており、現況は農業用水路と水田であった。発掘調査は上村英士が担当した。



Fig. 70 津島西美田遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

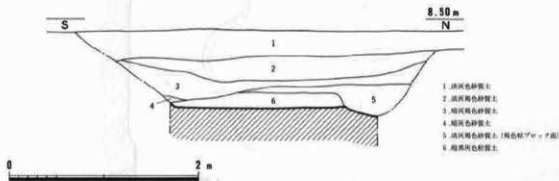


Fig. 71 津島西美田遺跡基本土層 (調査区西隅土層1/40)

(2) 検出遺構

溝

SD1 (Fig. 72, Pla. 37)

調査区西側で検出した南北溝で検出長約2.35m、幅約1.25m、深さ約0.3mを測る。埋土は暗黒灰色粘質土である。出土遺物は皆無であった。

不明遺構

SX2 (Fig. 73)

調査区東端で検出した溜まり状の遺構である。東西検出長約5.4m、南北検出長約1.7m、深さ約0.1mを測る。埋土は暗黒灰色粘質土である。出土遺物は皆無であった。

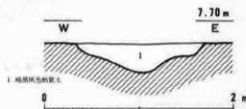


Fig. 72 SD1土層断面実測図 (1/40)

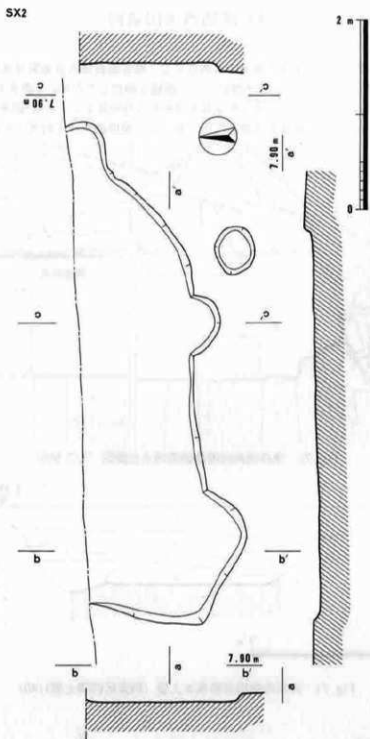


Fig.73 SX2実測図 (1/40)

(3) 小結

今回の調査では溝1条と不明遺構1基のみであった。出土遺物が皆無であり、遺構の時期等を判断し得なかった。また、調査中に現地の表土から白磁片と土師器片を採集したが実測できない小片であり、図示していない。

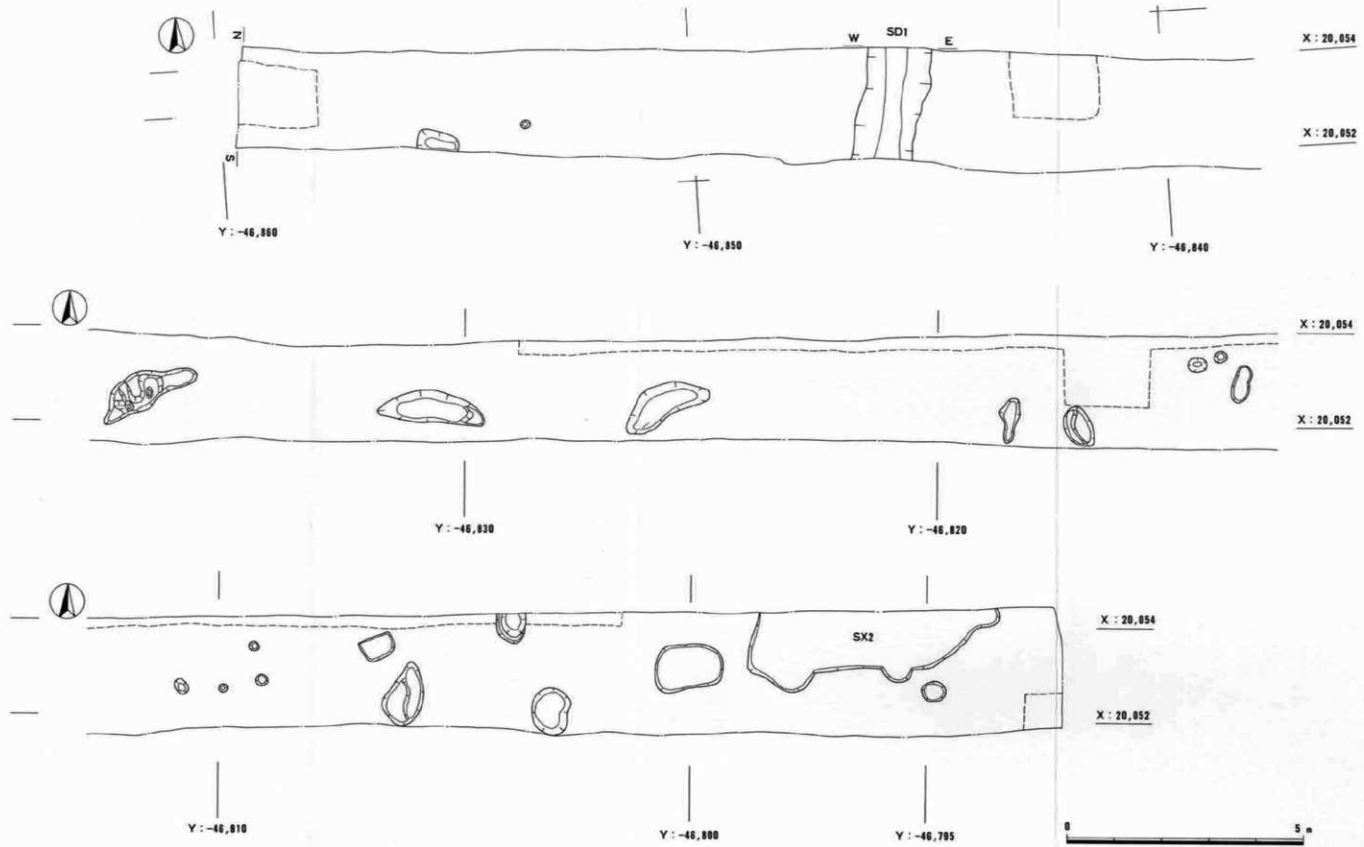


Fig. 74 津島西美田遺跡遺構全体実測図 (1/80)

11. 志垣添遺跡

(1) はじめに (Fig.75)

当遺跡は筑後市大字志垣添54外に所在し、標高8m位の沖積性低地上に立地する。老人保健施設建設に伴う発掘調査で、調査面積は623㎡、調査期間は平成10年9月9日から同年10月21日まで実施した。この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、重機は(有)福島重機、空中写真撮影は(有)空中写真企画に委託、調査は小林勇作が担当した。

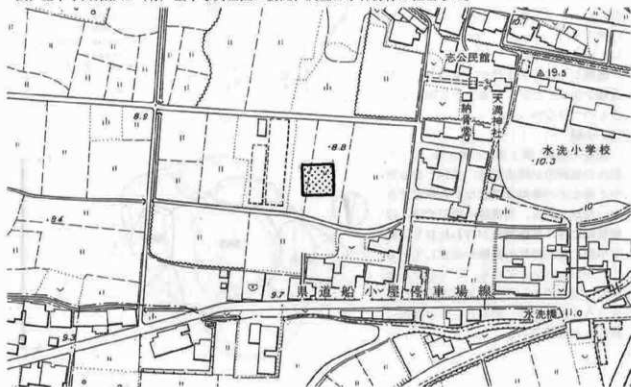


Fig. 75 志垣添遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

溝

SD1 (Fig.77)

調査区の南端で検出した東西方向の溝である。ほぼ直線的に延びる溝で、約16.0m分を確認した。幅は0.30m前後、深さは0.12m前後を測り、埋土は黒茶色粘土の単一層であった。遺物は土師器(坏)を僅かに認めた。

土壌

SK2 (Fig.76, Pla.39)

調査区の北西側で検出した長方形形状の土壌で、主軸はN-8°-Eである。遺構の中央部が最も深く、両側にテラスを呈する。長軸1.66m、短軸0.42m、深さは0.17~0.44mを測る。遺物は弥生土器(甕)が僅かに出土した。

SK5 (Fig.76, Pla.39)

調査区の北側中央で確認した不定形な土壌で、SP6に切られ、SK7・SP8・樹木根痕を切る。遺構底部は凹凸が著しく、埋土は濃黒茶色粘質土を基調とする。遺物は土師器(片)が認められた。

SK7 (Fig.76, Pla.39)

SK5に切られるように検出した土壌で、深さは0.21~0.36mを測る。暗黒色土を基調とした自然堆積で、遺物は出土していない。

ピット

SP6 (Fig.76, Pla.39)

SK5を切るように検出された。径は0.46m前後、深さは0.22mを測る。出土遺物は皆無であった。

SP8 (Fig.76, Pla.39)

SK5に切られるように検出した楕円形状のピットで、径は0.18mを測る。遺物は出土していない。

(3) 出土遺物

遺構からは弥生土器や土師器といった遺物が出土したが、残念ながら図示しているものではなかった。

(4) 小結

調査の結果、溝1条、土壌3基、ピット、樹木の痕跡等が検出され、主体となる溝や土壌などの時期は残念ながら断定できない状況である。当遺跡の周辺では、ほ場整備に伴う発掘調査が行われおり、縄文早期～弥生時代の遺跡が点在していることがわかってきている。こうしたことから、調査前からその成果が期待される場所であったが、結果としては不調に終わった次第である。

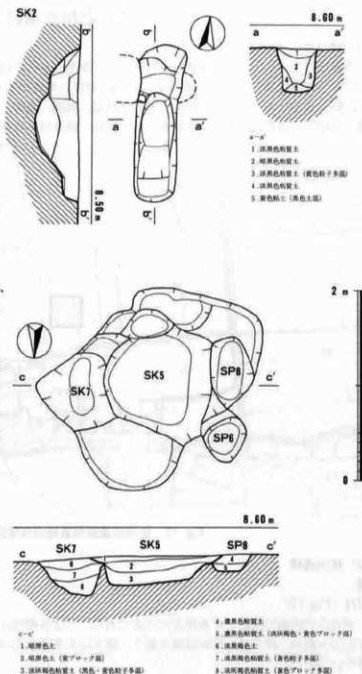


Fig.76 土壌、ピット実測図 (1/40)

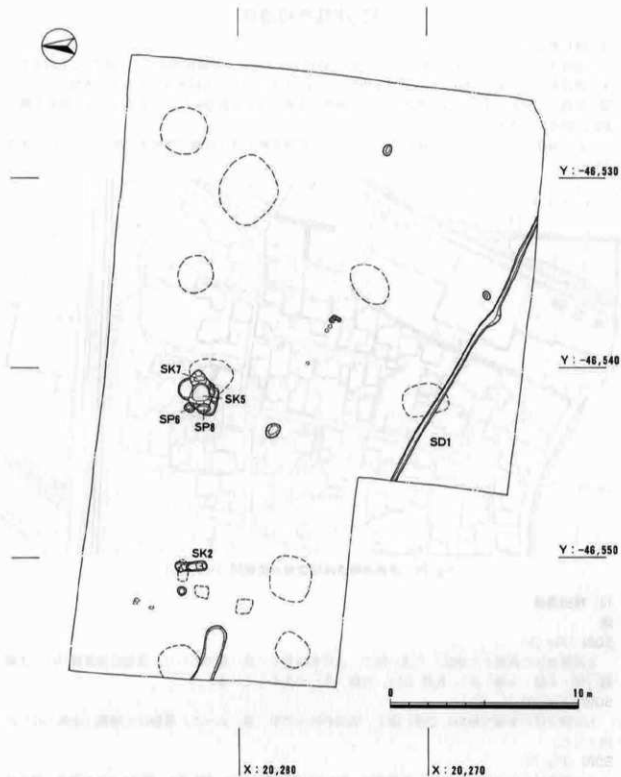


Fig. 77 志垣添遺跡遺構全体実測図 (1/200)

12. 津島洲崎遺跡

(1) はじめに (Fig. 78)

当遺跡は筑後市大字津島字洲崎1029に所在し、標高7～8m位の沖積性低地上に立地する。宅地造成に伴う発掘調査で、調査面積は391㎡、調査期間は平成11年4月28日から同年6月8日まで実施した。この間、重機による表土等の除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、重機は(有)福島重機に委託、調査は小林勇作が担当した。

なお、遺構は上・下の2面で確認されたため、上面調査終了後は重機で堆積土を除去し、下面の調査を続行した。

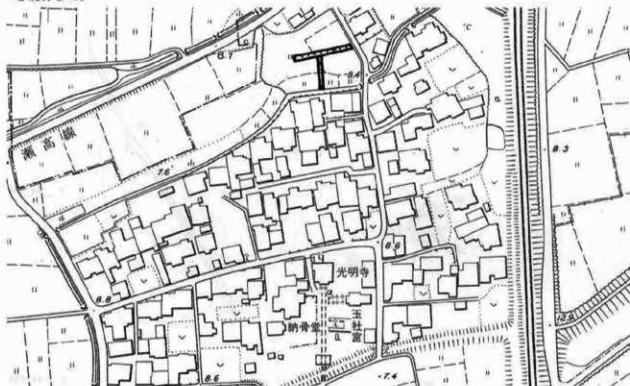


Fig. 78 津島洲崎遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 検出遺構

溝

SD01 (Fig. 79)

上面調査区の西側から検出した浅い溝で、淡灰色砂質土の単一層であった。遺物は須恵器(片)、土師器(坏・土鍋・土鍾・片)、瓦器(片)、青磁(片)が出土している。

SD02 (Fig. 79)

上面調査区の東端で検出した浅い溝で、淡灰色砂土の単一層であった。遺物は土師器(小皿・片)が出土した。

SD03 (Fig. 79)

上面調査区の中央部で検出した東西溝で、約2.1m分を確認した。幅1.3m、深さ0.2mを測り、埋土は淡灰褐色砂土の単一層であった。遺物は土師器(坏・片)が出土した。

SD04 (Fig. 79)

SD03の南側で検出した東西溝で、約2.1m分を確認した。幅3.6m、深さ0.3mを測り、埋土は淡灰褐色砂土の単一層であった。遺物は土師器(土鍋・片)、瓦器(碗)、陶器(片)、黒曜石(片)が出土した。

ところで、SD04は下面に存在している遺構を確認するきっかけとなった溝である。上面調査も終盤を

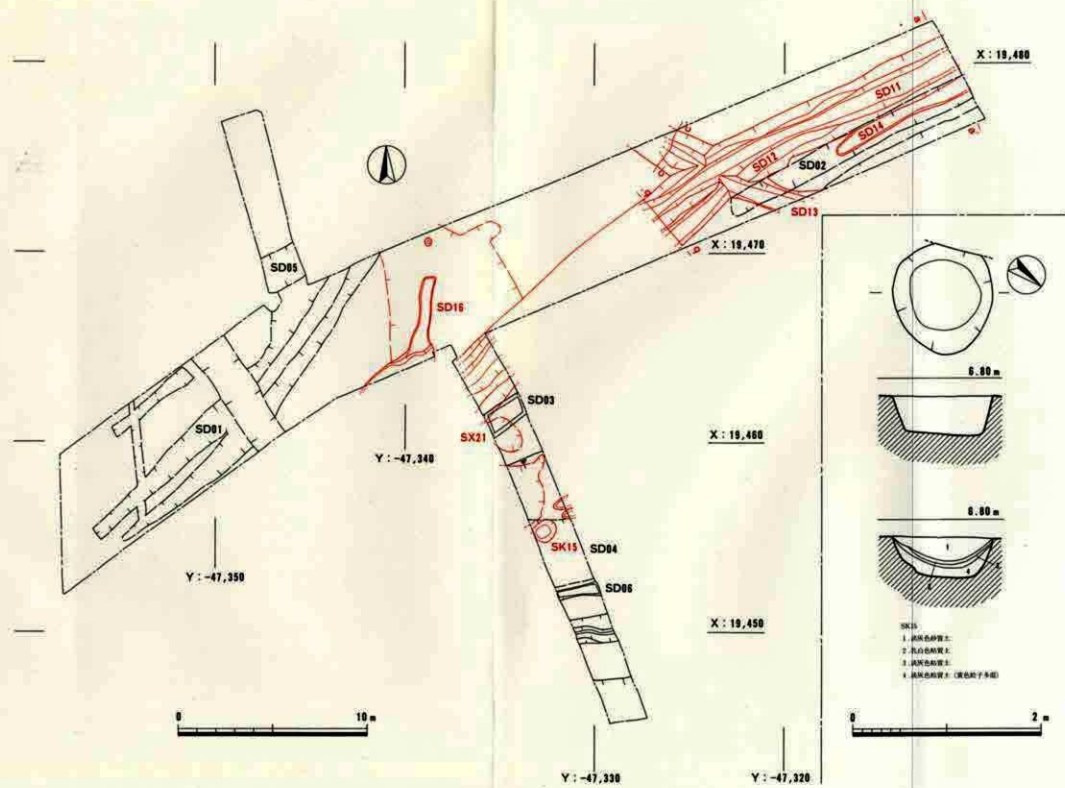


Fig. 79 津島洲崎遺跡遺構全体実測図 (1/200)

Fig. 80 SK15実測図 (1/40)

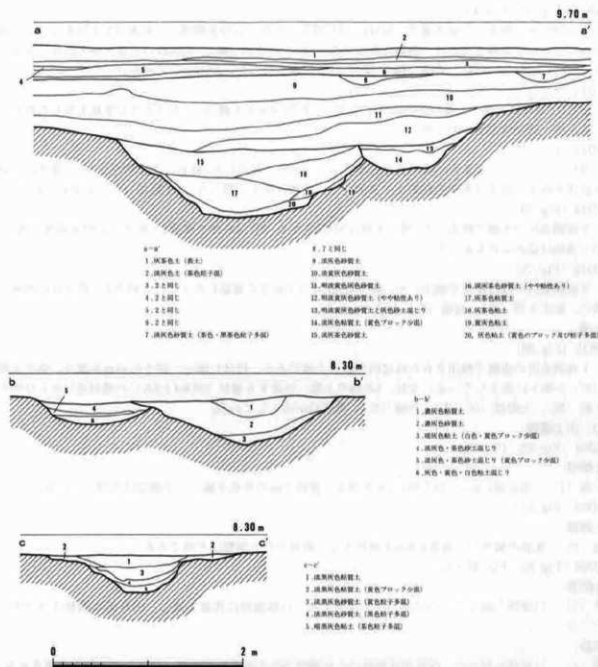


Fig.81 溝土層断面実測図 (1/40)

迎えた頃、SD04溝底から新たな遺構 (SK15) が確認されたのである。周囲で確認されている遺構面とは明らかに異なることから周囲の状況把握を努めた結果、下面での遺構が存在することがわかった。このことから、急ぎ関係者との協議を行い、下面調査を実施する運びとなった。

SD05 (Fig.79)

上面調査区の中央部やや西側で検出された。遺物は弥生土器 (片)、土師器 (小皿・片)、青磁 (片)、染付 (片) の他にタイルやガラス片を認めており、遺構は重機等によって掘削されている攪乱された溝である。近所の方に聞いたところ、極最近まで使用されていた溝であったことがわかった。

SD06 (Fig.79)

SD04の南側で検出した浅い溝で、約2.2m分を確認した。出土遺物は皆無であった。

SD11 (Fig.81, Pla.43)

下面調査区で検出した東西溝で、SD12・13を切る。約30.0m分を確認し、断面はV字状を呈する。流水を伴った自然堆積と思われ、遺物は弥生土器(甕)、須恵器(鉢)、土師器(小皿・環・高環・土鍋・片)、瓦質土器(すり鉢)、青磁(椀)、染付(椀)、銅製品(片)が出土している。

SD12 (Fig.81)

SD11に切られた溝で、溝の途中はSD13を切る。約30.0m分を確認し、緩やかなU字状を呈した断面である。出土遺物は皆無であった。

SD13 (Fig.81)

SD11・12を直行するように検出された溝で、約7.4m分を確認した。断面は逆台形状を呈し、深さは0.48m前後を測る。埋土は黒灰色粘質土を基調とし、遺物は弥生土器(片)、土師器(片)が認められた。

SD14 (Fig.79)

下面調査区の東側で検出した。溝の北側はSD11を切る。約7.4m分を確認し、深さは0.07m前後と浅い。出土遺物は認められなかった。

SD16 (Fig.79)

下面調査区のほぼ中央で検出した。溝の北側は約4.6m分を確認したところで終息し、深さは0.06mと浅い。弥生土器(片)、白磁(片)が認められた。

土壇

SK15 (Fig.80)

下面調査区の南側で検出されたほぼ円形状の土壇である。径は1.06m、深さ0.40mを測り、弥生土器(片)が僅かに出土している。なお、SK15の上部に位置する層位(SD04とSK15の境付近)からは弥生土器(甕)、土師器(環・片)、白磁(片)、黒曜石が出土している。

(3) 出土遺物

SD01 (Fig.82, Pla.43)

土師器

土鎌(1) 現存長2.6cm、最大径1.2cmを測る。直径3mmの穿孔を施し、下端部は欠損している。

SD03 (Fig.82)

土師器

椀(2) 底部の細片で、底径6.6cmを復原する。磨耗のため調整は不明である。

SD04 (Fig.82, Pla.43・45)

土師器

甕(3) 口縁部の細片で、口径25.0cmを復原する。口縁端部に沈線を施し、内外面の調整はヨコナデである。

瓦器

椀(4) 口縁部の細片で、内外面は磨耗のため調整不明であるが、内面一部にミガキ痕が看取される。

石器

細石刃(22) 石材は黒曜石製で、現存長は1.3cmを測る。

SD11 (Fig.82, Pla.43~45)

須恵器

鉢(5・6) 口縁部の細片で、断面は三角状を呈する。内外面の調整はヨコナデで、胎土に黒色粒子が少量含まれる。東播系と思われる。

土師器

皿(7) 口径13.3cm、底径8.2cm、器高2.9cmを復原する。外底は糸切りで、内外面の調整はヨコナデである。

環(8~10) 8は口径12.5cm、底径6.7cm、器高3.7cmを測る破片である。外底は糸切りで、内外面はヨコナデの調整を施す。体部内面下位に墨書痕、見込みの一部に顔料が看取される。9・10は底部の細片

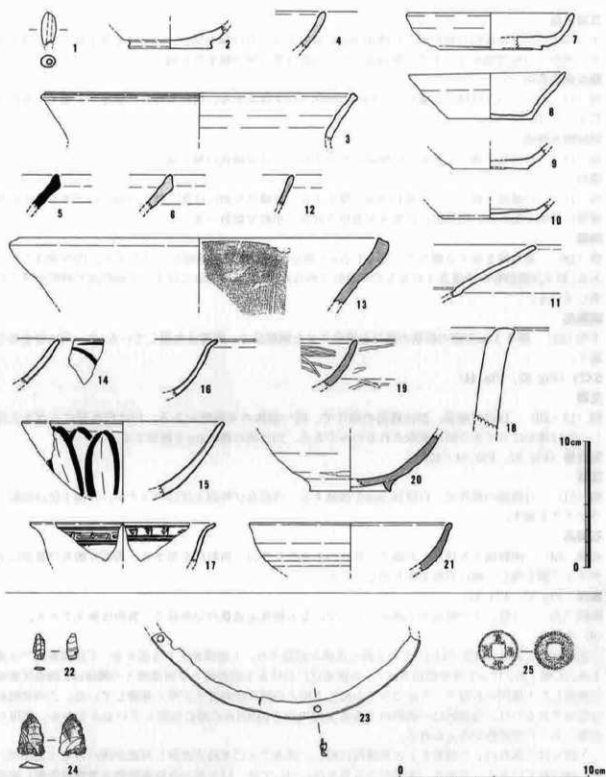


Fig.82 津島洲崎遺跡出土遺物実測図 (1/2・1/3)

で、外底は糸切りである。内外面の調整はヨコナデである。9は底径6.0cm、10は底径7.4cmを復元する。
 高坏 (11) 口縁部の細片で、磨耗のため調整不明である。
 瓦器
 碗 (12) 口縁部の細片で、内外面はヨコナデ調整を施す。

瓦質土器

すり鉢 (13) 口縁部の細片で、口径30.0cmを復元する。素口縁を呈し、内面に4本単位のすり目を施す。調整は口縁端部がヨコナデ、外面はナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。

龍泉窯系青磁

碗 (14・15) 14は口縁部の細片で、15は口径16.0cmを復元する。何れも外面に鎊連弁を施す。森田分類1-5・b。

朝鮮窯系青磁

碗 (16) 口縁部の細片である。口縁部はやや外反し、淡青緑色の釉を施している。

染付

碗 (17) 口縁部の細片で、口径14.6cmを復元する。口縁部外面には雷文帯、内面には文字を上下の界線間に呉須で描かれ、内外面には貫入が看取される。小野分類B-Ⅱ。

陶器

甕 (18) 素口縁を呈する細片で、厚さ1.7cmを測る。調整は口縁端部がへラケズリ、内外面はナデである。胎土は微砂粒が少量含まれるものの良好であるが、内外面の器表には1~2mm程度の砂粒が多く付着している。

銅製品

不明 (23) 厚さ1mm未満の板状の部材を湾曲させた銅製品で、両端は欠損している。2ヶ所に留金を施す。

SX21 (Fig. 82, Pla. 44)

瓦器

碗 (19・20) 19は口縁部、20は底部の細片で、同一個体の可能性がある。19は内外面にミガキを施し、20は僅かにコテあて痕が看取されるのみである。20は高台径6.4cmを復元する。

包含層 (Fig. 82, Pla. 44・45)

瓦器

碗 (21) 口縁部の細片で、口径16.0cmを復元する。内面及び外面上位はヨコナデ、外面下位は回転へラケズリを施す。

石製品

石鐮 (24) 両脚端を欠損した石鐮で、袈りのある長二等辺三角形を呈する。表面片側及び裏面にネガティブ面を残し、縁に刃部を作り出している。

表採 (Fig. 82, Pla. 45)

銅銭 (25) 「寶」字の最後の3画が「ハ」字になる新寛永通寶の完形品で、裏面は無文である。

(4) 小結

先述したとおり、調査では上・下の2面で遺構が確認され、上面調査区では溝8条、下面調査区では溝5条、土壌1基、ピット等が検出された。当調査区における上面遺構と下面遺構との関係は、調査区東端で観察した土層図から窺うことができ、上面と下面との間には砂質土が厚く堆積していた。この状況から想定されるのは、当地区は一級河川である矢部川から約500mの所に位置していることから、河川の氾濫にあった可能性が考えられる。

矢部川は「暴れ川」の別名をとる筑後川に対し、洪水ごとに水路を変更し川底が浅いので「天井川」とも呼ばれていたようである。矢部川の災害状況については、「『矢部川改修履歴調査業務報告書』建設省九州地方建設局 筑後川工事事務所 昭和51年2月」に記述があり、古くは江戸時代からの主要な災害等について報告されている。報告書によると、家屋・田畑・人等に被害をもたらした主要な洪水は、江戸時代で6回、明治から昭和にかけて6回で、この他小規模の災害をあわせると十数回にも及んでいることが記されている。

さて、今回検出した遺構の時期は、下層面が13C後半~14C代、上層面では14C代以降が比定されることから、当該期における災害状況の記録と照らし合わせることはできないが、報告書の被害状況からも

わかるように、天候不順による矢部川の氾濫は江戸時代以前にも幾度となくあったことが想定されるため、矢部川と近距離にある当遺跡周辺にもその影響があった可能性は十分考えられる。

付記

現場開始とともに、よく顔を覗かせていた一人の老父がいた。大字津島に在住していた故人北島良雄氏である。現場によく足を運んで、現場周辺における昭和期を中心とした村の文化財などについて詳しい話をされていたいわば村の歴史研究者といったところで、調査にあたっては多大なご協力を頂いた。調査実施期間中は作業員との世間話で盛り上がった場面もあり、一時の和やかな雰囲気を楽しむことができたことを覚えている。

ところが、現場が終了して数ヶ月経ったある日、突然、故人の訃報を受けた次第である。

筆者は本稿を締めくくるにあたり、この場を借りて故人のご冥福をお祈りしたい。



13. 高江シウジ遺跡

(1) はじめに (Fig. 83)

当遺跡は筑後市大字高江シウジに所在し、標高7.5m位の低位段丘上に立地する。铁塔建設に伴う工事の際、平成6年9月に遺物が認められたとの連絡を受けたので立会をしたところ、表土直下から遺物が確認された。幸いにも遺跡に影響のない範囲での工事であったため、発掘調査には至っていない。以下は出土した遺物を紹介する。



Fig. 83 高江シウジ遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

(2) 出土遺物

弥生土器 (Fig. 84, Pla. 46)

壺 (1~3) 1は口縁部の細片で口径22.2cmを復原する。口縁部は朝顔状に外反し、口縁部と体部のくびれ部には台形状の断面を呈した1条の貼付突帯が施される。口縁端部及び貼付突帯には刻み目文を施す。2は体部の細片で外面には丹塗りを施す。断面が台形状を呈した1条の貼付突帯を施し、縦方向の暗文が認められる。3は底部の細片で底径9.5cmを復原する。

器台 (4) 口径15.0cm、底径17.0cm、器高19.3cmを測る。

(3) 小結

周辺では弥生~古墳時代の集落跡である高江遺跡や中世の区画溝を検出した高江原口遺跡が確認されており、当遺跡はこの2遺跡と同じ丘陵上の最西端に位置している。今回の出土遺物により、弥生時代中~後期にかけての遺跡が周辺に展開していると考えられ、今後の調査が待たれる。

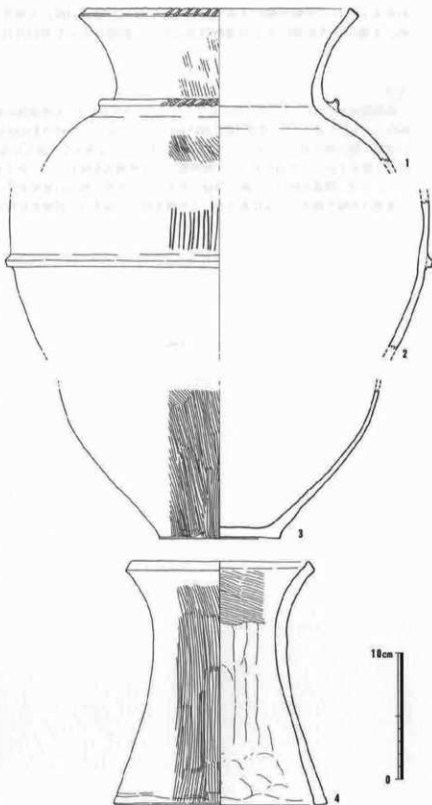
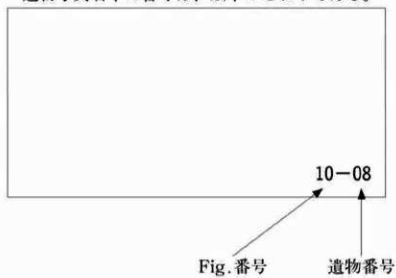


Fig. 84 高江シウジ遺跡出土土器実測図 (1/3)

PLATE

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。





下北島櫛引遺跡調査区全景（空中写真：真上から）



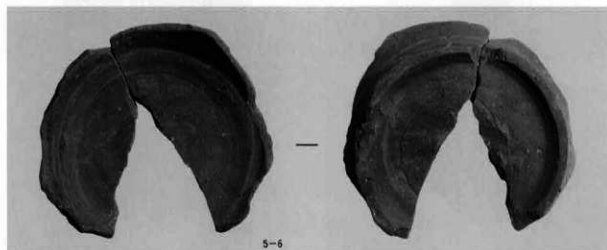
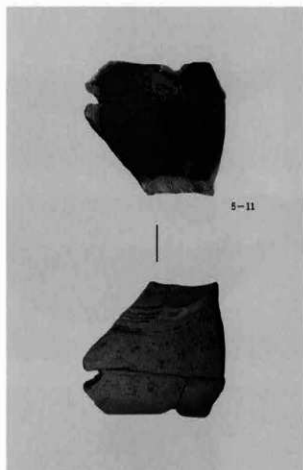
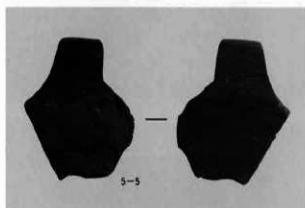
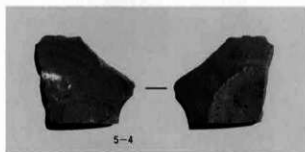
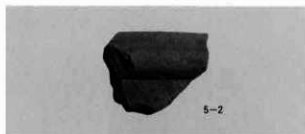
下北島櫛引遺跡遠景（空中写真：西から）

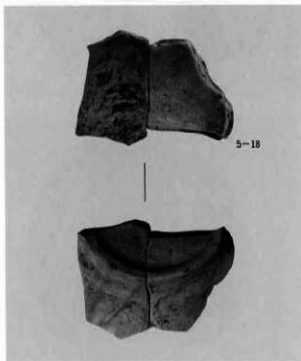
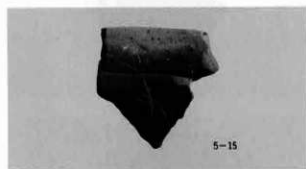
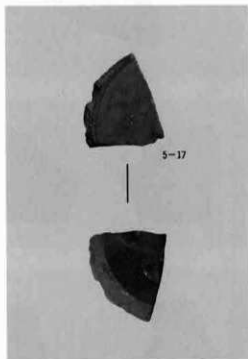
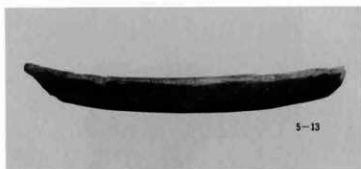
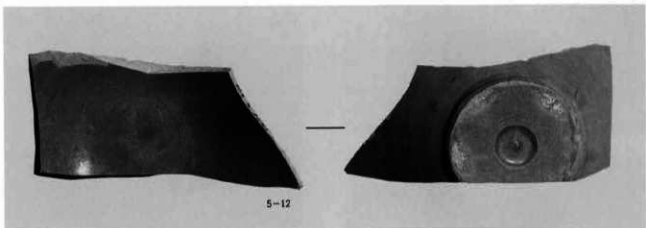


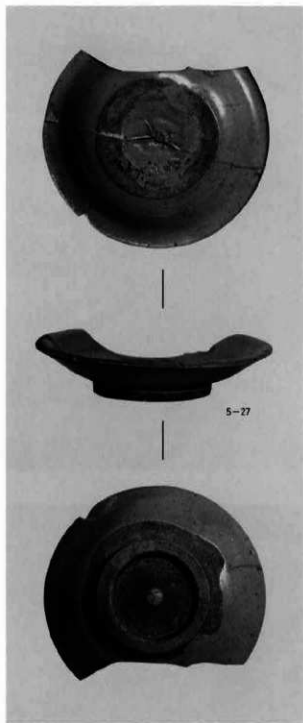
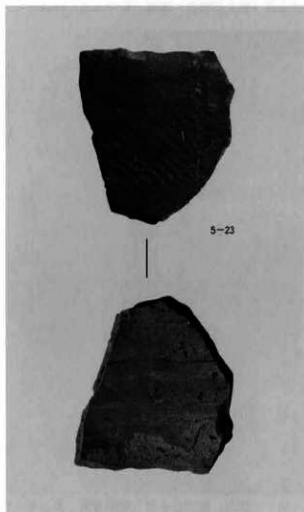
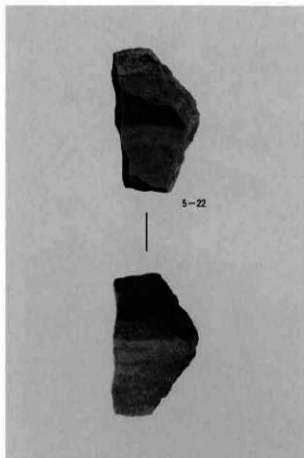
SK10遺物出土状況 (東から)



SK10遺物出土状況 (西から)









水田山伏遺跡（第1次調査）遠景（空中写真：南西から）



水田山伏遺跡（第1次調査）調査区全景（空中写真：真上から）



15B25（空中写真：真上から）



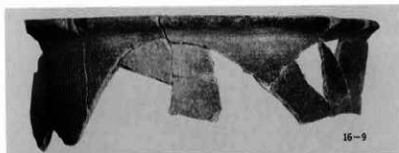
14-3



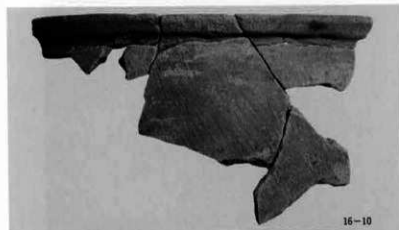
14-4



16-5



16-9



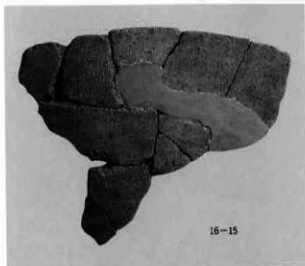
16-10



16-12



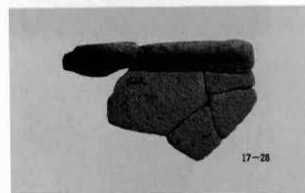
16-13



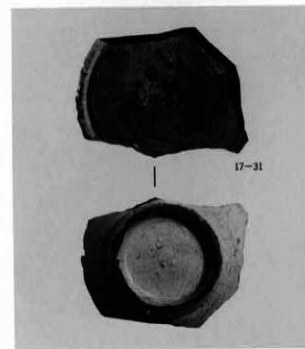
16-15



17-25



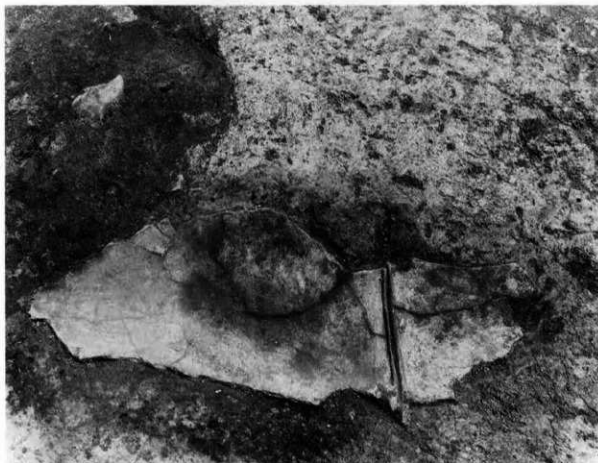
17-28



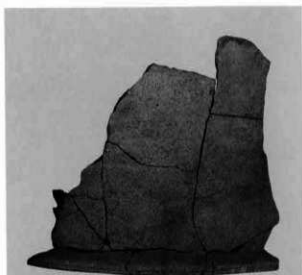
17-31



水田山伏遺跡（第2次調査）調査区全景（空中写真：真上から）



2ST1（南から）



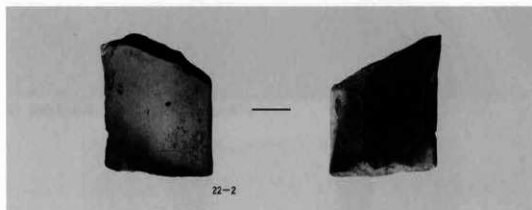
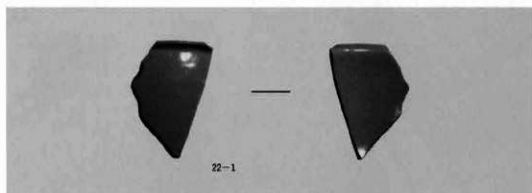
19-1



19-2



長浜遺跡 (第1次調査) 調査区全景 (東から)

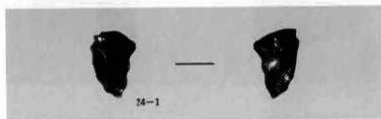




長浜鎧遺跡 (第2次調査) 調査区全景 (東から)



長浜鎧遺跡 (第2次調査) 調査区全景 (東から)



24-1



長浜燈遺跡 (第3次調査) 調査区全景 (北から)



長浜燈遺跡 (第3次調査) 調査区全景 (南から)



3SX3 (西から)



3SK2 (西から)



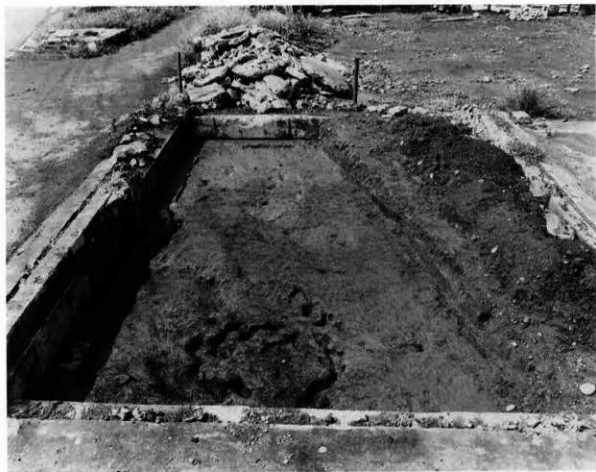
3SK4（北から）



3SK6（東から）



鶴田大南遺跡調査区A全景（北から）



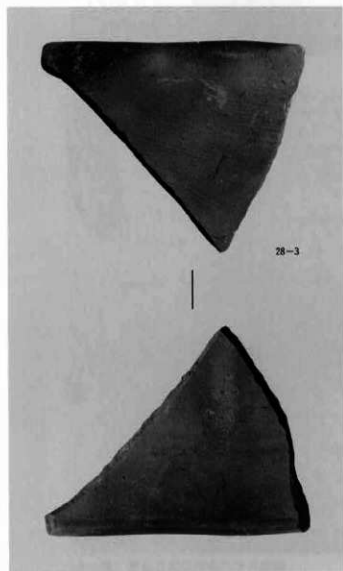
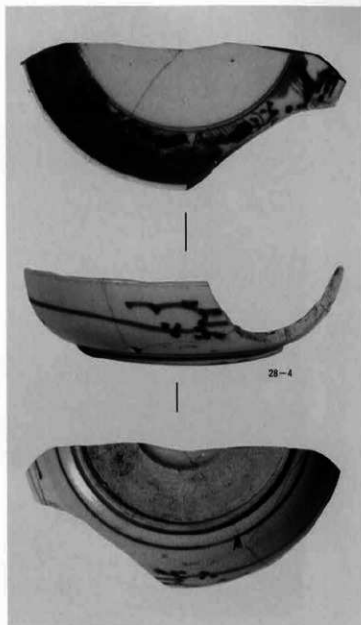
鶴田大南遺跡調査区B全景（南から）



鶴田大南遺跡調査区C全景（南から）



鶴田大南遺跡調査区D全景（南から）





水田下桜町遺跡調査区全景（空中写真：真上から）



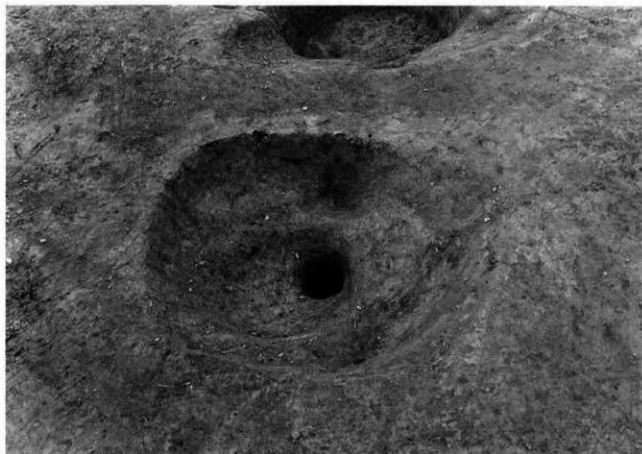
水田下桜町遺跡調査区全景（空中写真：西から）



SK01検出状況（東から）



SK01遺物出土状況（北から）



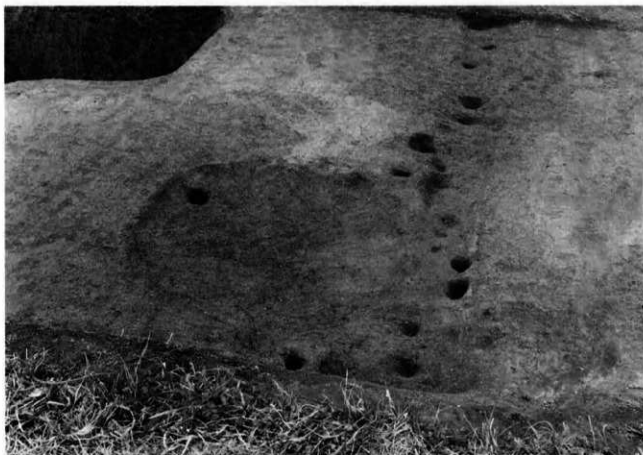
SK01発掘状況（北から）



SK05、SD10・33（南西から）



SK05、SD10・33土層観察（北から）



SK06、SD07（南から）



SK25 (西から)



SE15 (東から)



SE20 (南東から)



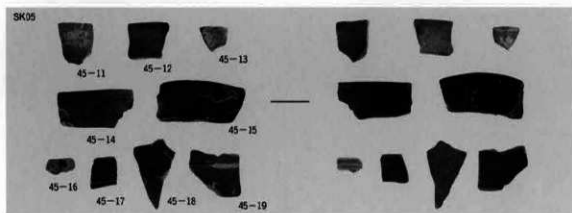
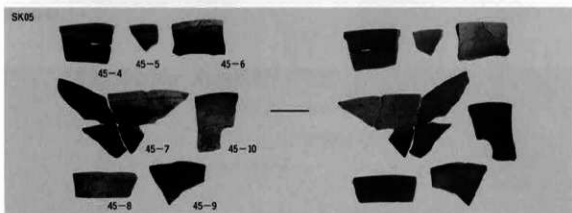
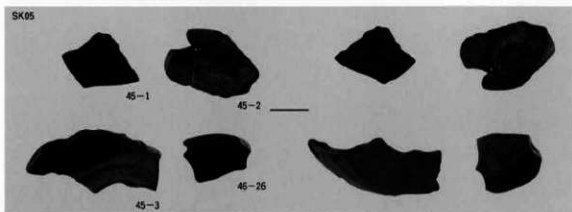
SE35 (南西から)

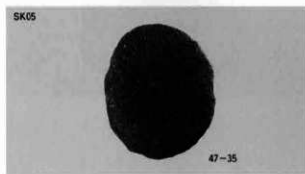
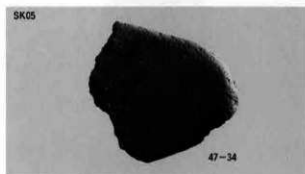
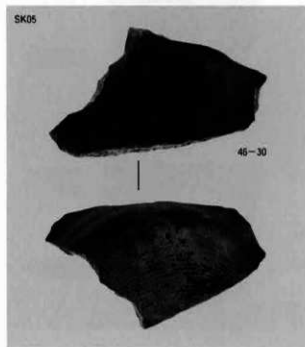
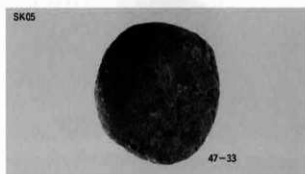
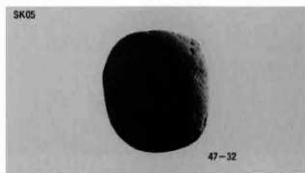
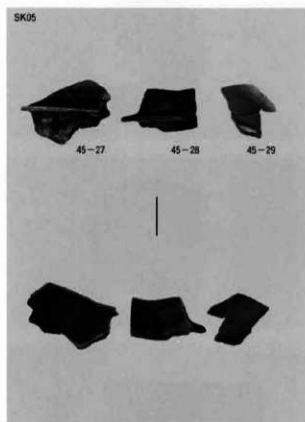
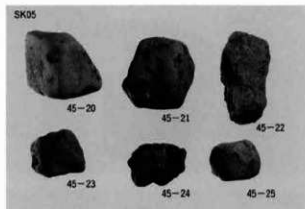


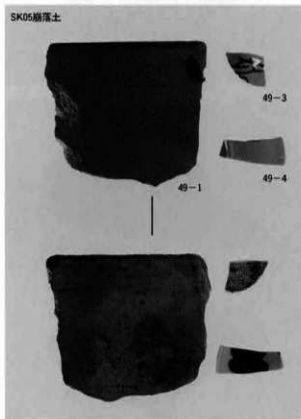
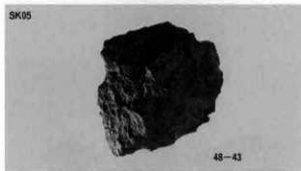
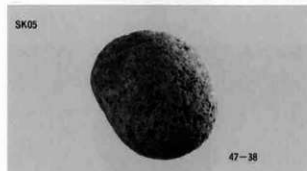
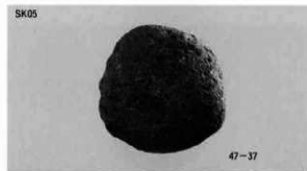
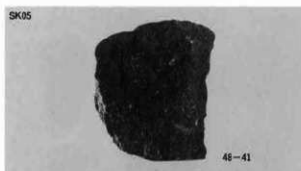
SE40 (西から)

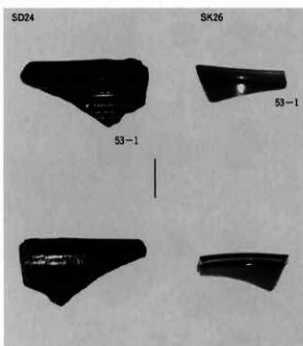
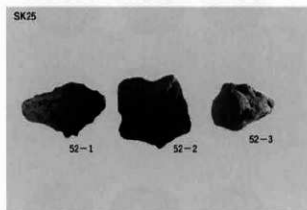
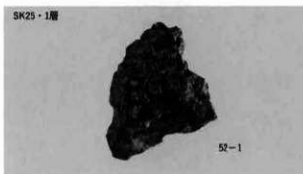
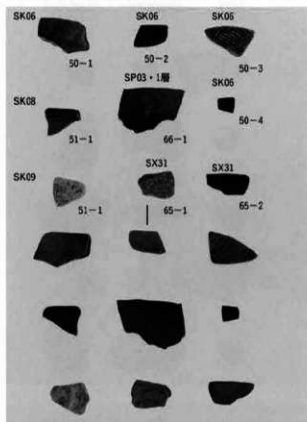
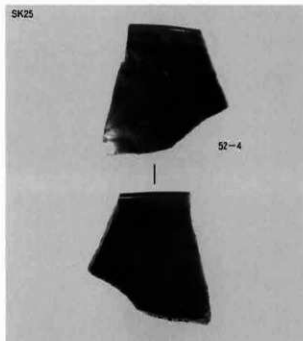


SP02・03・04 (東から)





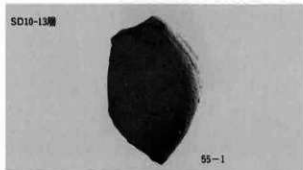




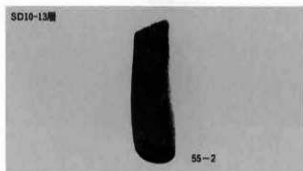
SD10-12層



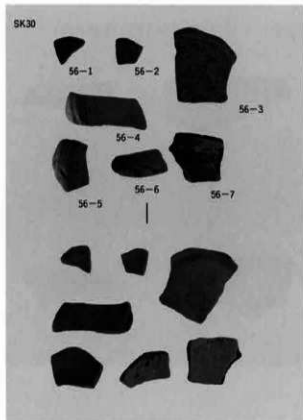
SD10-13層



SD10-13層



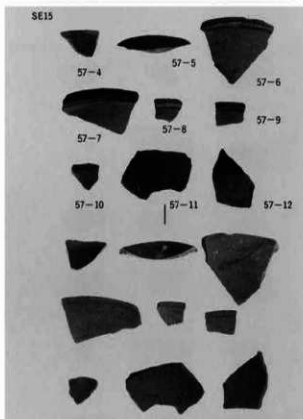
SK30



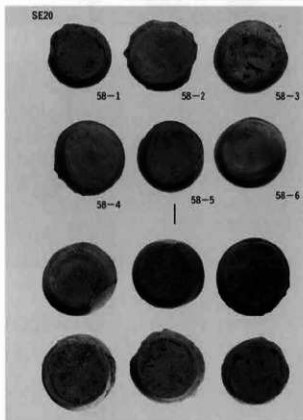
SD30

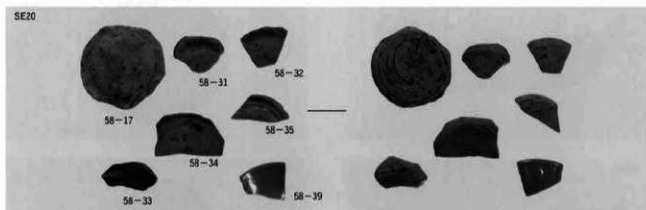
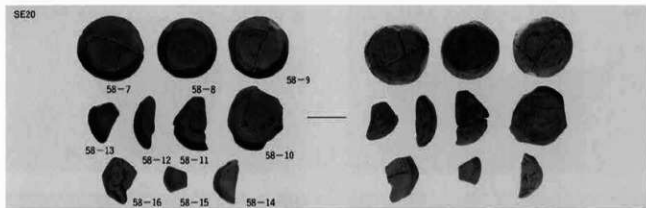


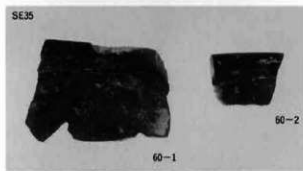
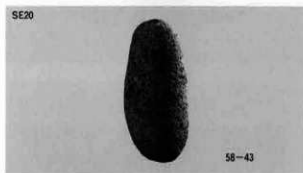
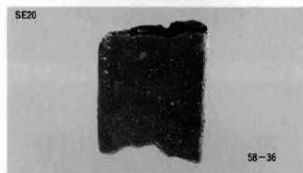
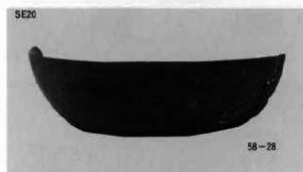
SE15

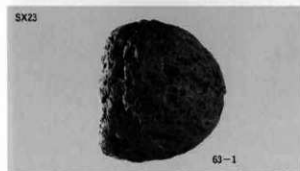
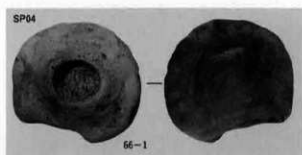
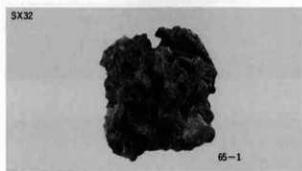
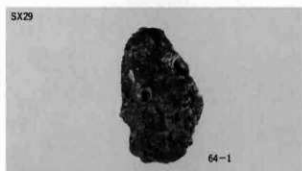


SE20







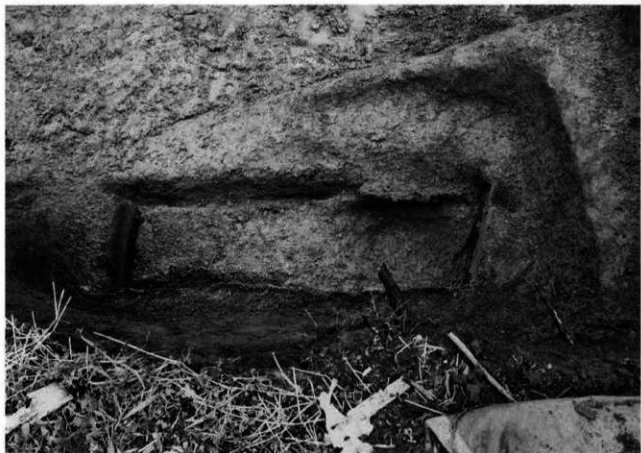




ST1箱式石棺検出状況（西から）



ST1箱式石棺蓋石除去（西から）



ST1箱式石棺側石除去（南から）



ST1箱式石棺完掘状況（西から）



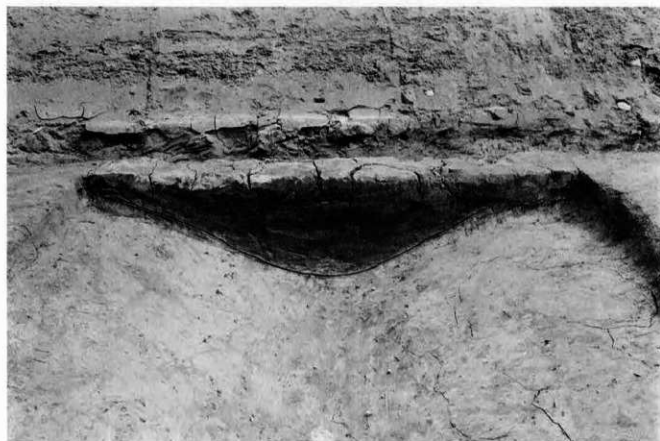
津島西美田遺跡調査区全景（西から）



津島西美田遺跡調査区全景（東から）



津島西美田遺跡基本土層（東から）



SD001土層断面（南から）



志垣添遺跡調査区全景 (空中写真：北から)



志垣添遺跡調査区全景 (空中写真：真上から)



SK2 (南から)



SK5・7、SP6・8 (南から)



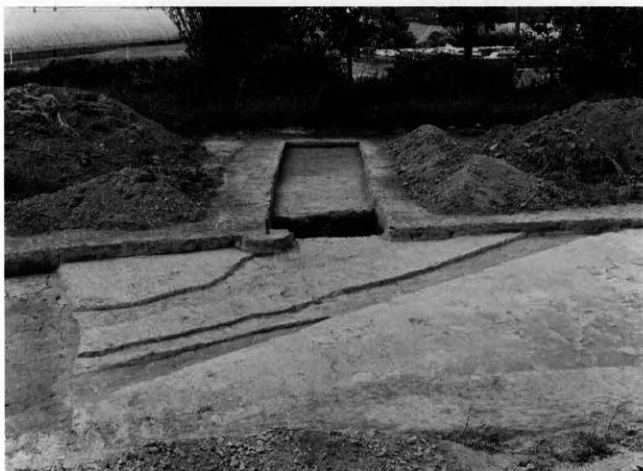
津島洲崎遺跡調査区全景 (上面：東から)



津島洲崎遺跡調査区全景 (上面：西から)



津島洲崎遺跡南側調査区 (上面：北から)



津島洲崎遺跡北側調査区 (上面：南から)



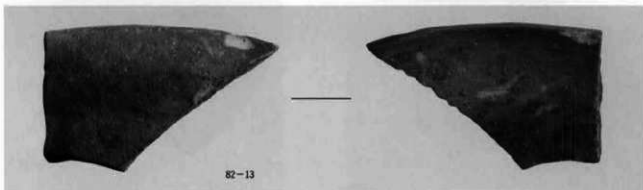
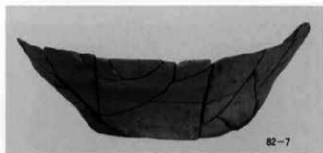
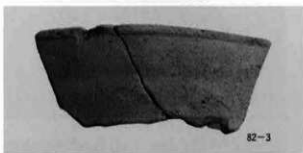
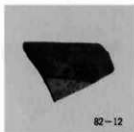
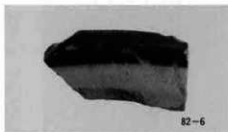
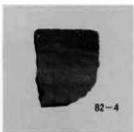
津島洲崎遺跡調査区全景 (下面：東から)

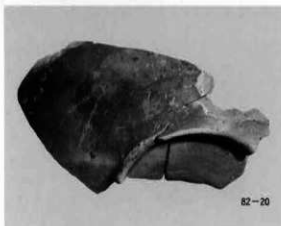
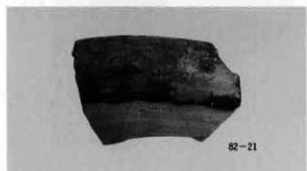
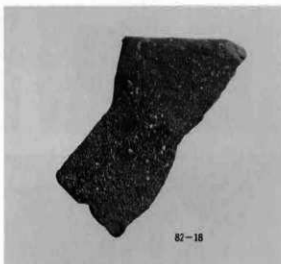
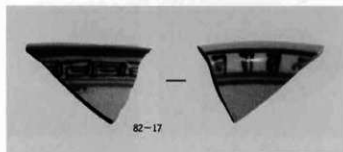
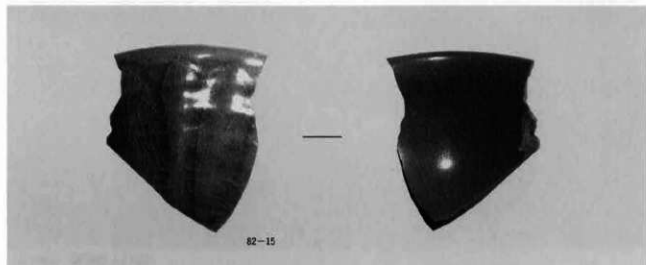
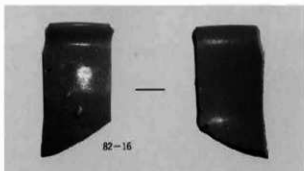
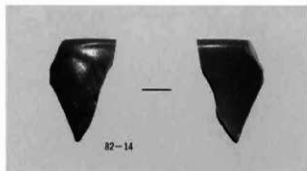


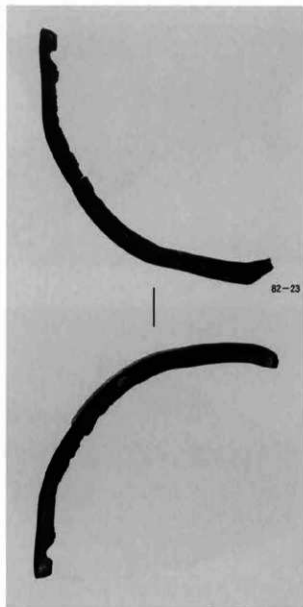
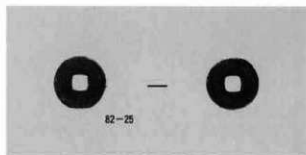
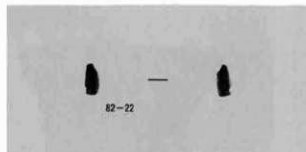
津島洲崎遺跡南側調査区 (下面：北から)

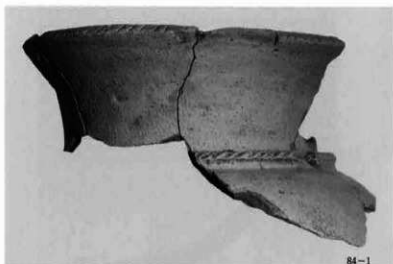


SD11土層観察（西から）









筑後市内遺跡群Ⅱ

筑後市文化財調査報告書

第33集

平成13年3月31日

発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市天神1-1-32